

高を破らんよりも先づ野球の中心を我等に移さんと企てたのである。早大野球部の父たる安部磯雄氏は、この見地から慶應に挑戦することを許されたので、その使者として三田山上を訪づれた者は押川清と記者の二人である。

これより先、記者は再三再四三田を訪づれ、宮原其他の人々と面識があるので、會見は少しも四角張る所なく、甚だ打解けた調子で頗る順潮に進んだ。三田派の人々は、即座に於て會戰を約束されたかの如く思ひやられる。その頃三田山上には寄宿舎に附屬する大きな浴室があつて、塾の運動家は汗をかけた後悉く此所に來て入浴する事になつてゐた。別室には西洋菓子やラムネ(サイダーはまだなかつた)など賣る所があつて、運動家は快よき温浴をした後、この室で雑談に耽る態は、如何にも和氣霽々として、三田の學風の小縮圖とも見られる。押川と記者とはこの浴場の一室に招ぜられて萬事の打合せを終り、いよいよ十一月二十日慶應方のグラウンドに於て第一回戰をなし、其後はグラウンドを交代して、毎年春秋二回に舉行し、審判は一高若しくは學院の如き第三者から選ぶ規定の下に意義ある握手は行はれたのであつた。思へば二十三年の昔である、現今の六大學リーグ選手の中には、まだ生れてゐない人もあるであらう。

私學の二大權威

當時の新聞社には今日の如き専門的運動記者がなかつたので、斯様な材料は、特筆大書すべき社會種として取扱ひ「私學の二大權威戰ふ」とか「未曾有の大野球戰」と書かれた晴々しい文字は、勢よくどれもの紙上に躍つてゐた「果して世の期待に添ふであらうか」私共の間にはかうした杞憂が附纏つて、何か飛んだ事を申込んだやうな感もないではなかつた。一方慶應は斯界の老舗である、恐らく鎧袖一觸の豫想でこの試合を引受けた事と思はれる。かくて審判には當時一高の投手たりし黒田氏を煩はし、我等は懸命の練習にとりかゝつたのである(其頃の審判は悉く一人で投手の背後に立つたもので、複審は早大渡米後の出來事である)

其頃の選手のスタイルは甚だ田舎臭いもので、ユニホームと云へば、せいゝ二圓位の白のリンネルで、黒羅紗の横文字を胸に縫ひつける事は今日と相違はないが、勿論靴は穿かず、足袋はだし脚胖がけと云ふいで立であつた(スパイクの靴は早大の渡米みやけ)横文字の恰好は、慶應は今に當時の様式を傳へてゐるが、早大は初め飾文字のW一字を左胸につけた、其後渡米前に至りて前市俄古大學投手メリーフィールド氏のコーチを受け同大學のユニホームに習つてWASDA

と全部を縫ひつけ、それが今日に傳はつてゐる。早大が蝦老茶色を以て野球部の色としたのも市俄古大學のものを模倣したのである。

第一戦の開始

かくて十一月二十日綱町に於て早慶對校の第一回戦が開かれた。早稻田から三田迄電車もなければ馬車もなく、人力車に乗る金もないので、私共はテク／＼歩いた事を記憶する。但しその頃の監督たる弓館小鱈君丈は、バットを入れた袋を以て人力車に乗つたので「バットになり度いな」など云ふ選手もゐた。試合は双方よく打ち、甚だ面白い場面が何回となく繰返された、投球術も今日の如く進んでゐなかつた爲めか、三田の櫻井君も、早大の河野君も可なり多くの安打を浴びせられた。翌日の或新聞紙は「薪を割るやうに打ち合ふ」と形容してゐたが、成程うまい事を云つたものである。試合は七回迄八對七で早大がリードし、遂に十一對九で凱歌は三田側に擧つた。八回で四點取られたのが、早大にとりて致命傷であつた。先進の大家三田が七回迄早大に押されてゐたと云ふ事は、どれ程フワンを喜ばせたであらうか、蓋し想像以外のものがあつたであらう。

フワンと云へば當時は入場料を一文も取らなかつたにも拘はらず、野球の趣味が未だ普遍してゐなかつた爲めか、三田の狭いグラウンドでもギュー／＼詰めるやうな事は決してなかつた。早慶戦中止前の試合などは、可なり多くの興奮をフワンに與へたとは云へ、見物人の数はせい／＼四五千であつたらう。今日の試合に相當高價なる入場料を取りながらアノ盛況を呈するに比すれば古い文句だが隔世の感なき能はずである。

早大は球界の成金

三十七年の春行はれた第二回戦になると、早慶チームに對する世間の見方が大分變つて來た。何となればこの年の春には、早慶が相前後して當時の覇者一高を連敗させ、更に最後の覇權が私學の二頭目によりて争はれんとするのであるから、フワンの期待は、到底第一回戦に於て見るが如き漫然たるものであらう筈はない。何れが勝つにしても天下分け目の戦、早慶戦たるものは二歳たらずして爾く世の張目を買ふに至つたのである。茲に至る原因は、共に由緒ある二大私學を背景とするからであらうが、一方彼等兩チームの力量が殆んど互角の位置に達した事も理由のとして認めねばならぬ。若しこれより先、早慶共一高に勝てぬならばこれ程の人氣はない、假

令一方のみが勝つたにしても、まだ球界の覇権は向陵を見捨てぬ事になるから、幾分世の思はくも違ふであらう。共に向陵を破つた後の試合と云ふので世間へ送る波紋は大きくなつた。而してこの戦は十三對七で早大の勝利に歸した。第一回には一個の浪人組が三田の老舗に押寄せたやうなものであつたが、二回目には堂々と互角の資格を備へ、而も立派に打勝つて天下の霸王となつた、早大は正に球界の大成金である。

飽く事を知らざる新進の早大チームは、第一理想とするこの國の覇権を握つたので、更にそれを延長して、米國遠征の壯圖を企てるに及んだ『もう一度勝てば米國へ連れて行く』理想無き人生は眞の人生にあらず』と喝破する安部野球部長は、かう云つてチームの猛者を鞭撻したのである。而して早大チームに取りて最も待たるゝ秋が訪づれた時、彼等は美事に三田を再敗せしめて遂に渡米の望みを果したのである。

早慶戦遂に中止

これより先、この計畫は早くも世間に知れ渡つてゐたので、三田は懸命になつて早大を破らうと努めた。フワンにとりてもこの一戦は見逃し難きものであるから、九州邊から見物に來た人さ

へあつた由である。この試合には湧川君が第一回以來プレートに親しんでゐた櫻井君に代つて投球したが、四球連發、早大は碌に打たないで、つまらなく勝つて了つた。早慶戦が前後九回は行はれた中で、これ程力の入らぬものは他に求められない。早大チームは其頃學校に近い牛肉屋に集合して勝祝ひをした。席上選手の一人が安部々長に向つて『これでいよいよ米國へ行けるのですか』と念を押した時、部長は例の切り口上で『無論行けるのです』と立派に答へられたのを記憶する。こんなつまらぬ勝ち方をして、それで米國へ行けるのかと思ふと丸で夢のやうであつた。

第五回戦は早大の渡米前、行李匆惶の間に行はれ一對零で三田が勝ち萬斛の溜飲を下けた。渡米後は三回戦を行ふ事となつたが、これが三回勝負の嚆矢である。然るに早大は第一回に五對零の大敗を招いて甚だしく面目を潰した。早大方の頭には、餘り強いチームとのみ戦つて來たので、慶應が莫迦に弱々しいものに見えてならなかつた。必ずしも慢心と云ふのではないが、蓋しこの傾向は海外へ行つて來た人々の一齊に抱く心理であるらしい。目の覺めたやうに驚いた早大は、第二、第三の試合に勝つて漸く名譽を恢復した。

かくして早慶戦は回を重ねるに連れて緊張味を増し、野球熱の勃興を彌が上にも唆つた。彼等

が抱いて立ちたる野球の民衆化は、たしかに具體化されたのである。三十九年中止の厄にかゝれる際の如きは、全校擧つて應援に努めたのみでなく、都下の中學迄が出場選手の肩を持つて早慶兩派に分れ、應援旗を打振つて目覺しい聲援を與へた。此年の試合は慶應が先づ勝ち、早大が之に報い、而して決勝戦が中止されたのである。中止の申込みは慶應から出たもので、早大は百方應援淨化の道を説いたが容れられず、更に第三者の運動場にて見物を入れずして戦はんと提唱したが、それも同意を得ずして物分れとなつた。此時の應援は實際物凄かつた、場合によつては血の雨を降らしたかも知れない、また降らさなかつたかも知れぬ。前者を感つたのは慶應であり、後者を思つたのが早大である。

明大の努力

かくて「早慶は同一運動場に立たず」とキツパリした宣言をなして二十年の確執が續いたのである。其間早大から正式に二回挑戦し、大正六年極東大會の野球豫選の際は、それを機會に可なり有力なる調停が試みられたのであるが、それも慶應を動かす程の力がなかつた。其中數年この方庭球、ボート、陸上競技、蹴球など何れも早慶對抗の名の下に行はれ出した。オヤ／＼同一運

動場に立たぬ筈の選手ではないかと思ふ人もあつたが、これはよい傾向であるので、別に把羅割決する所なくして靜かにその成行を見てゐた、さうしていつしか野球も握手せねばならぬ時の來るのをヂツと待つてゐたのである。

此際一本大きな犠牲打を打飛ばしたのは新進の明大チームであつた「いゝ加減に双方ニツコリ笑つて仲直りは出來ませんか、さうして片輪のリーグ戦を完全なものにしては如何です」かう云つて彼は徐々と乗出して來た。實際其頃の五大學リーグ戦は早慶が戦はぬ爲め妙なものになつてゐたのである。而して明大は十三年の宿志成つて大正十二年の秋いよく早慶を撫斬りにして覇權を握るや、更に聲を大にして初志の貫徹に努力し始めた「これ程迄に盡すのに御承知は出來ないのですか」寶刀は鞘走りせんす勢を示した。

偉大なる時の力

幸にして當時の三田選手中戦を欲せざる者は一人もなかつた、殊に其時の主將桐原君は、大の主戦論者で、明大の徳意なくとも、輿論を捲起し度くて仕方がない所であつた。選手已に然り、先輩の中でも平沼大先輩を初めとして之に加擔する者多きを加へたので、流石の幹部も遂に承

諾、板倉卓造氏代表として早大に高田學長を訪ひ、遂に大正十四年の秋を以て二十年來の確執をさらりと捨て、心行く許りの會戦をなさんと誓つたのである。時の力！これ程偉大なるものはない。明大の斡旋もさる事ながら、三田の覺醒は「時は最後の審判者」たる事を如實に物語るものである。

早慶戦は第一回から中止迄總て九回行はれ、早は五勝し、慶は四勝してゐる、左にその勝負表を掲げる。

時日	得點	勝
36.11.20.....	11-9.....	慶應
37. 6. 4.....	7-13.....	早大
38.10.30.....	8-12.....	早大
38. 3.27.....	1-0.....	慶應
38.10.28.....	5-0.....	慶應
38.11. 8.....	0-1.....	早大
38.11.12.....	2-3.....	早大
36.10.28.....	2-1.....	慶應
39.11. 3.....	0-3.....	早大

ジンクスの正體

ジンクスとは何？

ジンクスとは如何なるものか？ウエブスターの大辭典を調べても「欺く」「避ける」位の意味で、多くの説明文字を引連れてゐないが、運動家としてはこれ程恐ろしいものは無い。此奴に出逢ふたが最後、その人の幸運が一時に剥ぎ取られたやうな騒ぎ方をする、この厭み嫌はれるジンクスとは果して何者であるか？

籤睨みはジンクス

米國は云ふ迄もなく、我國にもお馴染の深い有名なる大投手クリスチー・マシユーンソンが、嘗てバックネル大學の同窓者である一牧師と、紐育の繁華なサイド・ウオークを歩いてゐる際、彼はフト籤睨みの男にすれ違つたのに氣がつくと、矢庭に被つてゐた帽子を脱ぐが早いか、バツバツと唾液を思ひ様その中に吐き込んだ。彼は自分の帽子をそんな目に逢はせたのみならず、同伴の友にも同様の事を強いて、可愛相に新調した許りのシルクハットの中をツバだらけにさせて了

つた。友は請はれるまゝにその通りやつたものゝ全く意味が判らないので、

「一體どうしたと云ふのだ、君は氣でも狂つたのではないか」

とさも不審さうに問ふた。

「籤睨みに道で逢ふと、天下これ程不吉な事はないのだよ」

「帽子の中にツバを吐きかけるのと、その籤睨みとは、どんな関係があるのだね」

「何の事だか判らないが、我々の仲間は屹度さうするに限つてゐる、パンにバターをつけるやうに」

「よし僕は今夜その事で説教しよう、面白い迷信もあればあるものだ」

「説教の新材料と思へば、シルクハットの一つや二つは惜しくないだらう」

仲のよい二人は、こんな會話を交換して袂を分つたと云ふ話がある。

備前長船の一刀

大正十二年の秋十三年の宿志を遂げて球界の覇者となつた明大の野球部長内海月杖先生は、不羈卓落、邊幅を飾らぬ人で、グラウンドに来る時は、十年一日の如く一張羅の紋付羽織とセルの行燈袴を着用に及んでゐる。震災で向島の御宅が焼けた爲め、駒澤なる明大の合宿に假寓中、或

時何氣なく選手の一人が先生の室に這入つて見ると、コハ如何に午睡の夢圓らかなる先生の跨間、備前長船の一刀が鞘走りしてゐる。選手はコソ／＼と逃けるが如く室を立去つたので、其場は何事もなかつたが、その十一月中旬、いよ／＼緊張し切つた早大との第二回戦に、横澤の快技、永野を二壘で封殺し、爲めに一悶着が起つた時、先生は思はずベンチから轉け落ちん許りになつて何事をか叫ばうとしたが、どう云ふ拍子か、例の行燈袴がバット擴がつて、また／＼長船の鞘走りとなつた。これを見た選手連は、思はずクス／＼と笑つて肝腎の物言にも眞剣になれなかつた「君アノ時見たかへ」「ヘイそれはとうに拜見してゐます」と云つた調子で、其夜の祝賀會の席上では、今後の幸運の爲め、長船は物騒ながら引續き拔身のまゝで、グラウンドに持参して貰う事となつた。これは正にジnkクスと反對の話である。

小鰐の粗忽

丁度これと同様な話が早大の野球部にもあつた。それは私共が早慶戦に熱中してゐた頃であるが、その頃の監督は例の奇行に富んだ弓館小鰐君であつた。此人は内海氏の如く至つて小事に拘泥しない恬淡な性質で、同様に無禪主義の一人でもあつた。何事も新規な事をするに試合に屹度

負ける、例へばユニホームでも、靴でも、グラブやミットやバットの如きものでも、新らしいものは得て失敗の種となるものである。我等の無禪主義の一貫もこれに外ならぬと云つてよく人を笑はせてゐたものであつたが、或夜其頃目白臺にあつた合宿所に於て、一同床を延べて眠りに入らんとする時、彼はどうしたものか突然真裸體になつて了つた。コレハと一同が呆れ且つ驚くのを見て初めて氣の附いた彼は、ワーツと叫びながら、忽ち床の中にもぐり込んで終つた。後で説明する所によれば、小鰐先生よせばよいのに數日前立派な純毛の猿股を買ひ込んだ、其夜それを見せる爲め勢よく衣服を抜いだ所、豈計らんやいつの間にか外してゐたので前記の始末、飛んだ喜劇的一幕を演ずる事になつた次第である。無禪主義が早大野球部を幸運に導いてゐるのに、不心得なことをしては愛部精神に反するではないかと散々に油を絞られた末、好人物の監督は人騒がせの罪によつて餅菓子や芋をウンとおごるべく餘儀なくせられた。

「シツカリやれ」が崇る

筆者が早大野球部の主將であつた頃、今尙問題になつてゐる早慶第一回戦の八回目に於て、當時の投手河野君に向つて「もう二回だ、シツカリやつてくれ給へ」と云つた事がある。所がその

回にウンと打たれて一擧四點を取られ、前回迄一點を勝越してゐた好調をすつかり破られて了つた。其後河野君は私に向つて「君にシツカリやれと云はれたので妙に固くなつた」と笑ひながら述べたが、私は「さう云ふ事もあるかな」位に感じてゐた。間もなく選手の間には「橋戸がシツカリやれと云つた時に限つて負ける」と云ふ迷信が傳へられるやうになつたので、私は其後決してこの種の言葉を使はぬやうにした。然るに丁度これと同様の出来事が米國リーグの間に行はれつゝあるのを、最近の外國雜誌で讀んで、不思議の一致もあればあるものかなと思はず掌を打たずには居られなかつた。

◆ 不思議の coincidence

それは時めく紐育巨人軍からまる迷信であつて、而も不世出の監督マグロー將軍に關することであるから更に面白い。彼等大リーグと云はず、米國にあつて少しでも野球の心得のあるものは、八回目に投手が守備に就かんとする時「サーやらうぜ、もう六人片付ければいゝのだ」など云ふ言葉は、よく口にする所だが、これは絶對的に云ふべからざる忌語となつてゐる。九回目に云ふ事も出来ない。要するに投手の神經は可なり興奮して、或物に向つて暴進を續けつゝある

時、云はゞ水をさゝれるやうな感じを起させるが悪いのであらうか。大投手マシューソンが巨人軍で活躍してゐる頃、同軍の投手エームスが、聖路易との試合に、監督マグローが思はず九回にこの言葉を口にした爲め、折角勝つてゐる試合を棒に振つた事がある。其後エームスは後に述ぶるが如き不思議な出来事からジンクスを追拂つて、とんく／＼拍子に連勝してゐる時、偶々市俄古を壓迫して今や九回最後の守備に就かんとする刹那、例のマグローは思はず

「レッド！（エームスの異名）もう……」

と云ひかけたので、「シートツどうか助けると思つて……」エームスは狼狽して監督の言葉を遮ぎつた。さうしてとんく／＼その試合に打勝つ事が出来たのである。「もう……」のあとに「たつた三人」とでも云はれて了へば、この試合には屹度負けたかも知れない。彼がこの危機に監督を黙らせたのは、試合以外の試合で、投手に必要な頓智を遺憾なく發揮したものである。マグローはポケット・マネーを出して、其後大勢に罰金を支拂つたとの事である。

この物語が東西期せずして符合するのは頗る面白い現象ではあるまいか。

女優の手紙

このエームス君は大投手マシューソンと雁行して共に巨人軍の重鎮であつたが、時として連戦連敗の悲境に陥いる事があり、それが一段落つくと莫迦々々しい程の元氣が出て、反對に連勝するのである。要するに非常な神経質な投手で、氣分の持方によつてどうともなる側の人であつたらしい。

或時巨人軍が西部への旅に出立せんとした時、折柄エームスの出来は頗る悪くして、新聞紙はフッドウ・ビッチャー（負けるに極つた投手）の名を冠せる程であつた。所が心機一轉、旅に出たからの成績は極上々、丸で別人のやうに活動して、従來の悪評をスツカリ取返す事が出来た。其所には面白い物語りがある。

西への旅はボストンが振り出しになつてゐた。所がその日は生憎の雨で、一同所在なしにカードを遊んでゐると、其所へエームスに宛てた水菓の跡鮮やかな女文字の手紙が届いた。「負け通しの俺にも女から手紙が来る哩」エームスはかう獨語しながら封を切つて見ると、差出人は其頃一流中の一流と云はれる花の如き女優で、封の中には四ツ葉のクローバが一枚叮嚀に押されてあつた。手紙の文句には、左の如き意味が美しい文字でつゞられてゐる。

「まだお目にはかゝらぬが蔭ながら愛するエームス様！、此手紙の中にある『幸福の一葉』をあなたの肌に残さず、さうして間もなく届く筈のネクタイは、外出の際は必ず胸に、試合の時は必ずユニフォームの何處かに隠して置きなさい。さうすればあなたは必ず勝利の旅を續けて、花やかな微笑をたゞへつゝ、再び紐育に御歸りになられるでせう。試合の時ネクタイを人に見つけられてはいけませんよ、若し見附けられると幸運は忽ちあなたを見捨てゝもとのフツドウにしてしましますよ、私を信じて下さい、愛する我が若き投手！」

「棺桶屋の手間取りにでもならうと思つてゐる俺に、クローバでもないぢやないか」彼はさもないまゝ相につぶやいたが、それでも嬉しさは包み切れず、蒼白な顔に花のやうな輝きを見せてゐた。かくて間もなく届いたネクタイは、直に彼のカラーに抱擁し、クローバは紙に包まれて、財布の中にはまはれたのである。さうして翌日ポストンとの試合に、彼は生れ代はつた人のやうな勢を示して勝利を得た。それからと云ふものは不思議に勝ち續けて遂に野球期が終らんとする頃、ブルクリンに負けた外、殆んど全勝の記録を挙げた「女優からのネクタイ」かうした見出しで、各新聞紙の運動欄は非常に賑はされた。

林遊撃の脱帽

明大野球部の重鎮林遊撃は、此所ぞと云ふ場合には、屹度帽子を脱いでボックスに立つのが癖である。先輩の渡邊投手も、球勢が亂れ出すと、帽子をかなぐり捨てたもので、少し同選手の調子が悪くなると、フワンは「帽子を取れ」と冷やかしたものである。林君の脱帽は十二年の秋、早大との決勝戦が、彼の一撃によりて決せられた時から見るやうになつた。其時九回一對一の同点となつて、味方の走者は無死二、三壘に據り、而も大門湯淺などの強打者がフワウル飛球で死んだ後だから、緊張せる空氣の裡に浮び出た林君の顔は、物凄く程蒼く見えた。實際の事を云ふと此際林君は、帽子の脱ぎ甲斐もなく、頻りに悪球を振つて空振りし、遂に弱い打ち損じのやうなゴロを有田一壘の前に打つて走つたのである。所が上手の手から水とやらで、それを有田君がフワンプルしたので、遂に二出川右翼の生還となり、二對一の際どい勝利を得たのである。「帽子を取つたお蔭で、有田君はアノ弱いゴロを失策つたのだ」林君はかう信じて疑はないのである。

バットの雨で勝つ

それは十數年前の或る労働祭の日であつた。一代の速球王ウォルター・ジョンソンを押立てゝ

奮闘したる華盛頓軍は、勢鋭く費府アスレチックス軍を壓して、九回で對となり、十回に入りて華軍一點を勝越した。代つて攻めた費府は見る／＼中に二者凡退、望むべからざる望みを擔つて第一打者エデー・マーフィーがボックスに立つた。彼がベンチを離れると同時に、主將のカリンスは選手席の前に叮嚀に並べられてあつた二三十本のバットを行儀悪く投げ出して、またもとの席に歸つて済ましてゐる。彼は自軍が不利の立場に置かれると、屹度この方法でジンクスを退治せんとするのである。聽てマーフィーは第一球を空振りし、第二球目のストライクをも見逃し、二ストライクス、無ボールの苦しいどたん場に置かれた。日は漸く暮れんとして、黄昏の色は早くもグラウンドに襲ひかゝつてゐる。速球王の怪腕は益す冴えて、今一球で大團圓の幕は切つて落されんとする。満場立錐の餘地無き迄に押詰めた見物は、早くも華軍の勝利を見越してそろ／＼歸り出した。この刹那カリンスのジンクス殺しが功を奏したものが、マーフィーは第三球を打つてそれが安打となり、次いで危機に強いループ・オールドリングが飛出して、これまた中堅越の二塁打で戦友を本壘に墮いだ。次は當のカリンスである。亂暴に投げ出されたバットの中から自分のものを見出してボックスに立つが早いか、また／＼安打を憂飛ばしてオールドリングを入れ、茲

に形勢はガラリと一轉して、勝利は費府に歸したのである。カリンスは踊躍してベンチに歸るや、例のバットを一本宛空中へ高く飛ばして、尙も縁起を祝つたのである。初めはバットを投げ出し、効果ある時はそれを高く投げ上げるのが、このチームが有する獨特のジンクス殺しの方法である。

吉岡將軍と葬式

牛肉に葱、天麩羅に大根おろしが附物である如く、早慶相搏つ頃、なくてならぬものは吉岡將軍の彌次振りであつた。彼が陣頭に立つて黄ろい肝走つた聲を振り立てると、敵も味方も一脈の精氣に打たれざるを得なかつた。彼の有する力の偉大さよ、彼が當時の試合に顔を出さないと、選手のみでなく、フワンも多大の失望に捉はれたものである。この彌次將軍が持つてゐる迷信は、どうしても試合の日には、葬式に逢はないと承知が出来ないと云ふ厄介なもので、早慶戦のある日には、早くから下宿を出て、何處ともなく歩き廻つて、屹度二つや三つの葬式にでくわして来る例になつてゐた。時として葬式にうまく出會はない時もないではない、さうすると彼は態態築地の本願寺迄遠征して、縁起を直して来る、丸で乞食のやうな事をする男であつた。米國の

野球界では、路上で黒人の小供の頭を撫でたり、酒の空樽を積んだ車に逢ふと、非常に縁起のよいものになつてゐる。流石の紐育巨人軍も、嘗て連戦連敗を續けた時、奇智に富んだマグロー將軍は、毎日空樽を積んだ馬車屋に依頼して、巨人軍の選手がグラウンドに通ふ道筋をぶらぶらさせさうして選手の元氣を恢復したと云ふ話は有名なものである。

奇行監督小鰐先生

一代の名監督マグロー將軍は、奇行選手としてワツデルやレイモンドの例を引いて、前章に面白い挿話を紹介してゐるが、其頃は選手のみならず、一般がさうしたのんびりした氣分に充ちてゐたのではないであらうか、自分が競馬を見度い爲め、態と審判と喧嘩して退場されやうとした選手などゐた位であるから。日本でも今を距る廿年前、早慶戦が中止となる頃の野球は、今日のやうに複雑なものではなく、眞剣味はあつても、手腕之に伴はず、技術その物に火花を散らすこと今日の如きではなかつた。總てがユツトリとして太古の風に近かつたものである。さればベン

チには近頃の如き監督がゐるでもなく、主將が一切を切盛りしてゐた。若し監督と名のつく者がありとすればそれは、世話人同様なもので、唯雑務をうまくやつて呉れる程度のものであつた。されば時として選手のベンチを運動場へ運ばなければならぬ事もあり、自ら手を眞白にしてライオンを引かねばならぬ事もあつた。また試合と試合との交渉も主將株がどしどし決定したもので、今日のやうに競技監督や事務監督の手を経て、大袈裟に交渉されたものではない。流石世間の血を沸かした早慶戦も、さう云つた調子で成立したのである。此にその頃の代表的監督として紹介せんとする我が弓館先生も、またその一人で、世話好きの韓旋家に過ぎなかつたものである。併し名は何處迄も監督であるから、その意味に於て先生は現監督飛田君の先輩である。異常に先輩を尊ぶ早大にありては、東洋のマグロー飛田君も先生の前には後輩として立たねばならない。

弓館先生が早大野球部の監督であつた頃、一方の覇者三田軍のそれは、鷲澤與四二君であつた。不思議なことは、この二監督は、學校を出ると共に、前者は萬朝報に入り、後者は時事新報の記者となり、而して弓館君は目下東京日々新聞の運動部長として活躍し、鷲澤君は北京で英字新

間を經營し、支那通の一人としてその道に重きを爲してゐる。兩者の行き方を見るに、鷲澤君は何處迄も理智の人で、伶俐一點張りの聰明振りを發揮するに反して、弓館君は天稟の洒脱、滑稽味に富み、總てをユーモア化す點に於て長所が見出された。弓館君のユーモアは或意味に於て、此人の生命であり、且つ今日の位置を築き上げる核心的要素であつたかも知れぬ。

弓館先生が可なり多くの滑稽ローマンスを早大の野球部に残した中、最も振つたものは、運動場草取りの請負事業であつた。明治三十七年の夏と記憶する。學校は暑中休暇に入らんとするに先立ちて、五千餘坪の運動場を如何に始末するものであるかに窮した。その儘放擲して置けば、見る／＼中に雑草に蔽はれるであらう。思ふ存分に成長した雑草を、秋になつて一時に根絶するには、多額の費用と、長い時間とを要するから、寧ろ暑中休暇中絶えず手を入れて草を成長させぬ方が宜しい。それに就いては、其間何程かの請負賃金を拂つて、相當な労働者の手に委ねるのが上分別である。此時進み出てその任に當らんとしたのは、奇行監督弓館先生であつた。而してその請負賃金は勿驚金十圓。今の世の中では一週間分の一人手當にも當らぬものであるが、其頃

十圓あれば、一ヶ月の下宿料が拂へたものであるから、先生はこの仕事によつて、一ヶ年の宿料をセーブせんとする健氣な志を起したのである。

愈暑中休暇になつて、早稻田の通りに角帽の姿がピツタリ見えなくなる頃、雑草は遠慮なく頭を擡げ出して來た。一雨毎にメツキリ數が殖える許りであるが、先生の姿は一向運動場に見えない。氣を揉み出したのは先生自身でなくて、野球部の選手連である。或時二三の選手連は、自ら鍬を手にして先生を誘ひ出した。先生は大に責任を感じてゐるので、やり出すと大に仕事をするが、素人の悲しさには、心のみ焦つて埒の行かぬ事夥しい。熱い眞夏の太陽は帽子の上から彌が上に照りつける。先生も友人も、仕事が甚だ樂でなく、且つ請負賃金の廉に過ぎたのを覺つたものゝ、今更取消しも出来ないもので、一生懸命に續けて行くより外はなかつた。

或時二三の選手が鍬を手にして運動場へ行つて見ると先生の姿が見えない「屹度今に來るから先に初めよう」一同はかう云ひながら、ボツ／＼草を取り初めた。相變らず暑い日である、野球の練習に比してどれ丈け苦しいか分らぬ。されど先生の姿は一時間経つても見えぬので、少し張

合抜けのした人々は、先づ一息みすべく、その中の一人が井戸へ水を汲みに行くことゝなつた。すると彼方のテニス・コートで盛んにゲームを争つてゐる人が、どうも先生に似てゐるので、まさかと思つたが近寄つて見ると、正に小鰐其人なので、彼は開いた口が塞がらぬ程驚いた。一時前から草取りが初まつてゐる事を告げると、先生は「さうか、さうか濟まない。一寸この試合を濟ませて行くからね……」丸で主客轉倒した事を云つて尙も球を打つてゐた。大概の者なら怒つて了ふが、それでも友人は腹を立てずに働いて、先生の仕事を終り迄助けた、先生のユーモアはそれ程優れて人を惹き付ける力があつたものである。

◇
マグロー將軍の率ゆる巨人軍が、嘗て市俄古で苦戦した時、一行の元氣を引立てる爲め、慇々紐育から指導役のウィリー・ロビンソンを呼び寄せ、その人の持つて生れた諧謔によつて、一行を取圍む重々しい沈滞を打破つたと云ふ話は前に述べたが、丁度弓館先生も、早大チームにとつては、ロビンソンのやうなもので、冬期練習などには、是非來て貰はねばならぬ主要な人物であつた。

早大が破天荒の快舉たる最初の米國遠征を企てる年の冬、一行は暮から正月にかけて、伊豆の伊東で冬期練習をやつた事がある。偶々旅順陥落の報が傳へられて、小さい伊東の町も、旗行列や提灯行列で大した賑はひであつた。この快事を目前に見て先生の心は躍らざるを得ない。大に祝はざるべからず、と思つたものゝ、一行にはビューリタンの如き安部磯雄師が附いてゐるので、先生大好物の天の美祿を口にするは絶對的に出来ない。窮すれば通ずるとかやで、先生は一策を案出した。練習の歸途一寸酒屋へ飛込んで懐にした正宗の四合瓶を携へて風呂に飛び込み、これを熱湯の方へ入れて、上爛の手際宜しく、風呂の中でチビリ／＼とやり初めた。餘り長いので選手の一人が心配してやつて來る時分には、先生はもうすっかり飲み乾して素破らしい上機嫌、上つて來た時の先生の顔は丸でユデ章魚を見るやうであつたとやら。

◇
早大を卒へて萬朝報に入つてからも、先生の奇行は、依然として周圍の人々を喜ばせてゐた。嘗て故押川春浪氏の追悼野球試合が、早大のグラウンドで行はれた事がある。出場した人々は、小杉未醒、倉田白羊、茨木猪之吉、故中澤臨川、柳川春葉の諸氏に、稻門の一族が加はつて、可

なりの珍ゲームが演ぜられた。弓館先生は例の如く一壘を引受け、獨得のユーモアにフワンの願を解いてゐた。先生がバットに立つと、何もしないのにフワンは笑つて止まない程であつた。此時フワンの一人に、一代の諧謔家和田垣謙三博士がゐた。博士は春浪氏と生前の交際があるもので、其夜神田の青年會館にて開かるべき追悼演説會に出場すべく、それに先立つてグラウンドの様子を見に来たのである。博士は野球競技なるものを少しも解しない。されど弓館先生のユーモアに富んだ事のみは、確實に認める事が出来た。さうして他のフワンが腹から笑つてゐる間に、博士のみは追悼試合としては甚だ怪しからぬ態度の如く心得たのであつた。

豫定の如く夜になると盛大なる追悼演説會が神田で開かれた。先づ故中澤臨川氏が、其頃流行したベルグソンの哲學を引用して、學者らしい開會の辭を述べ、二三の演説があつた後、和田垣博士は眞打格として彬大なる體纏を壇上に運んだ。博士は故人に關する二三の追想談を試みた後、最後に其日戸塚で行はれたる追悼試合に言及して「故人を偲ぶべき眞面目の試合に、人を笑はせるやうな巫山戯た態度をした選手のあつた事は遺憾である」と云ふことを述べて結んだ。云ふ迄もなく小鰐先生のユーモアに對して鐵槌を下したのである。

やがて博士は急霰の如き拍手に送られて壇を下り、博士や世話人のごたくする控席に腰を下すと、一同は叮嚀に一禮してその勞を謝した。一寸落ち着いた所を見計つて弓館先生は、博士の前に腰を下し「一寸伺ひ度い事がありますが！」と切出した。

小鰐先生の質問した要領は次の如きものであつた。

博士はその日の試合が、甚だ追悼に相應しからぬと云はれたが、追悼試合なるものは、選手が悄然として、葬儀にでも列してゐるやうな心持で戦はねばならぬものであらうか。一生懸命に争ふ結果、人間として持つて生れた天性が、その儘流露するのは、あらゆる競技に共通する不動の事實である。自分は生れながらにして滑稽味に富んでゐる。別に可笑しな事をする考でなくとも人は自分の舉動を見て笑ふ。その日の試合でもさうだ、決して自ら滑稽を銜ふ譯ではないが、見物人は譯もなく笑つて止まなかつたのである。斯様な場合、非難すべきものありとすれば、選手が不謹慎なのか、フワンが不心得なのか、自分は甚だ解釋に苦しむ。自分は敢て自己を辯護する爲めではない、唯博士がこの事を知つて演壇で痛罵されたのであるか、それとも自分が陋劣なるグラウンドスタンド・ブレイをなさんが爲めにしたと見做されたのであるか、それを承はり度いと

云ふのが質問の要點であつた。

これ程眞面目になつて喰つてかゝつた小鰐先生を見たことは、筆者の生涯中恐らく初めての出来事である。「一寸伺ひますが……」と丁寧に頭を下けた時、見た所白顔瀟洒たる一青年である、かゝる手厳しい質問彈を打ちかけやうとは、神ならぬ博士は夢にも知らなかつたであらう。而も博士は教壇にあつても、時に一流の駄洒落を吹飛ばして、學生を哄笑させるのを快とする人丈けに、この詰問にはひどく窮されたのであつた。

小鰐先生は一轉して逆襲戦に入つた。

「一體博士が教室で御得意の諧謔が口をついて出て来る時、どんな心持でいられますか、私が今日運動場で見せた態度は、博士が教壇に立たれた時の心持を以てすれば、自然に解釋出来ると思ひます。悉く天真の流露、其所に微塵の山氣も無いのであります」

流石に世馴れた博士も「この逆襲には大に手古摺つた」と後で知人に物語つたさうである。

縦横の奇策

ドイルの口笛

米國の職業野球團中には、前述の如く新渡戸博士に巾着切りと云はれても、一言辯解の立たぬやうな卑怯者もないではなかつた。大マチーの著「ピッチング・イン・ゼ・ピンチ」の中にも斯様な出来事が二三擧げられてある。

或る投手は投球前必ずプレート附近の土で手を乾かす癖があるので、その邊に粉末石鹼を澤山土砂に混ぜて置いて一度土を握ると後は球が滑つて仕方がないやうにした俱樂部もあつたさうである。

又捕手の信號を盗む爲めに、遙か中堅の背後に聳ゆる高い建物の窓から望遠鏡でそれを見た上、電信を利用した暗號で、一々選手に傳播したのもあつた。更に狡猾なのはこれも中堅の彼方にある建築物の窓から光線を反射する鏡の如きものを時々出して、打者の視力を掻き亂す方法も講ぜられたのである。併しこれ等は何れも過去の遺物であつて、今日は正々堂々の陣が最善の兵法とされてゐる。

一九二四年の秋行はれたる紐育巨人軍對華盛頓の世界選手權試合に於て、華軍のボーイ監督と

呼ばれたる若きバツキー・ハリスは、補欠選手の中で最も利巧ナル・シヤハトをして絶えず三壘のコーチとしたが、彼の有する使命は、單に走者のコーチにあらずして、實は敵の信號を看破して、それを味方に傳播する大任を帯びてゐたのである。ピッツバーグ市で發行するガゼット・タイムスの運動記者チリー・ドイル君は、これに關する面白い挿話を同紙に掲げた。

ドイル君は常に華盛頓チームが戦ふ時、例のシヤハト選手が三壘にあつて種々雑多の口笛を吹くのに早くも留意してゐた。如何なる調子によつて、如何なる信號が傳へられるかは容易に知り得なかつたが、要するに敵捕手の信號を直接に觀破するのではなくて、それを外野へ傳達しつゝある内野の一人を掴む丈けは、稍や明瞭に知り得たのである。愈世界選手權試合が華軍の勝利に歸した後、ドイル君は例のシヤハト選手に逢ふ機會があつたので、すかさずこの事を聞いて見ると、果せる哉彼は可なり重大な役目を勤めてゐた事が判つた。巨人軍のバツテリー間に交叉される信號は、必ず遊撃のジャクソンから外野へ傳播する事が看破されたので、彼はこれを知らざる眞似をして、氣附かれぬやう巧みなる口笛で味方の打者に知らせたのであつた。ハリスやゴスリンが本壘打を飛ばしたのは、全くこの口笛の助けに依つたものである。



華盛頓の名投手 ジョクソン



華盛頓のゴーン監督 ハリス

捕手の信號が盗まれない爲め、二壘に走者ある時は、特殊の信號が交換されるのが常である。然るに東都六大學リーグの間には、走者が二壘に來ると、投手は四五間一壘の方へ寄つて捕手の信號を受取る人を見受ける。これはバッテリーの訓練が不足せるを曝露するもので、甚だ感心しない。大正九年の秋全米野球團の一人として來朝したるエーン・スミス捕手は、走者が二壘にあると口笛で信號を出してゐたが、流石に用意周到なものだと思つて感に打たれた。

際どい策戦

日本のチームのやうに、出場選手の顔振れが畧一定してゐる所では、敵投手の變更によつて、自己の選手を代へるやうな策戦を、取らうとしても取る必要はないが、米國一流の職業團のチームにありては、尠なくとも三十二三人多くは四十人近くの選手を抱擁してゐるので、この種の交代は目まぐるしい程行はれ、従つてその變更に伴ふ策戦も多様になるのである。例へば一九二四年の世界選手権試合の決勝戦に於て、華軍の監督ハリスは、巨人軍の一壘テリーを試合に出させたくないで、先づ彼の苦手たるオグデンに投球させる事とした。さうすればテリーは必然ライオン・アップから消されて他の選手が出るに相違ない。さればハリスは態とオグデンに肩馴らしを

澤山させて、マグローに見せつけてゐた。困になつたオグデンは、第一回到投球すると、直ぐ他の投手に交代すべき事も豫め聞かされてゐたのである。然るにこの策戦は、どうしたものか巨人軍に洩れ、やがてまたその洩れたと云ふ事も華軍に知れたので、幕僚の多くは、ハリスに策戦の變更を逼つて止まない。されど年少のハリスは構はずにどん／＼やつて退け、遂に光榮ある勝利を得たのである。

これを圍碁の例に取る。名人の對局評によくかう云つた様な文字が見える「何の手は悪し、蓋し、前に何と打ちたる趣向を無にするから」之を詳しく云へば、高段者が一目を下すは容易な事ではない、非常な考慮やら推敲を経た結果である。然るに後になつてその趣向に背馳する石を打つやうになるのは、正しく敵にうまくやられた證據で、さうなると勝味は難しくなるのである、云はゞ自分で自分を破棄したもので、二重の損失を招いた事となるのである。

ハリスが何處迄も初信を貫徹したのは、碁道で云ふ「趣向を立て通した」ものであつて、勝敗の如何によらず、策戦としては上々の出来、監督としては千金の重味を見せたものである。

選手の今昔

「今の選手と昔の選手とは何れが強いか」と云ふ問は、可なり多く聞かされる。さうして問ふ人の心理を忖度するに「そりや昔の方が強かつたね」と云ふ返事を期待するやうに見える。所が私はさう容易に骨董禮讚に傾き度くない。何となれば昔のスターは、今の時代にありても一流の選手たるべく、今の一流所は、やはり昔のスターたるべき素質の持主であるからである。今の世にナポレオンは出ぬかも知れぬが、世が世ならナポレオンたり得る人が絶無とは限らない。

先日早大の名監督飛田君と語つた事がある。監督は云ふ「今の選手は技倆に於て、昔の人々の比ではないが、膽力ある者は少ない。昔は腕の不足を膽で補ひ、今は膽の足らざるを技で埋めやうとしてゐる」と、成程うまい觀察である。さうした傾向は確に見える。殊に由來意氣で勝つた一高チームなどの變遷を見るならば、其所に争はれぬ相違を掴み得るであらう。

昔の人は兎に角頑固であり、負惜味が強かつた。一高の寄宿舎の煉瓦塀には、今でも故守山投手が一人で投球の練習した跡が残つてゐると云ふが、まさか小供が石に穴を明けて遊ぶやうな凸

間が残つてゐるのではあるまい。併しながら相手のない時、煉瓦塀に球を打つけて、コントロールを得んと努力した精魂は、涙なくして見過す事は出来ない、尊ぶべきはその氣魄である。

嘗て市俄古大學が第一回の來襲をした時、慶應は敗れながらも善戦して氣焔を擧げたが、早大の振はぬことは夥しかつた。此時早大の舊選手で組織する稻門俱樂部の中老連は、何とかしてこの屈辱を雪がんものと、試合の前夜水垢離を取つて、勝利を神に祈つた由である。今の野球から云へば、誠に馬鹿氣たやり方で、そんな事をするよりも、一時間でも長く安眠する方が、精力の涵養上必要であると云ふかも知れない。併し昔の人はこの調子で驀進した。バタ臭い野球を、日本古來の革袋に入れやうとした所に矛盾もあり、氣魄も籠つたのである。今では餘り聞かないが、昔は野球に負けると、選手一同クリ／＼坊主になつて、至らざるを所屬校の應援團に謝したなど云ふ事を聞かされたものである。「個程迄私共は恐縮して居ります」と云ふ謙遜の態度が、如何にもよく表はれて面白いと云はんよりは、寧ろ嚴肅な氣に打たれざるを得ない。

◇
野球を商賣にする米國の大リーグ間にも、選手の氣風は大分昔と違つて來た。小ロツク・デモ

クラットの記者ストーン君は次の如く語つてゐる。

「今の選手は一寸した怪我でも、出場を拒んで自重に努める。それが爲めグラウンドに立たない選手が、いよ／＼ピンチに臨んでから、他の選手に代つて打つやうな事をして、今のフワンは常事茶飯の出來事として少しも怪しまない。昔はさうでなかつた。レナ・ブラツクバーンなど云ふ男は、試合の第一日鼻柱にイヤと云ふ程球を叩きつけられ、其上右足にスパイクされた、切れた靴下の間から、柘榴の様に傷がのぞいてゐるにも拘はらず、グラウンドから一步も退かうとはしなかつた」云々。

日本にもかうした例がある。嘗て早慶戦が盛んに行はれた頃、二壘を守つてゐた押川が、一壘森本の頭上一間位高い暴球を投げて、敵味方をアツと呆れさせた事がある。それも二者の間が、四五間に足らぬ所で起つた事であるから、我等一同は寧ろ不思議な感に打たれざるを得なかつた。されど押川は肩を痛めてからコントロールに乏しくなり、度々暴投をやる事もあるので、我等はそれが少しく念入りになつた位の考を持つてゐた。所が後で聞いて見ると、彼は練習中に突指して、右手の指がひどく腫れ上つた。これを敵に見せれば覗はれるし、味方に云へば士氣に障

るから、遂に黙つて試合を續けてゐる中、前記の如き暴投が出たのである。さうして元來寡言な彼は、その苦心を餘程経つてから友人に物語つた。斯様な意氣は一寸今どきの人に珍らしい。

去秋ア・リーグのベナントを取り、進んで世界選手権試合の檜舞臺に於て、小ナボレオンと稱名される稀代の戦術家マグロー將軍の率ゆる紐育巨人軍を破りたる華盛頓セネーターズの若き監督バツキー・ハリスもまた古風の一選手である。彼は小リーグにある時、足に怪我をして活動が思はしくなかつたが、それでも休まないで強いて出場を續けてゐた。或る華盛頓チームのスカウトが、ハリスの名聲を聞いて行つて見ると、事實と評判とは、大分異つてゐるので、其の儘歸らうとしたが、念の爲め「何故ハリスは評判程でないのであるか」と俱樂部の持主に聞いて見ると前記の如き事實が語られたので、スカウトは思はず手を拍つて「これなるかな」と叫び、早速ベンチに赴いて、若いハリスと固い握手を交はした。ハリスが「ボーイ・マネージャー」として、時めく華盛頓チームを一令の下に左右するに至つたのは、彼の技倆によるよりも、その氣魄に負ふ所が多いのである。

マグロー將軍の觀たる今昔

〔『私の野球生活三十年』から〕

私の派遣した五十人の質問者に對して、「今日の野球は、昔に比してどれ丈けの進歩をしたか、又今の選手と、昔のそれとを比較して、力量の差如何」と云ふ疑問を出した人を多く見受けた。以下之に關する卑見を少しく述べて見よう。

一言にして云へば、今日の野球は、三十年前のものに比して、非常な進歩發達を遂げたもので、名選手の數も、今の方がズツと多い。と云ふ理由は、其頃大リーグと云へば、ナショナル・リーグのみで、小リーグの數も頗る少なかつたから、従つて名選手の輩出も、之に伴つて多くない譯である。

丁度米國の各大學が、フットボール・チームを編成する時、大きな大學は生徒が多いので、易と強い選手を選び得るが、小さい所では、それが出來ぬので、時としては資格の欠けた人をも

加へねばならぬと同様である。

試合其ものも大した進歩をしたものである。チャーレス・コミスキの時代迄、一壘手は、眞の内野手とは云へぬ位であつた。何となれば、彼等は悉く一壘の上に立つて守つたものであるから、一、二壘間のゴロは、ヒットになるものが頗る多かつた。甚だしいのは二壘手や三壘手も、一壘手同様、壘の上に立つた儘であるのを、下級の試合では、よく見受けたものであつた。

コミスキ。アンソンなど云ふ大家は、前記の如きプレイでは満足が出来ぬので、一壘手も遊撃や三壘手のやうに、烈しい活躍をして、一、二壘間の守備を固くするやうに努めたものである。この陣形が進んで、更に今日では、一壘手が壘を離れて球を追ひかける時、投手が逸早くその壘に飛び込んで、壘手から投げる球を受取る方法が案出されたのである。

總て一の新法が案出されると、その副産物として、必ず他に二三の新案が生れる。投手が一壘を固めるプレイの如きは、三十年前には夢にも考へなかつたものである。

又二壘に走者ある時、打者はよく三壘の方面へバンドをするものである。此際投手と三壘手と

は、この球を追ふべき任に當り、遊撃が三壘の空所を守ると云ふ方法も、新しい策戦の一である。グラウンドも著しくよくなつた。近頃の野球は、丁度玉突盤の上で試合をするやうなもので、地上に小石一つ轉けても、選手は文句を並べる位であるが、昔の運動場と來ては、相當なものもあつたが、多くは粗末なもので、往來で試合をするやうな、小石だらけのグラウンドも決して少くはなかつた。

又近頃の野球選手は、總ての方面に非常な注意を拂つて居る。食事若しくは其後の休息に就いても、非常に行届いた注意を拂つてゐる。とても昔の荒武者共とは一緒にならない。私が初めて大リーグの仲間入りをしたオリオレス 倶楽部所在地のホテル主人は、その烈しい變り方に就いて、何時でも立證して呉れる材料を澤山握つてゐる。

現在の各倶楽部には、必ず優れたるトレーナーがゐて、試合の前後、選手が痛みを訴へる場所に薬品を塗り、手拭で擦り、其上巧妙なる按摩などをして、少しも痛みの残らぬやう揉みほぐして了ふ。だからいくら烈しい接戦を演じた後でも、選手は全く生れ代つた潑刺たる元氣を恢復して家路を急ぐ事が出来る。

これを三十年前の選手生活に比すれば、誠に隔世の感がある。吾人は時として十週間も肩を揉む機会を與へられぬ場合もある。無論肩が痛まうが、足が挫かれてるやうが、特別に注意を與へて、醫やして呉れる人もあらう筈がない、皆自分々々で處置するより外はなかつた。其當時の流行語に「チャーレー・ホース」と云ふのがある。今でも野球の術語として使用されてゐるが、この意味は、家庭で飼養される馬が、足を傷けて跛になると、どう云ふものかこれを「チャーレーの馬」と呼んだもので、之が轉化して野球選手の怪我した場合に「あいつは不幸にしてチャーレー・ホースした」など云ふに至つた。

「畜生！ またしてもチャーレー・ホースか、いまくしい」

昔の選手は、よく這那獨語をしながら、自分で療治をしなければならなかつた、今とは大した相違だ。



私は今日の野球が、總ての點に於て昔のよりも進歩したものであるを辯明したが、併し物質を離れて精神的方面から見ると、昔の選手は、近頃の人々が抱き得ざる立派な魂の所有主であつた

ことを力説し度い。昔の選手は、概して犠牲的氣魂に富んだもので、個人の便宜は後廻はしにして、先づ俱樂部全體の繁榮を希望したものである。今の選手は何處迄も職業的氣分に捉はれて、俱樂部の事よりも、先づ自分の位置、給料、家庭及び將來の事どもを考へるやうになつた。

一八九〇年の頃には、新らしい選手が参加すると、古い連中は一同で歓迎し、どうかして一人前の選手にしてやらうと骨を折つた。其所に温かい友情もあれば、俱樂部を思ふ真心も多量に包藏されたのである。近頃の選手は、イキナリ監督なりコーチの手によつて訓練されるから、古い選手が手を下さなくも差支ない事になつてゐる。而してその新参選手の成績が悪いと、監督はサツサと他の小リーグへ追ひやつて修業をさせる。全く見込みがない時は、他のリーグへ賣るか、外の選手と交換などをする事宛かも商人が商品を取扱ふのと少しも違つた所がない。既に世の中がさうなつてゐるのだから、選手の方も少しも怪しまないで、サツサと監督の心のまにまに浮動して行く。

要するに昔の選手は俱樂部の爲めに盡し、今の選手は自分の爲めに努力する。昔は丁度大學のフットボール・チームに新人が來ると、皆で之を立派なものにしようと思つて骨を折るやうに、氣をつ

けてやつたものであるが、今ではさうした気分が全く消耗してゐる。

スポーツと年齢

日本人は早く年を取り過ぎる。日本人は年の寄るのを恐れて、健康の失はれるのを気にしないが、外國人は正に反對で、健康の失はれた者は若くても老人、老人でも壯者を凌ぐ者は若人の仲間入りが出来るとしてある。身體の丈夫な人は、年齢によりて支配されず、却つて年齢を超越し、征服するのである。「人間は葡萄酒のやうなものだ、古くなればなる程持てなくては駄目だ」彼等はこの信念の下に、嬉々として健康を享樂してゐる。英國人が「オールド・ヤングたれ、ヤング・オールドとなる勿れ」と戒しめるのはこの事である。

天狗俱樂部の人々

今を距る十數年の古い話だが、冒險小説の泰斗押川春浪氏が在世の頃には、中老連もなかく振つたものである。彼等は天狗俱樂部なるものを作り、同志には畫家としては小杉未醒、満谷國

四郎、茨木猪之吉、倉田白羊、力士では玉椿の白玉健次郎、文士では中澤臨川、水谷竹紫、横山健堂、柳川春葉、阿武天風、政治家では尾崎行雄、飛行家では尾崎行輝、運動家では三島彌彦、押川清、針重敬喜、大村一藏、吉岡信敬、弓館小鱗其他早稻田系の野球選手を多く網羅して、相撲に、野球に、庭球に、八宗兼學の勢で荒れ廻はつたものである。其頃陸上競技は未だ搖籃時代で、今日の如く行はれてゐなかつたから、競争と云へば重に前記の三種位に限られてゐた。若し近頃のやうであつたならば、無論五種、十種に迄も手を延ばして、氣焔を擧げたに相違ない。

されどこの天狗俱樂部は、押川春浪氏の死と共に核心を失つた態となり、次いで中澤臨川氏が夭折したので、その方面の權威が殺がれて、近頃の若い人々には「そんな元氣の團體もあつたかな」位の感を起させるに過ぎないものとなつた。最近この俱樂部の仕事としては、數年前に行つた滿洲遠征であつたが、これも若手に乏しかつたので、散々の體たらくで、至る所敗けて許りゐた。撫順で野球試合をした時、口善悪なき滿洲童が「この邊に天狗の鼻が落ちてゐないか」と彌次つた時は、流石物に動ぜぬ天狗連も、苦笑せぬ譯には行かなかつた。

この行で今尚ほ鬼氣人に逼る眞劍味を帯びた試合として記憶に存するのは、大連で行つた滿鐵

との庭球戦であつた。此方の連中は、押川清、飛田穂州、弓館小鱈、西尾守一、倉田白羊、阿武天風、故大村幹など云ふ手合であるから、野球の方はいくらか胡麻化し得るも、庭球では齒も立たぬ程叩きつけられた。所が天狗方の一枚看板針重君がゐるので、この人に獅子内謹一郎君を前衛として組ませ、これで満洲を撫斬りにする計畫であつた。云はゞ針重君の禪で、相撲を取らうとしたのである。

此所にまた一つ面白いのは、満洲の大將が東京の高等師範で鳴らした飯河君である一事であつた。針重君は早大の庭球選手時代、度々高師と戦つたが、どうしても飯河君には勝てなかつた。學校を卒業後針重君の腕は異常な發達を遂げたので、機があつたならば、飯河君と太刀打がして見度くて仕方が無かつた。それが計らずも満洲で顔が逢つた。飯河君は知るまいが、針重君の胸は報復の念でワクワクしてゐる。傳家の寶刀は鞘鳴りして血に喝したのであつた。然るに木葉天狗は悉く連敗したので、針重組がよく敵の大將組に當る迄連勝し得るかどうか、それが心配でならなかつた。されど彼は見る／＼中に敵の五組を倒し、遂に飯河組に肉薄して多年の宿志を遂げたのであつた。餘り自慢をせぬ針重君も、此時許りは嬉しかつたと見えて、アノ髯だらけの顔に

一杯の笑を湛へてゐた。

三田稻門の選手

大正十年の春三田稻門野球試合の第一回が、芝浦で行はれた頃の顔振れを見るに、三田俱樂部では島田、神吉の二選手、稻門では泉谷君などあつて、少數ながらも早慶戦時代の古強者に接し得たのは心強かつた。泉谷君が相變らず栗鼠の如く迅速に走ることや、島田君の健棒、神吉君の閃めく精悍の氣などは、やはり昔に變らぬなつかしい面影の一つであつた。其他同試合には、早慶戦以後の選手として活躍した人々に、三田では故森(茂)、鈴木、小山、後藤、阿部の諸君があり、稻門には伊藤、市岡、大井、池田、高久、高松などの卒業選手が出て、如何にも古い傳統を負ふ二大チームたる事を遺憾なく發揮したのである。其後春秋二期に行はれつゝあつた同試合には、三宅、懸山、高濱、管瀬(以上三田)加藤、淺沼、佐伯、田中、福長、富水、八幡、澤、松本などの人々を見たが、時の流れはいつしかこれ等の人々を篩ひ落して、近頃の三田は、小野、森を中心とした大毎チームが重きを爲し、稻門では久保田、久慈、高松、松本などの先輩數名が加入するに過ぎなくなつた。

僅か大正十年このかたである。あれ程一代の名星として憧憬の的となつた人々の體力がさう俤に減退しやうとは思へない。要するに開始當時は、共に現選手三人に過ぎなかつたものが、近頃は五人迄出場が許され、それにどんく若い選手が卒業するので、中老以上は遂にユニフォームさへ着られぬやうになつたのであらう。かくて三田稻門戦は益々緊張味を増して来るが、クラシカルの色彩が欠けて行くのは嘆はしい。幸に早慶戦が復活したのであるから、是非卒業生のみから成る三稻戦をやつて貰ひ度いものである。

假りに三田は小野、森をバッテリーとし、稻門では谷口、久慈を以てこれに對峙せしめ、三田は桐原、高濱、三宅、高須、腰本、日下、新田、島田、管瀬、富樫の諸君を網羅し、稻門は加藤、高松、松本、田中、富永、有田、市岡、淺沼、池田、久保田、堀田などのメンバーで戦ふものとして、双方相當の練習を積むものとすれば、俱樂部戦の隨一として、依然斯界に重きを爲すことは請合である。一體中老連は、まだ老境に入つたと云ふではなし、多くは三十前後でありながら、よくチツトしてゐられるものだ、私はさうした傾向を見て、甚だ齒痒く思ふのである。

拳闘の如き烈しい競技では、三十歳を盛りの峠としてゐる。人體の發達はその頃を以て完成す

るからであらう。我が相撲に於ても、その時代が限度ではあるまいか。されど野球は體力第一にあらずして、視力、脚力、神経等が衰へずば、四十を越してもやれない事はあるまい。

鐵腕投手マギニチー

今を距る二十年前、早大野球部が第一回の米國遠征を企てた時、紐育巨人軍の天才投手大マシユーンンの先輩として驕名隠れなきトマジヨウ・マギニチーと云ふ人があつた。此人はマシユーンンに多くの教訓を與へた位の人であるから、投球の技術家として、無論第一流に置かるべき麒麟兒であるが、更に驚くべきは、どんな過度の投球をしても、決して疲勞を感じざる、所謂不死身の肩を持つてゐる點である。

されば當時の人は、彼を呼ぶに鐵腕投手（アイオン・ピッチャー）の名を以てした。丁度其頃遠征したる早大野球チームの投手は、有名な河野君で、二十餘回に渉る試合を、殆んど一人で投球したので、米國のフワンは驚くまいことか、遂に河野君を「日本のマギニチー」にしてつた「鐵腕投手河野」などの名が、我が野球史の一頁を飾るのは、起原を此時に發してゐるのである。

最近の消息によれば、マギニチーは或る小リーグに属する倶楽部の持主となり、時々プレート
を踏んで昔取つた杵柄の味を今尙見せてゐるとの事、彼の年齢は恐らく五十四五歳に達してゐる
だらう「日本のマギニチー」と呼ばれた河野君は、「今も野球事業には關係してゐるが、もう投手
としての生命は絶えてゐる。さうして見ると同じ鐵腕でも、日本製と米國ものとは大した相違
があると云はねばならぬ。

マギニチーの誕生日は、一八六三年から一八七〇年の間で、ハッキリした事は分らない。自分
でも「いくつでも構はない、プレートを踏んでゐられる間は、いつでも二十歳の若さがあるの
だ」と云つて力んでゐる。記録の示す所によれば、投手としての彼の生命は、此年で三十四年の
長きに及んだ。ダブルヘツターの数を調べたら、これも多数に上るであらうが、世間に知れた範
圍では、小供時代に一日五回プレートに立つたと云ふ記録丈が残つてゐる。

老人の天下

法律家、雄辯家、思想家として相當に知られたブリッヅフォートのジム・オラウクは、驚く勿
れ六十三歳になる迄、その地方で若い者と一緒に野球試合をして、相當に活躍してゐた。彼の球

歴は四十ヶ年に涉つて、而も連続して花々しいものであつた。

エー・シー・アンソンも、プレーヤース同盟の時代から、今のナショナル・リーグの初まつた頃
にかけて、可なり長い球歴を持つ人で、二十三年間大リーグの経歴を續けた事と、その間三割以上
の打撃率を下らなかつたので有名である。現役の選手にありて、マギニチーに次いでの高齡者
は、クリーブランド・アメリカンの名監督にして強打者の聞え高きトリス・スビーカーである。
彼の年齢も不明であるが、オフィシャル・エージに従へば、一八八三年八月の誕生で、今年
は四十二歳、それでもマギニチーから見れば、一昔以上の若者である。

ピッツバーグ・ナショナルの投手として活躍しつゝあるベープ・アダムスも、今年の五月十八日
には、満四十二歳になつた筈である。此人が初め聖路易の投手として名を擧げた頃は、今を距る
十九年の昔で、彼が二十四五の頃であつたらう。

オールドボーイの當り年

今年はおールド・ボーイの當り年か、不思議にも二十人からの中老連で、而も壯者を凌ぐ腕前
の持主許りが、相變らず大卒の滋味を示してゐる。市俄古白踏軍の監督となつたエデー・カリ
ン

スは、三十八歳と云ふが先づ二つ位を隠してゐるだらう。ヴィル・グレッグは四十歳、一人でトリブルプレイの記録を持つニール・ボールは四十五歳、ザッチ・ホイートは三十七歳から四十歳迄、シユールウッド・マギーは四十二歳から四十五歳、其他バスカードの四十五六歳、グリックスの四十一歳、コネツチーの四十歳、ワルシユの四十歳などがある。

今年こそアメリカン・リーグの霸王になると力んでゐたデトロイトの監督タイ・カップは、去年の十二月卅八歳になつたと云つてゐるが、實の所三十九歳でなくてはならぬ。彼は十六歳にしてプロフェツショナルの仲間入りをなし、十八歳にして早くもデ軍のスターとなつた天才である。老いて益旺盛の文字は、正に此人の爲めに作られた言葉ではあるまいか。彼は今年六月五日聖路易と戦つた時、三の本壘打と、一の二壘打と、而して二の單打とを飛ばして、都合六回ボックスに立つて六回共安打を飛ばし、十六のベースを一人で踏んだ。これが四十近い男の仕業であるから驚き入る「彼はこの驚くべき記録を完成するに二十年を待てり」カップの偉業を傳へた新聞紙は、這那見出しを大きく書き立て、この非凡の出來事を讚美してゐた。

有料試合の表裏

有料試合の濫觴

野球競技に入場料を取り初めたのは、明治四十年秋、慶應が布哇の聖路易軍を招聘した時で、其後外來チームの來る毎に、相當の入場料を取ることとは當り前のやうになつた。さうしてその結果、日本人同志の試合にも、いくらか取つてはどうか、と云ふ意見が、東都大學リーグの間に起つて、愈よこれが決行されたのは、大正三年の秋であつた。金を取立てた當時フワンは、兎角「拂つてゐるぞ」と云ふ氣分に捉はれてゐたので、つまらない試合になると「入場料が高いぞ！」など、叫んだものであるが、時の流れはいつしかかうした氣分を一掃して、近頃は入場料をいくら高く取つても、面白い試合にはウンと人が來るし、無料の試合でも、力の入らぬものは、フワンの方で御免を蒙るやうになつて來た。去秋學習院校庭で行はれたる早大對一高の試合は、傳統的の背景はあり、且つ無料であるから、定めて非常な人出だらうと思つて行つて見ると、案に相違、數にして二千にも足らなかつた。

何時迄續くか

早大が堂々たる運動場を持ちながら、一高を自庭に迎へざる理由は、一高方が入場料の徴集を肯ぜざる結果、無料で試合すると、どれ丈け多数のフワンが押寄せるかも知れない。その爲めスタンド其他を破損されると、修繕費用の出所が無いからであるが、前記の模様では、スタンドを毀つやうな多数のフワンは、決して吸収されぬかも知れぬ。官僚臭で充滿してゐる日本體育協會主催の陸上競技會、去秋第一回を行つた内務省主催の明治神宮競技なども、誰れ憚らず入場料を取るやうになつた今日、一高を初め各高等學校のみが、これに習はざる主張はいつ迄續くであらうか。出來得ることなら何時迄も續かせ度いが……。

原則から云へば、總ての競技には、金を取らぬのに限る。嘗て早大第一回の米國遠征チームが、スタンフォード大學と戦つた時、同大學の總長ジョーダン博士は（大なる親日派として有名なりし人）その當時日本の野球競技には、一文の金をも徴集せざることを聞いて、心からこの美風を祝福し「米國の競技は、金を取り過ぎて困る」と云はれたさうである。

されど近頃は運動器具が非常の暴騰をし、運動場の地代がぐんぐん高くなる。二十年前は年に

三百圓でやつて行けた早大野球部の經濟は、どうしても二萬圓を要するに至つた今日となつては、競技部の維持及び發展は、とても學校から貰ふ體育費だけではやつて行けない。其所でフワンと無言の妥協が成立し、見る者は娛樂を得る代償として、幾分か金を喜捨するに至つたのは、蓋し止むを得ぬ進路を辿るものではあるまいか。唯學校チームとしては、年々の經濟を發表して、フワンの誤解を避け度いものである。入場料問題に就いては面白い挿話がある。

太夫の選手

流石に神戸は野球の搖籃地である。形式こそ違へ、入場料をフワンから徴集したのは、明治四十二年の秋であるから、慶應が聖路易を迎へて、初めて東京で金を取つたよりも、二年の後の事に屬する。その時は東京から西下したる東京俱樂部と、神戸の大家を集めたる神戸俱樂部とが、東遊園地に於ける外人のグラウンドを借りて戦ふ事となつたが、どうしても相當の入場料を徴集しなければ、設備萬端がうまく行かない。

其所で主催者は、警察署に出張して、金を取るの可否に就いて署長の意見を聞いて見る事となつた。出て來たのは可なり年の寄つた警部さん「野球と云ふものは、例の玉ころがしの事か」と

云つたやうな調子で、代表者は初めから度膽を抜かれて了つた。されど勇氣を回復したる主催者は、その入場料は全部實費に宛てるものであつて、それによりて選手や主催者側が、一文でも儲けやうとするので無い事を、再三再四、嚙んで含めるやうに説明して見た。警部は黙々として聞き終つた後、如何にも蔑しむやうな調子で

「それには鑑札を受けるのが、一番いゝだらう、さうしなければ解釋の道がないからね」と至極簡単に云つて呉れた。主催者は説明の功果ありしを見て喜びながら

「その鑑札はどの位拂ふと下けて頂けるのですか、また序にその鑑札の種類も聞かせて下さい」と追及して見た、警部はさも五月蠅さうな様子で一寸眉を擡めたが、

「僅か七十銭で下けてやる、さうして種類は賤業に屬するのだ」

と事もなげに云ひ放つた。警部は親切に行くべき道を教へたつもりかも知れないが、賤業の二字は、スポーツマンたる主催者の頭にガンと響いた。賤業と野球と一緒にされては、末代の耻辱と思つたので、一先づ考へて見る旨を答へて、主催者は警察署を退き、俱樂部に歸つて連中にその由を告げると、何れも大不平、「警部の野郎は確かに野球を潰したものである」と敦固く若手

もあつた。其中稍や年のいつた人が「鑑札を受けることになると、マネージャーとキャプテインとが賤業の勸進元と太夫さんか」と云つたので、怒つてゐた連中も思はずフキ出して大笑ひとなり、結局他に方法を見出す爲め種々の協議を遂げたが、遂に後援會なるものを起して會員を募集し、野球を見んとする會員から會費を徴集する形式にしてはどうか、と云ふ事に一決した。やがて神戸市の目ほしい辻々には、左の如きポスターが貼られた、名案から絞り出された名文に曰く、
『本日東遊園地に於て神戸俱樂部對東京俱樂部の野球大會を催す。この機に際して會員を募集す、入會金は一等金六十銭、二等金三十銭』

流石の警察もこれには手が出しやうがなかつたので、野球は辛うじて賤業の汚辱から免れることが出来た。

際どい掛引

其後いつの頃からか、警察も伶俐になつて、會員組織でもどしく税を取ることとなり、最近では金五十銭の入場料に對して三銭、金一圓に就いて金五銭を徴集する規定を設けた。所が其道の人はなか／＼抜目はない、時に四十九銭と云ふ入場料を定めて、警察の鼻を明かしたこともあ

つた。又警察は切符の賣場へ人を派出して監視する程の冗員はないから、この種のもの、全部賣上人の報告を信任し、それによつて課税したのである。故にスマートな主催者になると、其所に幾分の掛引は出来たかも知れない。

人知れぬ苦勞

ノツビキならぬのは京都市である。此所は昔から慈善事業の蔭にかくれて脱税が行はれてゐたので、十數年前から、慈善事業と然らざるとを問はず、苟しくも入場料を徴集するものであつたら、一括して全収入の五分位を取立てたものである。他の興業物は知らぬが、有料の野球試合では、終りに近づいた頃、税務署の御役人がやつて来て、先づ入場料の種類を調べた上、自らグラウンドの人数を一瞥して、大概何人位と云ふ見當をつける。さうしてその總収入と見做すべきものゝ約九分を持つて行くのであるが、時によると實際の人数よりも、夥しく多人數に見る事があるので、さうなると主催者側から種々なる説明が試みられる。「今日は招待券を可なり餘計出してゐるので……」「イヤ平場にゐる人の数は、案外少いものですから……」など云つて、見積り人数から五六百を減じて貰ふのが常であつた。主催者になると、人知れぬ氣苦勞があるものである。

寛大なる大阪

神戸市が前述の通り一定の税率によりて、有料試合を取扱ふに反して、兵庫縣は甚だ寛大なもので、關西に於ける初めての有料試合（會員組織の名に隠れざるもの）なる大正九年の市俄古對早大の試合が、鳴尾で行はれた時は、全く看過の形式を取つて、税に關する問題は少しも起らなかつた。此時は早大チームに對する二回試合の謝禮が金五千圓、其上兩チームの旅費滞在費等を全部主催者側が負擔した爲め、尠くとも一萬五千圓内外の入場料を挙げねば收支が償はない。而も大阪に於ける有料試合は初めての試みで、從來無料で試合を見てゐたフワンが、どの位この試合に吸集されるかは、全く以て大なる疑問であつた。而も其上神戸市のやうな税を課せられては目も當てられない。この試合が無事に通過した爲めか、大阪市もこれに習つて、今の所有料試合に關する課税がましいものはない、大正十二年に行はれたる極東競技大會は、全く税の問題に觸れなかつたやうである。

事勿れ主義

東京で春秋二期に行はれる六大學リーグ戦には相當の金が上る。一シーズン尠なくとも十萬圓

以上は欠かさないであらう。三田稻門の如き倶楽部戦、大毎の遠征試合なども之に次ぐべきもので、相當の金が集まるやうであるが、之に對する課税の問題は、未だに研究されてゐない。要するにこれ等の金は選手の懐に一文も入るのではなく、野球部費として使用されるものであるから、他の興行物とは同一視する譯に行かぬ。其點が新らしく研究せねばならぬ所で、稅務署としても大して問題とならぬ迄は放任する方針らしい。云はゞ善意の事勿れ主義が行はれてゐるのである。

強健術から觀たるフワン

大正十四年の夏場所に、能代瀉と出羽ヶ嶽とが、近來稀に見る大相撲を取つたことがある。能代が諸差となつて喰下るを、巨漢出羽は引立て／＼土俵際で強引の小手投を打つて倒す迄、相當に時間が費された。何の因果か、其時私は大きな聲の持主として有名なる金親君の陣取つた下の棧敷に居たが、兩力士が立上つて勝負の極る迄、金親君が大聲を張り上げて騒ぐので、相撲より

も其方に氣が取られてならなかつた。同君は普通の狂角家がやるやうに、力士の名を呼んで聲援するのではなく「ヤー大相撲になつた」能代の諸差しを閃に絞つた「力が這入つてゐる、見ろ！出羽の顔が蒼くなつた」など云ふことを矢繼早にまくし立てる、それが私の頭の上で、ガン／＼破鐘のやうに響くのだから耐つたものではなかつた。

私は其時つく／＼と相撲狂の心理が解つた。相撲も黙つて見てゐては張合が無い。あんなに夢中になつて騒ぐ瞬間が面白いのである。さうして勝負が済むと、丁度自分が相撲を取つたと同様にがっかりして了ふ「相撲に行くと腹が空いて氣持が善い」と云ふのも、かうした心理が働くからである。

相撲のみではなく總ての競技が、之と共通の傾向を持つてゐる。米國の學生界に於て、蹴球が野球よりも歡迎される所以は、ショックを感じるあるものが、より以上に存するからである。デンプシーとカルベンチューアとの拳闘に、六萬餘の見物を集めたと云ふ理由もこれより外にはない。怒濤に翻弄されるコルクのやうに、突き合ひ擲り合ふ壯觀を見ては、誰しも興奮の極に達しないものはないであらう。さればショックあり、エキサイトメントがある所必ずフワンが唱集す

る。庭球や陸上競技が、比較的多くのフワンを吸収せざるは、この傾向が少ないからである。世の中が段々多忙になると、成るべくは代理で済ませ度いものが澤山になつて来る。スポーツの如きもまたその類で、殊に中年を越えると、つひ自分で手を下すのが面倒になるから、出来ることなら、何かの方法で運動をしたと同様な結果を得んと希望する人が多い。かゝる人にとりて競技を見物するのは甚だ好ましい事で、同じ娯樂にしても、劇を見たり音楽を聞くのとは、興奮の度が違ふ丈け、保健の上に多少の相違が来る譯である。



嘗て米國エール大學の校醫が、これに關する實驗をしたことがある。醫師は體格、體質及健康状態の殆んど揃つた學生十人を選び、其中五人には日常の生活を爲さしめ、他の五人には努めて運動競技の中、最も興奮性に富んだものを見る機會を與へた。さうして或る時日が經過した後、兩方の學生を比較して見ると、其所には著しい體量の相違や、神經の強弱があるのに驚かされた。即ち競技を見るべく馴らされた大學生の健康が著しく増進したのである。而してこの實驗の結果は、努めて學生に運動競技を見るやう勧誘する方針を取つたさうである。

されば運動競技を見るフワンの收穫は、單に娛樂若しくは心氣更新の爲めのみではなく、或る程度迄は、選手と同様な恩惠を受けつゝあるのである。嘗て軍隊で野球を嚴禁した理由に、大きな運動場を、たつた九人で占領するから怪しからぬと平氣で云つて退けた上官があつたさうであるが、この軍人は恐らく九人の行動から流露する興奮の効果が、數百數千の同僚に均霑する心理を知らぬ人である。

ボール物語

サン・アンタニオ紙の記者エフ・モースバック君は野球の用球に就いて面白い事を書いた。

野球用のボールを『ホース・ハイド』と云ふのは、實際馬の皮でボールの外側が包まれてゐるから、尤も千萬の話である。されどバットを『ウイロー』と云ふのは時代後れだから止める方がよい。何となれば昔のバットは柳で造られたから『ウイロー』と洒落るのは理由が立つ、今は悉くアツシユ（我とねりこの類）が材料となつてゐるから、ウイローでも甚だ通じが悪い。

序ながら蹴球用のボールを『ビッグ・スキン』と洒落れるのもよろしくない。豚は高價なるが

故に、蹴球の外皮などに使はれてたまるものではない。だから近頃の外皮は、悉く牛の皮を用ふる事となつた。バスケット・ボールの外皮も同様牛の皮である。日本などでは豚の方が牛よりも廉價であるから、運動具屋さん逆輸入を試みてはどうか。

一匹の馬からどれ程の球皮が取れるかと云ふに、たつた百個分に過ぎないさうである。割合に少ない所を見ると、無駄になる部分が多いのであらう。だから往來を通る馬を見て「オイあすこに一百のボールが行くぜ」など通がる手合もある。

日本のボールは全部牛の皮のみを使用するやうだ。私共が選手であつた頃、馬の皮を使ふべく美滿津屋に命じた事がある。出来上つた所は甚だ綺麗で、手觸りも牛程痛くなくて大に得意であつたが、サテ使つて見ると、直ぐ皮が切れて仕方がなかつた。米國では一試合に耐ゆる球を以て、耐久力の單位としてあるさうだが、美滿津の新球は、とても持ちがよくなかつたので、やはり牛に限ることゝなつて了つた。商賣人に云はせると、米國の馬の皮に、アノ様に耐久力が出るのは、別に厚いからと云ふ譯でなく、鞣す方法が違ふのであるさうだ。その方法は嚴重に秘せられて、いくら真似の上手な日本人でも、覗ひ得ざるものだと云はれる。

米國のプロフェツショナル俱樂部では、一試合に平均二十個の新球を使ふ、さうして見ると五回の試合に一匹の馬が要る譯である。ボールの價格は、一個が一弗二十五仙(我が二圓五十錢餘)一ダース廿五弗であるから、各俱樂部は一試合に廿五弗のボール代を支拂はねばならぬ。當時一寸した馬の相場は、二百五十弗位としてある。十回試合すると、用球が一匹の馬を買ふ價格と略一致する。

日本のリーグ戦では、一ケ年どれ程の球を使ふか、可なり莫大な費用に上るであらう。早大野球部が廿年前迄は一個年三百圓の經濟であつたものが、近頃二萬圓を突破すると云ふ一事を以てしても、其頃に比して用球の使用数が、著しく増加したことが分る。昨年早大がカジマ屋に拂つた用球代は四千圓以上だと云ふが、明大も慶應も恐らくこれと大差ない支拂をしてゐるであらう。

日本の用球は牛皮で長持ちすると云ふので、盛んに米國へ逆輸入したさうであるが、近頃は内地の需要が激増したので、米國迄手が出し兼ねるさうである。「外國品に對して耐久力があるのは恐らくボール位のものでしやう」運動具屋はつまらぬ所で氣焔を上げてゐる。されど馬を牛に乗りかへたのは確かに新案で、その頭腦のよい所は買つてやらねばなるまい。

術としての野球

◇ 野球競技の見かた

賢い旅行家が未見の地に入る時は、豫め風土記や地圖を調査して、大體の概念を得る様に、運動競技を見る人も、その競技の案内となるべきものを頭に入れて置くと、其所により以上の興味が沸いて来るものである。殊に野球は、團體競技の中でも、可なり複雑なものであるから、之を漫然として見る時は、大した面白味もないが、よく試合のポイントに觸れて見れば見る程、大卒の滋味が滲み出て来るのである。

私は漸く一通り野球が解つたと云ふ程度の人々を標準として、茲にその見方を記述し度い。勿論エキスパートには用の無いものである。されど私の書いたものに缺陷があり、且つ不足せる點があるならば、幸に叱正されて、最も完備せる見方を提供するものは、識者諸君が當然持たねばならぬ義務であると思ふ。私は便宜上試合の開始前後及び試合終了後の三段に分けて見た、其中最初

は試合の開始に先だつて抱くべき豫備知識に就いて述べる。

豫備知識の一

現代の相撲界に於て日下開山横綱の位置を占めつゝある栃木山が、四五年前、清瀬川の爲め土俵で逃げながら突落され、九分通勝つた相撲に負けた事がある。向ふ所敵なき斯界の大豪栃木山も、清瀬川のみは甚だ都合の悪い相手のやうに思はれる。若し相撲の見物人が、尠なくともこれだけの豫備知識を持つて、其頃の場所に於ける兩力士の立合から、龍虎相搏つ修羅場を見るならば、其所に普通以上の興味が沸いて来て、眞の相撲通のやうな氣持に浸る事が出来るであらう。

野球もまたその通りで、先づ戦ふべき兩チームの戦蹟を知り、更に兩チームの特有の試合振りを研究して置くと、特別の興味を感じるもので、例へば渡邊君が投手であつた時代の明大に對する早大の戦ひ方を見るに、明大は常に第一回に於て得點され、その手疵に惱まされながら戦を續けるのが常であつた。一方早大の弱點は投手難にあつたから、明大は戦の半ばを過ぎた頃、竹内君の球勢の弱つた所を打つて、相手の陣營を攪亂する傾向を持つてゐた。豫めこの行き方を頭に置いて試合を見る時、早大が不運にして一、二回の所で、渡邊君の制球力なき隙に得點の機を失

つたならば、餘程試合はやり悪いものと見るべく、之に反して明大が三四回頃から早くも得點の機を得たならば、もう七八分早大の敗を豫想して差支ないと云ふ事に歸着する。

豫備智識の二

兩チームの力量が接近すればする程面白い場面が展開するのは知れ切つた事であるが、時としては番狂はせがあるので、見す／＼勝敗の判つた試合でも見逃がし悪いのがある。大正十二年の春、立教が健氣にも早大を決勝戦にまで引ずつて行き、更に大正十三年の春、早大、慶應に對して一勝したるが如き、寧ろ番狂はせの部に屬すべきものであらう。由來早大は立教とよく接戦を演じる癖がある。俗に云ふ苦手とでも云ふのであらうか、立教の爲めには失禮な申分であるが、兩者の選手を比較する時は、可なり強味が早大に多いにも拘らず、イザ試合となると、妙に縫れて行く事が再三見受けられた。

苦手と云ふのは總ての勝負に附纏ふもので、相撲などにもこの傾向が著しく見える。近頃はさうでもないが、一時三杉磯がどうしても福柳に勝てなかつた時代がある。三杉磯に聞いて見ると「どうもアノ人の前に立つと、勝氣が全く無くなつて了ふ」と云つてゐた。これを基で云ふと、前

方圓社々長中川八段が、本因坊に長い間二目を置かせられたのも、この苦手が崇つたものであらう。手合から云へば半目の違であるから、先々先と云ふ所であるが、中川八段には、相手が本因坊だけにどうしても勝たねばならぬと云ふ氣が却つて害となり、それからそれへと妙な心理作用に捉はれて打込まれるのであらう。

豫備智識の三

兩チームのスター・プレイヤーを豫め知る事は、野球見物の注意を引附ける點に於て必要欠くべからざるものである。芝居を見ても花形として謳はれる役者を知らない、何となしにもの足らぬ氣がする。殊に外國に居て、言葉のよく判らぬ劇に出逢ふと、唯スターの所作にのみ氣をつけて、それから展開するシーンを見ると、稍や興味を捉ふる事が出来る。野球競技を十分に知らずして觀戦する人は、言葉の通じない芝居を見てゐるやうなもので、どうしても中心となるべき選手の活躍振りによつて、興味を追つて行くより外はない。それが「通」になつて來ると、九人の活動振りを悉く頭の中に入れる許りでなく、ベンチの監督が操つる無言劇パントマイムの信號に迄留意せずにはゐられなくなる。上手は上手なり、下手は下手なりに見所がある、一流の畫家が兒童の自由

畫に興味を惹かされるのも、碁や將棋の名人が、時に下手な連中の對局を見て倦きないと云ふ心理も、恐らくこれと相違はあるまい。

肩馴らしに注意

豫備知識に關する精神的方面の觀察は、先づ此位にして置いて、次に物質的方面の見方に移る。試合が初まる前に最も多く肩馴らしをするのは投手であるが、これに注意して見るのは面白い仕事である。米國の職業野球團は、尠なくとも數人の投手を有するので、肩馴らしには必ず二人以上の投手を並べて投げさせる。さうして監督は肩の調子や元氣の有無を捕手から聞いて、其中最も適したと思はれる者をブレイトに送るのである。故に彼等のライン・アップは試合前五分間と云ふ所で決する事になつてゐる。

我國に於ては六大學リーグ戦を始め、その他の大試合に於ても出場すべき投手は大概決つてゐるので、投手選擇の豫想は餘り興味を惹かないが、それでもこの肩馴らしを見るのは、「通」として見逃してはならぬ仕事である。大正十二年の春第二回戦に於て明大が早大に復報せんとした日、私はフト明大の投手渡邊君の肩馴らしを見ると、いつもの投げ方と違つて、盛んにオーバー・ス

ローを試みてゐる「ハハー、今日は投げ方を代へるつもりだな」と思つて見てゐると、彼は得意のサイド・スローを少なくして、重に上から投げ下す速球を出してゐた。其後渡邊投手に逢つて此事を聞いて見ると「スツカリ投げ方を覺へられて、對慶應の時は十二本の安打を飛ばされた位ですから、投げ方を代へた所、流石の早大も大分面喰つたやうです」と稍や得意氣になつて筆者の間に答へられた。

小野投手の告白

又第六回極東大會が大阪で行はれた時、全慶應は惜しくも比島チームの爲め敗れたが、當の小野投手は「その日はいつになく熱い日で肩馴らしの時汗が出て仕方がなかつた、そんな時はいつも十分投球が出来ぬに極まつてゐるので、困つた事だと思つてゐたら、果然七回にやつゝけられた」と、自己の拿き體験を、サンデー毎日に書かれた事がある。若し熱心なる研究家がある、其際小野投手の肩馴らしを見てゐたならば、其所に何となく一抹の暗影を認めて、鋭い觀察の心眼を光らせずには置かなかつたであらう。

フリー・バッティング

フリー・バッティングの際、打者がバットをどう云ふ風に取り扱ふかと云ふ事も興味深い問題である。大概はバットの握り方と振り方とで、大物を打つ人であるか、單打主義のシューア・ヒッターであるかと判る。これはフワンよりも、兩軍の監督、投捕手などが鋭意の觀察を拂はねばならぬ所で、敵打者の癖、その得意とする所、又は弱點なども、略このフリー・バッティングの時に概念を得て置く必要がある。更にもつと頭を働かす捕手になると、敵の使用するバットを片附ける風をして、その重量迄もチャーンと覚えて了ふさうである。かうなると油断も隙もあつたものではない。

元來フリー・バッティングと云ふものは、投球の方から云へば肩馴らしと同様なもので、愈よ本當の試合となつて急に力を入れると、筋腫を起したり、痙攣を來す恐れがあるので、これによりて身體上半部のフレキシビリティを促進させて置くに過ぎぬのであるから、さう精を出して行ふべきものではない。然るに數多き選手の間には、之を以て練習の一部と心得、一生懸命に力を出し、偶々當りが悪いと非常に悄氣する人もあるが、かゝる選手の多いチームには、勝率が甚だ渺ないと見るが至當である。試合のドタン場に臨んでの練習は役に立つものではない。試験が初ま

る前に、血眼になつてノートを見る學生よりも恐かしい事である。之に反して單にウワーム・アップの爲め大した努力を空費せず、相當の當りを見せてゲン／＼打上けて了ふやうなチームに限つて、自信に充滿したものである。

早大が第二回の渡米をした時、桑港附近で名もない小さな専門學校のチームと試合した事がある。そのチームの選手は悉く年が若く且つ小柄で、少しも恐ろしい氣は出なかつたが、フリー・バッティングは正しく後者に屬したもので、大物は飛ばさないが、何れもよい當りを見せてゐた。私は甚だ興味を抱いて、このチームの攻撃振りを見てゐたが、終始確實なる打撃で早大は苦しめられ、とても勝味は無いやうに思はれてならなかつた。この邊の見方は稍や女人筋に屬するものであるが、試合を見る度毎に目は肥えるもので、遂には至極微細なもの迄も、目に這入るやうになるものである。

打撃順の作成

バッティング・オーダーの作り方は非常に難しいもので、如何に經驗に富んだ監督、聰明なる主將と雖、これには一苦勞するものである。近頃（大正十四年秋）になつて、明大や慶應の打撃

順は、略決定して不動のものとなつたが、一三年前迄は猫の目のやうに變つたものである。これは選手の出来、不出来が著しいからで、その調子をうまく合はせる爲め、監督の任に當る人々は、尠からず骨を折つた爲めであらう。其所へ行くと米國の大リーグは、一流選手の集合團であるから、選手に移動なき限り、一度定めた打撃順は滅多に變更しない。アメリカン・リーグの代表チームたる紐育ヤンキースの如きは、一九二二年と二二年との打撃順に少しの相違も見なかつた。單にこれ丈けの事實なら大して驚くに足りないが、同チームは前年の世界選手權試合に於て、巨人軍の爲め破られ、面目玉を踏み潰した一團であるにも拘はらず、翌年の選手に一人の移動もなく（投手の新加入を除いては）従つて打順に微塵程の變化が現はれなかつたのは、流石は監督ハツギンスのやりさうな事である。かくてこそ彼の自信は、大盤石の如く、貧乏揺ぎもしないのである。

監督の頭腦

最近見せられた打撃順で、最も監督の聰明振りを發揮したものは、大正十二年の春明大が對早大二回戦の陣形であつた。從來最終打者であつた元氣者の二出川右翼を第二打者として梅田捕手

に續かせ、前の對早大一回戦にはヒットこそ出さないが、よい當りを見せた大門左翼を五番とした配置は、甚だ當を得たもので、その結果明大の得たる尊き五點は、皆な一番から五番迄の努力によりて擧げられたのであつた。從來二番打者を以て、單なる犠牲打者とするのは、下級の野球が示すもので、近來の積極的攻撃法はそれを許さない。明大は此所に見る所あつて、敏活野鼠の如き二出川右翼を拉し來りて一番に据え、稻葉主將を最終に我慢させたのは大英斷にして、稻葉三壘としても主將らしい勇退を見せたものである。明大が眞に立派な打撃順を作り上げたのは、大正十三年の渡米後で、二出川、横澤、梅田、谷澤、湯淺などの順序は、どうしても動かぬ所である。早大が山崎君を第一打者として瀬木、水原、井口、河合諸選手の弩級艦を並べた所も堂々たるものである。唯慶應は今春（大正十四年）甚だ不整頓なオーダーを見せたが、秋は確固たるものが出来上るであらう。

飛田監督のノック

シート・ノックは行届きたる監督振りを見せる好個のデモンストレーションである。選手を疲らせないやうに、且つ失策させて自信を傷けないやうに、成るべく球数を少なく取扱はさせて、十

分の効果を擧げるのが必要である。而も一方奮闘的精神は、どこ迄も發揮させなければならぬので、其間を程よく縫つて行く所に、監督者たる苦心は存するのである。フワンは此邊に留意する事が肝腎で、單にボン／＼球を打つ人とのみ思つて見ると、野球の趣味は非常に減少され易い。外野へ打つ球もまたこの呼吸を呑み込んだ人を選ばねばならぬ。私の見た中では、早大の飛田監督が内野手に對する理想的のノッカーで、外野への打者としては、慶應の先輩櫻井君が、非常に頭を使ひながら打つてゐられるのを見て、何とも云へぬ嬉しさを感じる者である。

嚴肅なる瞬間

雪の如き純白の處女球が、審判の手から投手に投げられて、プレイの聲が嚴かに響き渡ると同時に、忽焉としてえも云はれぬ緊張味が場内を支配する。さうしてフワンの心は「サーいよく試合が初まるな」と云ふ待ちこがれた、而も愉悅に充ち／＼た氣分に浸されるであらう。味方の期待を一身に擔つて、先陣を承はる第一打者の引緊つた風貌を御覽なさい、一方これを討取つて幸先を祝はんとするバッテリーの間には、早くも秘密の信號が傳へられ、それが内野から外野へと、誰れがするともなく完全に放送されるのである。堅陣を布いた守備選手の脳裡に、如何なる

種類の球が先づ第一打者を襲ふかと歴然として判明した時、第一球は、弦を離れた火箭の如き勢で飛んで行く「ストライク」打者が好球を看過するが早いか、雷の如き主審の宣告が轟き渡り、次いで深林の如き沈黙は一時に破れて、満場は物凄いとよめきによりて支配される。何と云ふ素破らしい劇的シーンであるか。第一球の投げられる刹那！フワンは先づこの嚴肅の瞬間を含味せねばならぬ。

バッテリーは葡萄酒

守備のコーナー・ストーンは云ふ迄もなく投、捕手のバッテリーである。この兩者の活動力に故障が起ると、全體の調和は悉く破壊される。取分け捕手は、投手を補佐し時としては指導する位置にあるものであるから、一軍中最も經驗に富んだ古強者を必要とする。古來米國の大リーグにありて、世界選手権を得たるチームは、悉く秀いでたる捕手の持主で、例へば巨人軍のプレスナハン。スナイダー。白踏軍のシャーク。クリーヴランドのオニール。赤踏軍のキャリガン。嘗ては荒馬の如き脱線投手ワツデルを御したるオツシーの如きその一例に過ぎない。

バッテリーは丁度葡萄酒の如きもので、永く續けば續くほど呼吸が合つて強味も増すのであ

る。大毎チームの小野、森兩君の如きは、慶應時代からの顔振れであるから、これ程調和の取れた一対は、恐らく現代の日本に於て他に見出すことは出来ぬであらう。されば三田稻門戦に於ても、三田にこのバッテリが、昔日の如き力量を持して嚴存する間は、稻門は苦戦を続けねばならぬ。御覽なさい、稻門の勝つた時は、兩君の何れかゞ欠け、若しくは小野君の肩に變調が來したる大正十三年以來のことではないか。大マチーの偉大を以てしても、ブレスナハンが居なかつたならば、あれ程の大名は博し得なかつたと自分で告白した事がある。捕手の信號に對して、投手が常に頭を振るやうでは仕方がない。バッテリーの身體は、二にして一でなくてはならぬ。野球を見る人は、先づバッテリーの力量を見、更に諧調の取れたチームであるか否かを判別して、それ以上の觀察に移るべきである。

選手交代のノツ

試合の進行に連れて、平生の技倆を表はし得ざる小膽の打者もあり、味方の失策によりて固くなる投手も見受けられる。又頼みとする投手の球が狂つて、亂打亂撃を浴びせられる場合もないではない。これ等の出來事を冷靜に觀察して、適時の選手交代を執行するは監督の難しい所であ

る。併しこの交代は、チーム全體の爲めだからと云つて、大根でも切るやうにドシ〜と行ふ譯には行かない。實際から云へば、さう行かねばならぬのであるが、やはり監督は代へられる人の體面も考慮の中に入れるので、さう抄々しくは行かぬのである。其所が職業團と學生チームと違ふ所で、また人情美の籠る所なのであらう。フワンは選手の不出來を見ると「誰々を代へろ……」と怒鳴りながら無情の追撃を續けるが、その局に立つものは、この聲によりてどれ丈け神經を腦ますかも知れない。されど代へる時機が來たのに代へないならば、屹度試合に負ける。また代へべからざるに代へるならば、これも懲罰を受けるに極つてゐる。名監督の手腕を揮ふ場合は、正にかうした刹那に係るのである。

交代難の實例 (二)

大正十二年のリーグ戦に於て、最も大切に感じたものゝ一は、この選手交代の問題であつた。慶應が第一回戦に明大に敗れた時は、四回目に長濱投手が濱崎投手に代つたのであつたが、アノ時の交代がもう一回早かつたならば、第三回の四點を明大に與へずして濟み、結局負けなかつたかも知れない。又第二回戦に於ても長濱投手は六回に明大の猛打を喫したのであつたから、七回

から新田投手が代つたならば、或は三田に有利な場面が展開したかも知れぬ。神でない限り、必然的の事は云へないが、この第二回戦は三田にとりて大切な試合であつたから、何とか一工夫あり度かつたやうな気がしてならない。

交代難の實例 (二)

大正十一年の春行はれた三田稻門戦には、餘り前例のなき選手交代が行はれ、その油断があつた爲め、稻門が破綻を招いて自滅した事がある。此時稻門は三對一で押して行つたのに氣を安んじて、非常な考慮によりて出来上つた陣形を破壊し、選手の機會均等を計る爲め、五番を打つた有田一壘を市岡君に、久保田君を休ませて石井君を三壘に送つたのは、飽迄も敵を輕視したる慢心の策であつた。果せる哉十回に至つてピンチに出た高須君左翼に快打し、次の高濱腰本兩君にも安打が出て同點に漕ぎつけられ、十回市岡君に失策が出で、またく猛打を喰つて遂に潰滅したのである。

これと丁度同様のプレイが大正十三年の秋、慶明戦に見られた事がある。それは決勝戦で、慶軍濱崎投手の調子悪からず、慶五對二の成績で第七回に入るや、突然桐原遊撃がプレイトの上に

立ち、忽ち三點を與へて、あつたら勝つべき試合を引分けて了つた。これは前の三田稻門よりも更に無意味のやうに思はれてならぬ。内部に止むない事情があつたかも知れないが……。

野球を見る人が選手の交代に就いて、兎や角云ひ得るやうになつたら、先づ一人前のフワンになり得たと云つて差支ないのである。

面白い打撃戦

野球試合で興味を惹くものゝ一は、バッテングである事は餘りに明白であらう。打撃力に富んだ打者が、ボックスに立つと、俄かに場内の空氣が動搖を初めて「何事が起るであらうか」と云ふ豫覺に、思はず胸の高鳴るを覺える。投手としても此種の打者に對する時は、態度が一變して、如何にして討取るべきか頭を悩ませる。再三再四捕手の示す信號は拒絶され、最後に意見が一致して繰出す一球、憂然たるバットの快音に連れて、打たれた球はぐんぐんと延びて外野の空遙かに飛ぶ時、敵も味方も、グラウンドを取圍むフワンも、無心になつてその球の行衛に視線を注ぎ、群集の裡に球が見えずなると同時に、思はず歡聲を擧げて打者の名を賞め稱へる。野球の興味は、實にこの打撃を中心として捲起されるのである。打撃の振ふ試合は面白く、一向當らぬ

投手戦程氣の減入るものはない。

打者の癖

打者の巧拙は足の踏張り方で判る。右利の打者が、左足を三壘の方へ引いて打つならば、其人は大した打者でない。大學チームにてこの種の打者を見ることは稀であるが、中等學校の選手には今尙多く認められる。この種の打者に限つて、左翼の方へ度々フワウルを飛ばし、外角のアウトロは殊に弱くて其所を攻られて凡打か三振をする。要するに球を恐れる打者であるからよく打てやう筈はない。之に反して投手の方へ一步踏み出して打つ打者には油斷がならぬ。この人は球を恐れないで突進する勇士であるから、前者に比しては氣合の籠り方が違ふのである。

「外野手は必ず強打者たらざるべからず」とは動かし難き野球道の至言である。又守備に於てのみ困難でない一、二壘手も同様な打者でなければならぬと思ふ。バッテリーを除いて、三壘と遊撃とは守備の難關に立つものであるから、打力があらば結構、なくとも十分守り得る人ならば選手としての職責は盡せる筈である。完備せるチーム程かうした傾向は顯著になるもので、米國の二大リーグは申すに及ばず、我が強チームにありても、さうした事實は十分に見える。例へ

ば早大では、河合。氷室。瀬木。明大では中川。熊谷。二出川と云ふ顔振れ、加ふるに打たでも許さるべき早大の井口、根本、明大では谷澤、林の諸君は共に相下らざる打力を示してゐる。この二チームが頭抜けて強いのは全く偶然ではない。

チームの整頓、不整頓は、如何なる場合を問はず、此邊に着眼して觀察すると、大概は判るものである。

走壘の巧拙

攻撃の方面に於て打撃に次ぐ重大なるものは走壘であつて、チームの優劣は、この巧拙に、よりに多く決定されるものである。毎度引合に出される巨人軍のマグロー將軍は、殊に走壘に重きを置き、選手のパンツがさけて股が見えるやうになる程強引の盜壘をさせた事は前述の通りである。大正十一年の秋來朝したるハンター軍に屬する米國一流選手が、歸米後發表したる意見を纏めて見るに「日本選手の頭抜けて目立つ欠陥は走壘の遅き事で、彼等は幼少の頃から下駄と稱するものを履く爲め、あたら發達すべき足部の筋肉を拘束する爲めではあるまいか」と稱してゐる。走壘の遅速は、野球の趣味に多大の關係を持つのみならず、勝負の分岐點を形成する場合が

頗る多いのであるから、鋭敏なるフワンとしては直にこの點に留意しなければならぬ。第六回極東大會で日本チームが敗れた原因の一は、確かに比軍選手が、我々等の選手に比して走力に富んでゐたからである。即ち同軍が破綻を招いだ第六回に、走者三、一壘にある時、小野投手は敵の打つた投手ゴロを拾つて、直ちに二壘へ投げダブル・プレイを演じやうと思つたのであるが、敵が速い連中のみであるから、三壘の走者を刺す事にしたと、戦後に語つたさうである。「彼等は速い」と云ふ概念が頭にある事が、これ丈け小野君の行爲を制限したわけである。若し此時併殺が行はれてゐたならば、同回の破綻は來らず、従つて日軍が勝利を得たかも知れない、三田稻門戦などが、もう少し面白くなってはならぬのに、何となく物足らないのは、走力の減却した人々が、半分以上を占めてゐるからではあるまいか。

危機打者の操縦

試合の懸引で面白い現象の一は、ピンチ・ヒッターの取扱方である。試合が六七回を過ぎた頃、試合の成行を御覽なさい、必ず「自分が監督ならば、此所でピンチ・ヒッターを出すかな……」と思ふ場合が、一度や二度は屹度あるものである。而して偶々その考が一致した場合、自ら陣頭

に立つて三軍を指揮するが如き感に打たれるであらう。最近ピンチ・ヒッターの出し方で成功した例は、大正十二年の春に行はれたる早大對立教の決勝戦であつた。九回の裏早大は三點を負けてゐるので、松本主將を退けて戸田左翼に打たせると、それが左中間三壘打となつて、其後猛打又猛打、一舉に四點を恢復して貴重な勝利を得たのである。此時主將の顔のつぶれるのを恐れて、飛田監督が躊躇したならば、立教に敗れて、早大野球史に一大汚點を附けたかも知れない。

大正十三年の秋十一月慶明戦が調布で行はれた時、明大は九回に二點を取り、一對三で最後の守備に就いた事がある。慶は先づ永井が四球、三村が敵失に出たが、二死となつたので、生還の望みは絶えたと思はれたるに、此時ボックスに送られたる無名のピンチ・ヒッター西川小冠者は、矢庭に湯淺投手の第一球を中堅頭上に二壘打して、前二者を本壘に鷹き、遂に十回戦引分けの結果を生み出したのである。此時無名の打者丈けに湯淺投手が油断して直球を投げるに相違ないから「第一球を打て」と云ふ教訓が、西川小冠者に與へられたさうであるが、うまく時機を見計つたものである。ピンチ・バッターとして此人程成功したのは、甚だ妙ない。

審判の良否

野球競技の見かた

審判員は試合の要石である。審判の宣告がハッキリしなかつたり、力のない、生ぬるい聲であつたりすると、折角緊張した気分が、スツカリ壊されて了ふ。更に裁断の正確を誤るに至つては沙汰の限りで、チームの迷惑はさる事ながら、フワンとしても甚だ不本意の至りである。嘗て記者が渡邊大陸君と大阪行き汽車で一緒になつた時、審判難の話に花を咲かせた。同君は「共に大切な試合ですから、是非主將若しくはそれに近い重味のある人を審判に選ぶ方針を、次のリーグ戦會議に提出し度い」と云つてゐられたが、實際さうなくてはならぬ事と思ふ。六大學リーグ專屬の審判は出来ぬであらうか、記者はさうした人々の選ばれる日が、近き將來にある事を信じて疑はない。

審判も選手の「アガル」やうに、心の冷靜を失ふ場合が可なり多いもので、一度失策すると、それが何時迄も氣になつて、思ふ通りの審判が出来ない事もある。それに意地の悪いフワンがゐる半疊でも入れるならば、尙更ら耳が後方に向くやうな氣になつて、やりきれたものではない。審判が打者の後方に立つ態度をよく見てゐると、怪やしかつた宣告と自信のある裁断との間に、何となく違つた舉動が見へるものである。人が悪いやうであるが、試合が段々判るにつれて、これは

是非共見えて來ねばならぬ現象の一である。

名投手となるには

はしがき

守るとしては投手程重要なものはない。攻むるとしては打撃に上を越すものはない。故に筆者は野球術を書くに當つて、この二者に全力を注いだ、注ぎ過ぎる程研究の手を擴げて見た。その爲め捕手以下が手薄になつて龍頭蛇尾の如き憾がないでもない。されど筆者は悔ない、欲を云はば全部をこの二つのもので埋め度かつた。それ程の興味を以て「名投手となるには」『バッティン』の秘訣』の二篇は出来上つたのである。

野球チーム九人の中で、投手程面白く、且つ難しいものはない。投手はチームの心棒であり、要石である。心棒の曲つた獨樂はよく廻轉しない。要石の固めなき家は常にぐらつく。さらば眞にチームのコーナー・ストーンとなるべき投手は如何にして養成せらるべきか、蓋し野球の研究に於て、これ程興味深いものはまたと無いであらう。投手の家は沙上に築くべきものでない。條

件、制球、投法、策戦、守備、打撃の六大地鎮を行つてから、初めて完全なる地盤は出来上るのである。何事も出發點が肝要で、悪い出發の落着く先は失敗の國より外はない。よき出發必ずしもマシユーンを作り上げぬかも知れないが、少くともそれに達する正しい道程を踏出すことは出来るのである。さらばその道しるべを致さう。以下米國に於ける斯界の大家、ヂェー、イー、レイス氏の投球術を基礎とし、其他斯道の大家の書いたものに依り、之を我國の野球界にあて箴めて御互に研究したいと思ふ。

一 投手となる條件

「秀でたる投手となるにはどんな體格や體質が必要であるか」といふ問は、常に耳にする所であるが、これに對する返事は至極簡單で、唯身體が丈夫で、四肢が通常の發達を遂けてゐるならば、大投手となり得る素質はあるものと見て差支ない。その證據には、米國大リーグに於ける一流の大投手を見よ、高いものあり低いものあり、肥えたるものあり瘦せたるものあり、アリアン人種あり、ラテン民族あり種々雜多の代表的人物が、それぞれの特長を發揮しつゝ活躍してゐるではないが。

投手と巨人

併しこゝに特に注意すべきことは、從來の投手界に於て輕量の人が成功した例が甚だ少ない事である。換言すれば十八貫以下の人ならば、投手となる希望は初めから抱かぬ方が安全だと米國の識者は云つてゐる。されどその重量は彼地に於ける標準目方であつて、我國の選手にありては、身長が平均三四寸彼地に比して足りないがため、もう少しは目方も割引して見るが至當であらう。されど從來我國野球界が生んだ大投手を見るに何れも目方の多い巨漢が多かつた事は否定し難き事實である。即ち最近に於ける小野、谷口、渡邊、湯淺、竹内などの名投手を初めとして、菅瀬、蘆田、大井の諸君の如きは、恐らく米國の標準から比較しても合格する人々であらう。何故に投手に重量が必要かといへば、彼等は九人の選手中、最も烈しい練習を續行するものであるから、大リーグに於ける試練中の投手は、その舞臺に入つてから數箇月の後には、スツカリ脂肪分を失つて大概二三貫目の重量を失ふことになつてゐる。假りに十八貫キチキチの人が、三貫を失つて、十五貫となつたら、米國の野球界にありては、外野手としても立つ事は出来ぬ程、悲愴なる外容を表はすに至るであらう。併し身長は別物である、少し位平均下の發達をした人でも、

目方も相當にあり、四肢が十分の發育を遂げてゐるならば悲觀するには及ばない。お断りして置くが、目方が十分にあるといふ事は、デブさんを意味するのではなく、相當に筋肉の發達した巨漢を指すのである。

ワルシユの告白

投手となるべき基礎的要素は前述の通りであるが、さて優秀なる投手となるに必要なものとしては、強い心臓、鐵の如き肩腕、さうして不撓不屈の勇氣とが要求される。此上欲しいものは、よく「氣の附く心」を持つ事で、寧ろ體量に缺くる所あるも氣の利いた人の方が成功率は多いのである。從來米國野球界が産み出した模範的體質の所有者たるエド・ワルシユは、市俄古白踏軍にあつて、長い間斯界の牛耳を握つた人であるが、その優秀なる體格は、投手としての生命を失つた後でも、尙多くの嘆賞家を引附けずには置かなかつた。此人の告白はかうである。「若き投手が肩の弱い事を感じ出して、せいぜい一週間に二回の試合を持て餘すやうになつたら、其人は投手としての壽命が、もう無いものと見ねばなりません。野球界を通觀するに、身體の重量は投手の最も要求する資本であります。輕量な投手は、試合の初期に於て素晴らしい馬力を見せても、

終局に近附くに從つて、威力を失ふものです。眞の耐久力は、偉大なる體格と健康の所産であつて、歴史に残る投手界の偉大は悉く代表的の巨人揃ひでした」云々

全國大會の投手

されど十七八歳の若い人は、丁年に達するまでまだ三四年あるのであるから、必ずしも上述の如き重量がなくても、これを體得し得べき望みさへあるならば、投手たるべき野心を捨てる必要はない。大正十四年夏鳴尾に於て行はれたる全國中等學校野球大會の檜舞臺で活躍したる中學界の花形投手を見るに、高松の宮武、神港の町田、大連の副島、米子の三井、東山の森田などの諸選手は、悉く中學界の巨人で、重量に於ても間然する所がなかつた。さうして早く敗北して引上げたチームには、年少にして十分の體量を有せざる投手が多かつたのは、這般の消息を遺憾なく語るものであるまいか。またこれ等優勝圏内に入るべき巨人投手連が、揃ひも揃つてチームの重要打者であつた事も不思議で、これはやがて中學界の野球が、大學のそれに比して著しく微力のためか、若しくは選手の人選に苦しむ結果と見る事が出来るであらう。

不動の教訓

名投手となるには

以上の條件に適する青年にして、投手たらんとする人は、毎日適度の練習を續けて、肩や腕の筋肉を發達させねばならない。其間一週間に一二回の實戦を行ふ必要もある。不斷の練習は、肩腕の筋肉を強固ならしめるのみならず、その人の體格を立派なるものに築き上げるものであるが、若し程度を誤つて、過勞に失する時は、却つて無一物に終るものであるから非常の注意を拂はねばならぬ。投手への忠告として傳來せるものに「多く投球せよ、されど餘りに烈し過ぎぬ様に、烈しく投球せよ、されど度を過ぎぬ程度で」といふ言葉がある。これは一見矛盾した教訓のやうであるがよく噛みしめて見ると、頗る味のある教訓だと思はれる。

投手に必要な手先と前腕の運動は、之を發達せしむるために、或る特種の運動をするも一案である。日本の大學には體育館（ヂムナヂヤム）をもたないから學生がこの種の練習をする機會は、極めて尠ないのは氣の毒の至りである。取分けカーブは悉く燦衝を起し易い前腕で繰出すものであるから、餘程大切にして訓練を加へねばならぬ。

投手と日常生活

大投手となる訓練は、グラランドの上に於てのみ行はれるものでなくて平生の生活狀態と密接な

る關係を有する事をも忘れてはならぬ。即ちグラランド以外の訓練で、積極的のものを擧ぐれば、室内體操の厲行である。所謂近代の「フィジカル・トレーニング」が示す所の健康には絶対に服従して、肉體的の精氣を、これによりて涵養するのである。青年の多くは室内體操の如き兒戯に類するものとして輕視する傾向を持つてゐるが、これは重大なる過失である。

消極的方面としては、酒を飲まぬ事、煙草を手になせぬ事、發酵し易き液體を飲まぬ事、夜遅くまでかるたなどの遊戯に耽らぬ事などが必要であるが「汝の外容を整へよ」といふ事も、甚だ大切な要件である。歐洲戰爭の際、軍器や軍服の手入に努め、シャツの洗濯を怠らず、髭を剃り靴を磨いて戦線に出た兵士の能率は、他の兵士に比して二割五分程舉つたと傳へられてゐる。敢て驕奢な花々しい服裝をせよといふのではなく、キチンとした、誰が見てもすがすがしく感ずる程の服裝は、やがてその人の心をも引立てさせて、多少の能率を増進するやうになるのである。

身體の鍛練

室内體操と云つても、フィジカル・カルチャーが範示する全部を繰返す必要はない。第一が毎日朝起る時と、夜寢床にはいる前に、約十五分位諸關節を一通り動かす體操を行へばよい。出

来るならば戸外がよいのであるが、之は要するに新鮮なる空氣を吸ふ事が必要なので、室内でも戸をあけ放つて行へば差支ないのである。空氣は夜のもので、濕氣のあるものでも、新鮮のものでありさへあればよい。いくら乾いた空氣でも、肺臓の中に入れば濕つて了ふものであるから。

第二は朝一息急歩で半時間程歩いて来て、その後冷水摩擦を行ふのである。近頃冷水浴は餘り尊重されないで、掌を水に浸して、それで全部を摩擦し、其後乾いたタオルで拭ふのが最善の法とされてゐる。

第三は野球季以外には自分の最も好む戸外運動をなして、身體を鍛へ置く事。第四は最大の注意を胃臓に拂ふ事である。胃は萬病の基であると同時に、運動家の元氣を喚起する根源地である。食物は脂氣の多いものを避けて、何ものでも十分に咀嚼する事が必要である。大食は大酒と同様、運動家を滅亡の谷につき落すものである。左に食事に関する「ドント」五則を擧げて大食家を戒める。

- 一、練習前には十分の食事を取らぬ事。
- 一、茶・酒・コーヒー・刺戟飲料・パストリー（麥粉を焼いた菓子）・藥味・煙草・滋養に富み過ぎた

グレービー（西洋料理に使ふドロドロしたもの）・天麩羅などを避ける事。

- 一、練習中は豚肉を取らぬ事。
- 一、食事は十分に咀嚼する事を呉々も忘れぬ事。

二 投球術のABC

投手にコントロールの必要なはいふまでもないことで、投手たるべき第一要素として、耳にタコの出来る程、先輩からコーチされたり、書物の上で教へられた人が多いであらう。又不動のコントロールを得る爲には、俗にいふ身體の固めが肝要で、十分なるボデースウィングによりて全身の力が球の背後から突進して行くやうに努めねばならぬ事も、野球のABCとして大方は心得て居られるに相違ない。併しこの全身の力を肩部に集中させ、それを腕・手首・指頭に及ぼし、遂に飛んで行く球に彈丸の如き速力と、而も的確なコントロールを與へるのは、口でいふやうにはなかなか樂に行くものではない。其處に大なる努力と悟入とがなければ事實となつて現はれては來ない。又投手が打者にのみ面して立つ時は「帽子の外、頭に何物もない」と云ふ諺の通りであるが、一人でも走者が出たとすると走者の無い時行つたボデースウィングが制限せられる結果、

それまで一人前の投手であつたものが、忽焉として半人前にも足らぬものになる例が甚だ尠くない。

我が二大投手

これを我國近代の投手に當嵌めて見るに、明大野球團を今日の如く有力なものたらしめたる鬼才渡邊投手の如きは、走者なき時の腕前と、ある時の活動力には非常なる相違があるやうに見受られた。同投手の後を享て立てる湯淺投手に於て見ると、やはり同様の傾向が著しい。一昨秋早大との大事な試合に於て、一死後山崎君を出した後、大下、有田二選手に四球を出し、引續き井口君にも四球を與へて押出しの一點を與へたるなどは、全くリーグ戦稀に見る珍現象である。その前に行はれたる對慶應との試合に於ても勝ちも勝つたが、この人はどうも走者が出ると力量が非常に減殺されるやうであるとの評が多い。

意外の悲劇

此の如き現象は決して我國の投手のみに限られたことではなく、堂々たる米國一流選手の間にもあるから面白い。その代表的のものは、去年野球期の初期に於て巨人軍の名監督マグロー將軍

が、十三萬圓を投じて買取りたるベントレー投手で、走者なき時の彼は、とても手がつけられぬ程の猛球で敵を苦しめるのであるが、一人でも走者が出ると見るに忍びない程の變り方をして亂聲の憂目を見たのが再三再四に止まらなかつた。最近行はれたる紐育ヤンキースとの世界選手權試合第二回戦には、先年來朝したる左利の名投手ベノックと對抗して鎬を削つたのであるが、四對二で惜しい負け方をしてゐる。不思議なことは、その日例のベープ、ルースに打たれた二本の本壘打は、悉く走者が壘にゐない時で、第二回の劈頭ワード二壘手に打たれた本壘打も、得意の大スウィングをなして心行く許りの投球をした後であつた。走者壘にある時弱かるべきベントレーが、この大試合には正反對の結果を見たのは、全く番狂はせの悲劇である。

ピツペンの挑戦

米國大リーグ中の花形たるべき大投手ベントレーが、走者ある時著しく強味を減するに就いては、彼地の識者間にも大分問題となつたことで、八月下旬の米國野球週報に、バルチモア・ニユース紙の運動記者ローチャャー・ピツペンと云ふ人は「紐育の各運動記者が、ベントレーのこの變り方を論じて、全く心の平靜を缺いて神経質になるからであるといつてゐるが大間違である」

と先づ大段平を振翳して挑戦し「實際六萬五千弗の大投手に心の平靜を缺く程の鍛練を缺いてるやうとは思はれない。彼が力量の減少する原因は、走者が壘に出たる後、ボデー・スウィングを制限せられるからである。換言すれば彼の球が渾身の力を背景として繰出されないからである、彼れ獨特の螺旋状ワインド・アップなくして投球する時のチャック・ベントレーは丁度墨國隨一の豪傑サムソンに手錠を箝めて獅子と戦はすやうなものだ。彼がこの缺陷を脱出する時は、恐らく天下無敵、シスラー。ルース。ホンスビーの健棒も忽ちにして威力を失はねばなるまい」云々。氣焔當るべからずだが、紐育の記者達も、場末の犬に吠え立てられて黙つてゐる譯にも行かぬから、今秋の大試合でも終つたら一議論花を咲かすことであらうと思はれる。

シエリダン翁の裏書

併しピツベン君の旗色は今の所非常によい方で、野球學の大家として推奨せられるジョン・シエリダン翁も至極賛成の意を表して居る。さうして彼れは見聞の博いのに任せて種々の方面からその説に裏書を與へ、更に面白い解説をも附加した。翁の説に従へば、分らず屋の連中は投手が打たれ出すと、直ぐ神経質になつたからとか、俗にいふアガツタから等と解釋するが、實際はさ

うでなくて、ワインド・アップの不十分に歸着する所が多いのである。其證據には膽甕の如き豪氣な投手の間にも、この種の傾向を持つ人が澤山あるではないか。御覽なさい、走者を出すと著しく弱くなる投手は、概して瘦せた人々のみで換言すれば肩の筋肉が十分の發達をしない人々に多くこの現象を認める。肩の筋肉が強くなければ早いモーションで投球する時と、十分のワインド・アップをした後との差に非常な徑庭が出来る譯で、之に反して頑強な身體の所有者は、平常から十分のワインド・アップを要せず、走者が出た時と大差なき程度で投球を繼續して行き得るから、著しい變化を見ずに済むのである。従來の實例に徴して見るに、ラツグス・レイモンド。ウォルター・ジョンソン。ハワード・アークなどの大投手は、何れも大きなワインド・アップを要求する連中であるが、揃ひも揃つてヒョロ高い方で、有名なマシューソンも馬力のあつた頃は、可なり大きな投球モーションをしてゐた。是と對峙して小さい投げ方をする人々は、クラークソン。フワーギュソン。キング。ニコルス。ヤング。ルーシーなどであつたが、この人々は見た許りで強さうな頑丈な骨格の所有者で、肩に籠る力の程は蓋し計り知る事が出来ぬ位であつた。

小野谷口の投法

名投手となるには

この論調から見ると、成程明大の渡邊、湯淺兩投手は、日本人としては可なり長身の方であるが、肩の筋肉は小野投手などに比すると幾分厚味を缺いてゐるやうに見受けられる。小野投手のモーションが走者が壘にあると、あらざるとに拘らず大差ないのは、聽て投球の内容に大なる變化のないことを示すもので渡邊、湯淺の二投手には、それが明らかに見られるだけ、それだけ弱味となつて表はれるのではなからうか。小野投手と對峙して三田稻門戦の花形であつた谷口投手は、元來が稍やスナップに近い投げ方であるから、走者が出て大した苦痛を感ぜずにスラストラと捌いてゐた。

野球の秘訣

かく論じたものゝ要するに投手は勝てばよいのである。大きなモーションも小さいものも、根本的に可否を決定する譯には行かない。身體のガツシリした強肩の人は、大きなウィンド・アップをする必要がないから之を敢てしないので、又身體の瘦せぎすの人は、出来るだけ十分のスウィングがなければ、投球の能率が上らないといつたやうなものである。唯問題は壘に走者が出た時にあるので、此間多少の利害はあるかも知れないが、所詮は練習の結果、その缺陷は或る程度

まで填補されずにはゐない。慶應の新田、早稻田の大橋、立教の竹中投手などは何れも巨漢とはいへないが、日常烈しい練習の賜によりて、走者に對する取扱は何れも立派なものである。「野球選手として成功の秘訣は三つある。一に練習、二に練習、三に練習」と誰やらの云つた言葉は、實に味のある千古不滅の名言である。

野球の禪的方面

コントロールを修得する精神的の秘訣としては「心をブレイトに集注せよ」といふ戒めがある。投手がコントロールの稽古をする場合には、獵師山を見ずで、打者も、捕手も、コーチャーも、見物人も總て眼中に置かずして一切を空視し、唯ブレイトその物を睨めて、何れの部分に投球すべきかを決したが最後、自分以外のものはいふまでもなく、球を見ず、手を見ず、グラウンドを見ず、驀然として志ざすポイントに向つて猛球を投げ込む氣分が必要なのである。かうなると野球の要諦は禪の妙機に通ずるもので、悟入の刹那は蓋し不立文字、説明を超越し、唯自らが知り、自分か味はふべき醍醐の法境に達すると同時に、初めて掌を打つて所謂捻花微笑の愉悅三昧に入ること出来るのである。

三 投手の資本

投手が打者を生擒するにはどれ程の資本が要るかと言ふに、先づザット左記のストックが揃つてゐなければならぬのである。

(一)、コントロール。(二)、威力ある速球。(三)、自信の十分ある或種のカーブ一つ。(四)、チェンジ・オブ・ベース(球の緩急)。(五)、一壘への牽制球をボークにならぬ範圍に巧みに行ふべき事。

何事も一手販賣と云ふ事は必要である。投手にあつても獨特の投法を有する事は頗る有利なもので、例へばカール・メイスのアンダー・スローが何故に有効であるかといへば、他の投手は餘り用ひないから、打者も練習する機会が少ない、即ち常に新しい投球法に面するがために打ち難い譯なのである。又速球を以て有名なるウォルター・ジョンソンが依然として大を爲す所以は、彼の速球が有する速度は、他の投手が有するものよりは、一調子頭抜けてゐるからなので、其他サリーの十字火的投球・エラーのスペシヤリティー・ボールと稱せられる一種獨特の投法、『ブレッツド』デューと稱名さるゝジョー・ブッシュのフォーク・ボール(球を第一二指間に挟みて投げるもの)などは、何れも打者にとりて氣持のよいものではない。併しこれ等の球も常に亂用しては効果

が少ないものであるから、イザと云ふ場合に出すべき武器として蓄へ置き、平常は優れたるコントロールによりて打者の缺點を覗ふのが定石となつてゐる。又時に緩球を出すのも頗る効果あるものである。

速球の威力

近頃の米國野球界にありては『どんなカーブを持つてゐるか』と問ふ代りに『球の速力はあるか』と云ふ問が先づ新參の投手に向つて發せられる相で、その裏面には球が速くないと、假令優れたるカーブを有するも大した効能がないと云ふ事を最も雄辯に語つてゐるのである。速球の握り方は大した相違はなく、要するに十分のボディ・スウィングをした後、スウィングの最高點から投出すべきオーバー・ハンドのものが多く、球が手を離れる時は、第一、二指頭が最後に球面を離れるやうにすると、球の軸は地上に平行し、廻轉は上空に向ふから、その廻轉が烈しく續く限り、非常な勢を以て打者に近寄つて行くのである。而してその廻轉が餘りに急である時、球はいくらか上り氣味になつて、進路を取るから、打者は往々にして球の下部を打ち小さき飛球に終るのである。

三種のカーブ

カーブの中でドロップ及びアウト・ドロップは、前者の際は速球と正に反対の廻轉を球に與へ、後者は幾分之を斜に投げ出せばよいのである。ドロップとアウト・ドロップとは似たもので、効果の上から云ふと、ドロップの方が數段勝れてゐる譯である。何となればドロップは上から下に向つて一直線に降下するのですから。打者がバットを球に出逢はさす點は唯の一つの外はないが、アウト・ドロップになると、斜行する丈けそれ丈けバットが球に觸れる場面が多くなる譯である。それがアウト・カーブになると更にその機會が多いので、大リーグの間にはこの種のカーブは殆ど使用されざる事になつてゐる。

△△盛のアウト・ドロ

我國の投手を見るに、不思議な程アウト・ドロを使ふ投手はあるが、本當のドロップを使ふ人は甚だ稀れである。これはどう云ふ譯だか、一寸判斷に苦しむ次第で、察するにドロップはアウト・ドロに比して難しく、又アウト・ドロでも結構打者を牛耳る事が出來ると云ふやうな理由が原因をなしてゐるかも知れない。但しこれは日本のアマチュアのみに存する傾向かと思つてゐたら、

先年ミカド俱樂部の投手として來朝したるマツキー及び其後來朝したる同軍の首腦にして相當なま味のある投球振を見せたるヴォービーの如きも、アウト・ドロの一點張りで、其他はコントロールで壘角を覗ふと云ふよりは外の藝はないやうであつた。既にアウト・ドロの投法が出來、相當の威力が附いて來たら、是れ純粹のドロップを研究されん事を希望して止まない。

フエード・アウエー

マシユーンソンの説明に従へば、フエード・アウエーは説明し易くして實行するに頗る難いものである。説明の順序としてアウト・カーブの投げ方を申上げると、右利の投手がこのカーブを投げた瞬間、掌は上方を向き、拇指は三壘の方に引くりかへり、腕は一壘に向く事になる。かくて球は右利の打者より離れんとする廻轉が與へられるから、手首の捻り方が強ければ強い程、カーブも大きなものとなつて打者を脅かすのである。フエード・アウエーは正にこのカーブと同様の握り方、投げ方を以てするのであるが、いよいよ球を捻らんとする刹那、一壘の方向を取るべき腕は反對に三壘に向ふのである。従つて手首のひねりはアウト・カーブと正反對のものとなり、さうしてその結果はフワフワとした大きなイン・ドロップをするのである。

このフェード・アウエーは「ワン・マン・カーヴ」と云はれて、マシューソン以前にこれなく、以後にまたこれなしと迄極言される程難しいものであるから、好奇に驅られて練習せぬ方が宜しい。

十字火的投法

十字火的投法は、從來我國の投手のやり方を見るに、一々プレートを踏みかへる癖のある人を多く見受ける。即ち右利打者に對して内角から外角へかけて投球せんとする時は三壘寄りのプレート角を踏み、之に反對の結果を見んとする際は、一壘寄りの角に出るやうである。かくする結果は、打者に豫め投手の計畫を知らせるやうなものであるから、決して有効な投球法と云ふ事は出来ない。サリーの所謂眞のクロス・フワイヤーと云ふのは、投球前にプレートの踏代へするのではなくて、投球の位置は飽く迄も變更せず、唯投球の刹那、足の踏み出し方を變化させるのである。投球規則によれば、投手は投球の際打者の方向に一步踏み出さねばならぬ事になつてゐるが、この踏み出し方は必ずしも一直線と云ふ意味でなく、打者の方面にさへ足が出ればよい譯であるから十字火的投法の爲め、幾分出足が三壘により、若しくは一壘によつても少しも差支へは

ない譯である。

スロー・ボール

速球の間に緩球を交へ、同じ速球若しくはカーヴにありて、幾分速力を變化させるのは打者の勝手を甚だ狂はせるものであつて、先年早大投手の谷口君が、ヤンキーの投手ホイト君のコーチを得た後、ハンター軍の鋭鋒をこの緩球一點張りで挫いた事がある。惜むらくは此時谷口君は緩球のみに依頼したが、若し時々速球を交へたならば更に効果が多かつたであらうと、後にモリアリチー審判の批評したのは、記者も頗る同感である。ミカド俱樂部の投手として來朝したるヴォービー投手も、よい緩球の持主で、有田、井口などの強打者連に對して時々之を用ひたが、何れも小飛球となるか、緩ゴロとなつて容易く片附られてゐるのを見せられた。

緩球の持ち方は種々あつて一定しない。大投手は色々苦心して球に廻轉を與へぬ工夫を凝してゐる。或る人は掌に球を出来る丈け吸込ませて、投球の刹那指を早く離すやうにする。又或人は球を拇指と小指とで挟みつけ、小指のみでなく無名指をも用ゐて第一、二指を浮かせる人もある。最後に心得べきは緩球を投げる時は、正に速球を投げる時と同様のモーションでなければならぬ

名投手となるには

事で、それでないと思はれ打者に備へられて、飛んでもない快打をされる事がないとも限らぬ。

量よりも質

器用な投手になると、種々のカーブを練習してこれを無二の威力の如く心得る手合もあるが、カーブは量よりも質の問題で、多様のカーブを八分通り習得するよりは、一つでも十分我物にするに限る。されば若き投手は何よりも第一にコントロールを十分に習得し、捕手が要求するポイントに間違なく投げ入れ得るやうになつたら、それで一段落ついたもので、其外アウト・ドロツブに相當の自信が出来たならば、アマチュアの投手として、先づ一人前と云つて差支へないものであらう。

四 打者に対する研究

打者の缺點を看破する眼力程投手に必要なものはない。各學校チームにありては、對抗する打者の数が少ないので、打者の缺點を記憶するに大した苦心を要しないが、六個月間に百五十四回も試合する米國大リーグの投手にありて、一々之を頭の中に入れるのは、役者が科白を暗記するより困難だと云はれてゐる。昔シユミットと云ふ投手は、暗記力が鈍いので、小さい手帳をボケ

ツトの中に入れて置いて、缺點の分らぬ打者が出ると試合中に一々それを繰つて見たと云ふ挿話もある位である。されば各リーグの書記は、各野球期を通じて敵打者の成績や癖などを悉くノートに書き付け、之を刷物として、バッテリーを初め各選手に渡さうである。その中の分類を見るに、打者が第一球を覗ふか、成るべく待たんとするものであるか、缺點は外角の低い所にあるか、反對に得意とする所は内角の高い邊であるか、短打を主とするか、長打を望むか、どの方向に打つ癖を持つてゐるか、彼の常に打つものは主にゴロであるか飛球であるかなど、要するに打者の長短所を初めとして、打癖を悉く網羅したもので、一通り之を知つて置くと、投手は非常な自信を持つて打者に面し得るのである。

早慶の特徴

之を我國が六大學リーグに配して見るに、早大は由來成るべく球を待つて投手に一つでも多く投球せしめんとする策戦を取るが故に第一球は主に看過する癖を持つてゐる。之に反して慶應や明治には、よい球なら第一球から打まくらうとする打法が認められる。十三年秋に行はれたる慶明決勝戦に於て、第一打者大川は湯淺の第一直球を打つて右翼近くに猛烈なるフワウルを飛ばし、

續く土肥も桐原も永井も第一球にバットを振つてゐた。第二回戦に於ては湯淺が第一球を暴投したので流石に大川も手を出さなかつたが、第二球は抜からず打つてゐた。其他の打者も待つより打つ方で、決勝戦の九回に永井が三ボールを直線的に得た後第四球目はセオリーとして待つものであるが、彼は打つてヒットを飛ばしてゐた。

明大の打法

明大も打ちたがる方である。殊にピンチに入ると寧ろ盲目的に打ちまくらんと焦る傾向を認める。適例を云ふならば、一昨年秋の對早大戦に、九回で一對一の同點となり、明大が最後の攻撃に入つた時である。二出川先づ二壘打、梅田君内野安打、谷澤君四球、即ち無死満塁と云ふ緊張し切つた際次の大門君は遠く外角から流れ出たアウ・ドロの第一球を打つてフワウルを有田君に取られ、湯淺君もまた第一球の可なり近い悪球を打つてこれも有田君に取られた。續く林君は第一球は着過したが、近すぎる第二球を打つてフワウル、次の遠い第三球にも釣り込まれて振つたので、弱い當方をして有田君の前に轉々した、幸にも有田君がフワウルしたので、二出川君生還、遂に凱歌を挙げたものゝ、打氣の多いのには驚き入る位であつた。第一回慶應に捻られた時

も多くは永井君の悪球を振つてゐた「何でも登飛ばせ」と云ふ元氣も尊重すべきであるが、早大の如くデット待つのも又學ぶべき藝當である。リーグ戦の投手は、此點に留意してよいコントロールを利用したならば、必ずや好結果を掴み得る事と信ずる。

缺陷を突け

投手は大概打者のボックスに立つ位置、姿勢を觀、次にバットの持ち方、振り方などによりて、缺陷を發見し得るものである。次に列記するは、打者の缺陷に附け込んで投げ入るべき球の種類である。

- (一)、打者がプレートを離れ過ぎて立つ時は、肩の高さにて外角を覗ふか膝位の高さにて同様の球を通しさへすれば打つことはない。早大の竹内君、慶應の高木君などはこの種の打者に屬する。
- (二)、プレートにかぶさるやうになる打者は、一步プレートの方に踏み出して打たうとするのであるから、外角を通すと打たれる。出来る丈け近くて、肩位の高さの球がよい。さうすると打者の足許をグラつかせるから、假令打つても遠くへは飛ばない。

概して球を踏込んで打つ人に、外角の低い球は禁物で、内角に破れ込むカーヴに限る。この種

の打者に對しては左利投手が最も都合がよいもので、明大の健棒に對して、早大では谷口、慶應では永井が成功したのも、この理由に依るのである。明大では足を引いて打つ打者は林君位なもので、他は悉く踏み込んで打つてゐる。

(三)、打者が踏み込んで打たうと、足を引いて打たうと、大きな振方をする人ならば、出來得る限り低くて内角を通すのである。明大の大門君が十二年春不振であつたのは、この缺陷を觀破された爲めではあるまいか、熊谷君などにもこの短所は歴々として見る事が出来る。

(四)、バットを短く振つてチヨコ振りをする打者には油斷が出來ない。彼は驚くべき眼力と判斷力との持主なので、球を叮嚀に選んで、好きなのが來ると、欲する所へ打ち飛ばさんとする恐るべき種類の打者に屬するのである。

二様の凄い打者

サテこの種の打者に二通りある。若し彼がバットを地上と平行に押しつけるやうに振る所の所謂ブツシユ・ムーブメントをするならば、出來る丈け近い所を覗はねばならぬ。

又彼がブツシユをせずして、スウィングする性質を持つてゐるならば外角を通ずるものがよい

のである。彼は必ず球の下方を打つて、小さい飛球で打取られるであらう。

この種の打者が、打球前にバットを振つて見る時、豫め癖を看破する事が出来る、下から拗ひ上げて振る人は『スウィンガー』に屬し、主に肩の運動に依頼して、バットを平行に振つて止める人は、ブツシユする打者と見て大過ない。今の所立教の荒井君は前者、慶應の土肥君は後者に屬する。

(五)、右利打者にして右足を左足よりも後方に引いて構へる人は、スロー・ボールを左翼へ打ち易い人としてあるから、若し緩球を投げるならば、内角を通すのである。球は大概左翼フツウル線外に飛ばされるであらう。二ストライクスを得る迄にはよい試みである。

以上の投球は豫め信號によつて、味方全部に行渡るやうに努めなければならぬ。即ち捕手のサインを内野手の一人が傳播するか、又は投手がそのサインを繰かへして味方に知らせるかして今や爲されんとする打撃に備へると備へないとは、非常な相違を持來すものである。

緩球の効果

打者の十中の八九は、スロー・ボールに弱いものである。スロー・ボールを安打するのは、可な

りの名打者たるを要するが、恰恠にして速い打者になると、バントしてセーフになる場合が多い。投手は緩球を投ずると共に、直ぐバントの備へをしなければならぬ。現今の六大學リーグ戦に於て、最も多くこの種を用ひるのは明大の投手湯淺君で、最近の記録中、最も多く使つたのは、對早大戦で、百三十七の投球中實に二十一のスロー・ボールを投げ、唯井口に三壘打を一本飛ばされたのみであつた。かやうに多く投げられたスロー・ボールに對して唯一人もバントを試みやうとしなかつたのは不思議である。

併し湯淺君も大分研究された結果、この種の球は、今年秋期の駿稻戦が行はれた時可なり打たれた。スロー・ボールの投球モーションは、何處迄も直球やカーブの投げ方と同様でなければならぬ。それでないと豫め打者に用意されるから、却つて大破綻の基となり易い。これもいつかの早明戦に、竹内君がタツタ二個のスロー・ボールを投げ、それが悉く安打され、而も六回には林君の三壘打となつて敗因を爲したのは、全く投球モーションが、湯淺君の如く洗練されてゐなかつた爲めである。一高の東投手も可なりよい緩球を持つてゐる。立教の竹中君もチェンヂ・オブ・ベースには非常な力量を示したものであつた。

低い球は難物

大リーグの打者中、七割五分は低い球が不得意だと云つても差支はない。一流中の一流にして尙且つこの缺點があるのであるから、學生チームに於ては、殆んど全部、この種の球を打ちこなせないと云つても差支はない。だから若き投手の先づ學ぶべきは、低きボールのコントロールを得る事で、之に精通する時は、大概の打者を牛耳る事が出来る。打者の缺點と云ふのは、その打てざる點を指すのは云ふ迄もない事であるが、もう一つはどうしてもフライになつて、樂々と外野手の掌手に收められるポイントをも指して云ふ事を忘れてはならぬ。近頃は病後不振勝ちであるが、慶應の投手濱崎君は、外角から唸り込む低いイン・ドロップを有つてゐる。この武器が冴えるとなかく、打こなす人はない位立派なものである。嘗て大毎と共に滿洲へ遠征した時に、小野君以上の功績を收め、近くは先年來朝せるハンター軍の強打者連に一泡ふかせたのは、何れもこの武器の切味が冴えたからである。

五 投手の價値

一流の投手となる程面倒なものはない。彼は前述の投球術を一通り心得た上、更に優れたる内

野手でなければならぬ事を要求される。近頃の野球では、從來看過されてゐた打力、走塁の方面、換言すれば攻撃の方面にも無力であつてはならぬ様に説かれてゐる。即ち防禦の要石のみに甘んぜずして進んで、勝因を味方に與へねばならぬ程、甚だ多忙な地位になつて來た。されば苦利芬蘭アメリカンの大投手たるアデー・デヨツスは「試合に於ける投手の價値は八割」と壯語して、その放膽なる主張に人を驚かせた。投手として大なる責任を負はされる者は、其の位に思はねばやり切れぬかもしれない。若しデヨツスの云ふが如くんば他の選手は二割の役を勤めるに過ぎない事になるが、まさか夫れ程でもあるまい。試合に勝たうとするには尠なくとも攻撃が五割、守備が五割を分擔するので、投手が假りに二十七人の相手を悉く三振に終らせても、五割の價値以上には要求出来ぬ筈である。又斯の如き破天荒の記録を得ても、味方に得點がなければ、引分となるより外はないのであるから、現代の大投手小野三千麿君は、完全なる野球チームの力を分解して、打擊三割、投手三割、守備二割、走塁二割とされてゐるが蓋し此邊が當を得た見方であらう。

投手の守備力

又小野君は投手の要素を假りに十とすれば、(一)沈着二割五分、(二)頭腦二割五分、(三)コントロール二割五分、(四)カーヴ一割五分、(五)スピード一割であると同類された。氏が多年の経験から築き上げたこの説は誠に尊きものであつて、大に後進の二本とせねばならぬ所であるが、私は諸大家の説を参照して、これに守備力の幾分を加へ度いと思ふ。小野君は有名なる守備力に富んだ投手であるから、これを看過せられたであらうが、世に守備力の乏しい投手程、チームを危険の地位に置くものはない。巨人軍の名監督マグロー將軍は、昔オリオレス俱樂部の投手であつた丈に投球術に關する造詣は頗る深く、一昨秋の對ヤンキース世界選手權試合には、自分が一々投手へサインを與へて投球の種類を變化させた位の人である。此の人は口を極めて「投手が一度でもエラーをした爲めに、試合を失つた時は澤山ある、他の内野手が球の處理に腐心し、練習するやうに、投手も一生懸命に守備力を養はねばならぬ」と云つて若い投手に、バントの守備や、壘に對する豫備的行爲の練習をイヤと云ふ程させるさうである。

速球王の發憤

實際バントの守備と、壘をカバーする事とは投手にとつて頗る重大なものである。よく聞く話

名投手となるには

しであるが、速球王ジョンソンが始めて大リーグの仲間入りをしてデトロイトと戦つた時、流石の名打者連も彼の速球に腦まされて浮腰となつたのであるが、ゲームの半ば過ぎから急にバント攻めを開始されたので、接戦ながら惜しい敗け方をした。これに發憤したる彼は其後懸命にバントの守備を練習し、遂に今日の位置を築き上げたのであつた。一昨秋の早明第一回戦が九回同點となつて、明大が最後の攻撃をする時、無死にして二出川君が左翼安打に出で、松本君の油断に乗じて勇敢なる二盗に成功した後、次の打者梅田君は一壘へバントすると見せて三壘の方面へ輕打したので早大の投手竹内君は逆モーションに陥つて間に合はず井口三壘も走者に氣を取られ傍觀した爲め、之が内野安打となり續く谷澤君が四球を得たので、早大は無死満塁と云ふ最も烈しい危機に當面して立つたのである。若し梅田君のバントの處理が、甘く行つたならば二出川君の進塁は止むを得ぬ事としても、危機はこれ程ではなかつたかも知れない。結果は神ではない限り豫想は出来ないが無死満塁と、一死三壘に走者がある場合とは、其處にいくらかの徑庭がなければならぬ。

一壘のカバー

壘のカバーに關する重大なる適例も、丁度前記の場合に起つた。かくて早大は無死満塁の後、竹内投手の妙腕よく大門、湯淺の二強打者をフワウル飛球で打取り、流石のピンチもそれでは免が附くと思はれたのであるが、次に打つた林君の緩ゴロが轉々として、一壘を去る二間程の所に進むを、有田君が前進して一、二壘間の線上で捕へんとして一寸フワンブルし、更にまた攔まうとしたがそれも出来なかつた。三度目にシカと攔んだ時は、もう壘へ持つてかへる時機が去つてゐたので、其處へトツスするより外はなかつた。其の時不幸にして竹内投手は壘にゐなかつたので、折角トツスした球は人なき壘上を掠めて去り、林君がセーフとなると同時に、二出川君の生還が認められたので、この大事の一戦は遂に明大方の勝利となつたのである。此の刹那、トツスされた球が、果して走者よりも早かつたか、また竹内君が壘をカバーしても間に合はぬものであつたか、それは別問題で、兎に角投手が當然なすべき守備を忘れた事は、藪ふべからざる遺憾を残したものと云ひ得る。竹内君の如き大投手が此の如き守備を怠るとは誰れも思はないが、其處が去秋早大を災したる練習不足の缺陷で、負ける時と云ふものは、誠に是非もないものである。因に小野君はこの一壘をカバーする點に於て、實に巧妙なるプレイを三田稻門戦で見せた事があ

る。

本壘の守備

投手は一壘のカバーのみならず、走者ある時、外野へ球が飛んだ場合には、三壘若しくは本壘のバックをする事も忘れてはならぬ。先年米國のミカド野球團と共に來朝したる左投手のマツクと云ふ男は、綿密にこの動もすれば忘り勝の仕事を繰返して、流石本場仕込丈けある事を肯かせた事がある。本壘のバックに就いては近頃のリーグ戦では、投手が捕手を後援するよりも中間にあつて外野よりの球を取り、一壘から二壘へ走り抜ける走者を捉へんとする戦法が型の如く行はれてゐるが、之も一方法には相違ない、併し千遍一律では大事な好機を失ふ事もありはせぬか。現に昨秋慶應對一高の試合で、濱崎、高木の二走者が一、二壘に據る時、野阪君が左翼に安打するを、一高の河野君はよく止めて絶好の一バウンドを本壘に投げ二壘からホームに突入したる濱崎君を刺さんとしたのであつたが、東投手は途中で受け續ぎ、而もボロリと落して虻蜂取らずになつた事があつた。アノ際球を其儘にして置いたならば、濱崎君は綺麗に本壘で刺されたのに相違ないに、實に惜しい事をしたものである。

マ將軍の忠告

マグロー將軍はかう云つて若き投手に忠告してゐる。バントに對しては、直に突進して片手で球を取るが早いか、殆んど直覺的に一壘を見ずしても投げ得る丈けの練習を常に積んで置かねばならぬ。片手でよく球を處理し得る投手ならば、少しはカーヴが下手でも差支ない。一流の投手は同時に一流の野手である事を忘れてはならない。球を打者へ投げると共に、一步若しくは二歩前進せよ、完全と見える犠牲バントも、かくして無効に終らせる事が出来る。

投手の守備十則

汝の背後には八人の仲間がある事を忘れてはいけな、二十七人を三振に終らせるやうな野望は大禁物。

球が生きてゐる間はボンヤリするな。プレイの焦點となる所へ飛んで行つて、他の野手を後援しなければならぬ。

打者とプレイとに精神を集注せよ、コーチャーや見物人の騒ぐに耳を藉すな。選手の心を亂さんとするは眞のスポーツマン・シツプを知らざる者である、そんな者を眼中に置くな。

投手が活躍すべくブレイの焦點に捲き込まれた時は、本壘を守るは投手一人の任務なる事を忘るるな。

一壘寄りのゴロに對しては、出來得る限りの速度を以て、その壘をカバーすべくスタートせよ。
三壘寄りのゴロに對しては、前同様に該壘の空所を補充せよ。

快速力の走者に對しては、體を眞直に延ばして投げず、常にアンダーハンドを用ひよ。

ブレイに對して躊躇するな、投ぐべき時は速に投げねばならない（よく投手ゴロを取ると、走者を暫らく見てから一壘へ投げる人もあるがそれは不可である）

二壘に走者ある時、ブレイトから遠く一壘の方へ寄つて捕手の信號を見る人があるが、かゝる場合には、敵に悟られぬ信號を用ふれば可いではないか。六大學リーグにあつても一二の投手は依然この惡癖を脱しないのである。

投手が後方に向いて、高く手を挙げながら、「イ、カ」など云ふと、他の守備にある者はそれに答へて何とか返事をする習慣は、何時の頃から始まつたものか、東都の野球には古くから無かつた現象である。無論米國でも見た事はない。小野三千磨君は決してかゝる田舎風の事をしない

第一人者である。中等學校チームの投手では、殆んどこの氣合のやうな事をしない投手はない位であるが餘りよい習慣ではない。

投手と強打者

「投手は打てなくても可い」と云ふ風習は、一時米國でも是認されたものであるが、打てるならば、これに越した事はない、イヤ實際チームが勝つ爲めには、投手と雖も打てなくては困るのである。一昨秋行はれたる世界選手権試合に於ても、ヤ軍の投手、馴染のブッシュは強打して味方の勝因を作つてゐる。巨人軍の六萬五千弗投手ベントレーも、強打なるが故に尊重された一人である。我國の野球界では、妙に投手でよく打つ人を多く見受ける。古い所では守山。河野。櫻井。大井。小山。内村。蘆田の諸君、近くは渡邊。湯淺。谷口。新田。永井。小野。森。東の諸投手など何れも打者として優秀な位置を占むべき人々である。今夏鳴尾で行はれたる大阪朝日社主催の全國中等學校野球大會に参加した二十一年野球團の中でも強チームと目せられたるチームの投手高松の宮武。神港の町田。米子の三井。東山の森田などは、皆な驚くべき打力を見せた人である。

六 フリーク・デリバリー

名投手となるには

朝日新聞社發行の運動年鑑所載最新野球規則の中「投手に關する規則」を規定する條項の第四に「或る手段を以て球を汚損する事を許さず、又「シャイン・ボール」(球の一面を滑にする爲め摩擦して投ぐるもの)、「スピット・ボール」(球の一面に唾液を附して投ぐるもの)、「マッド・ボール」(球の一面に土を附して投ぐるもの)、「エメリー・ボール」(球の一面を金剛砂紙の類にてザラザラになして投ぐるもの)等の投球を禁ず」と云ふ一項がある。

これは直ぐ後の「備考」にも注意してある通り、投手が色々の工夫をして、球に人工的の變化を與へ、云はゞ眞の技倆に依るカーヴにあらすして、畸形的投法(フリース・デリバリー)を行はんとする者漸く多きを加へたので、その禁止を規定したものである。併しこのフリース・デリバリーと雖も、一朝一夕に出來上つたものではなく、球の廻轉に伴ふ空氣の壓力を應用して案出したものであるから、科學的の見地から云へば、その發明者は大に賞揚されて差支ない譯である。カーヴの原理は前に述べた如く「球は廻轉の方向へ曲折す」の一語を以て盡きてゐる。又力學上から見ても、これは不動の事實であるが「ナニ投けた球が途中で思ふ様に曲折するなんて事があるものか」と今でも地方へ行くと頭から否定する人があるさうである。本場の米國にあつても、

この種の論争に就いて面白いいくつかの挿語が残されてゐる。

マグローの實驗

今では紐育巨人軍の大監督として斯界に時めく「小ナポレオン」マグロー將軍が十五六歳の少年時代に、生家の近所にあるストラクストンの停車場で南京豆やポップコーンなどを賣つて貧しい家庭の手助けをしてゐた時分、偶々列車内の喫煙室で、多數の紳士がカーヴの眞偽に關して一大論争を初め、二派に分れて大なる賭が、成立したことがある。「アイベッチ・ユー」と二言目に云ふのが米人の常であるから、總ての論争が賭によりて決せられるやうに、今やカーヴの有無も、卓上にうづ高くなつた紙幣によつて最後の斷案を待たうとするのであつた。

此時選ばれたのが十五歳のマグロー將軍で、幸ひ車掌もその論争に加入した事とて、機關に故障が出來たと云つて汽車の出發を延期させ、降車した一同は近所の廣場へとやつて來た。乗客こそよい迷惑である。應て二十呎宛の間隔に三本の棒を一直線に立て、始め投けた球が第一、第二の棒の右側を通過し、最後の棒の所では、その左邊に飛んで行けば、球がカーヴした證據であると云ふ事になつて、マグローは第一棒の右、捕手は第三棒の左にあつて投球を開始した。マグロ

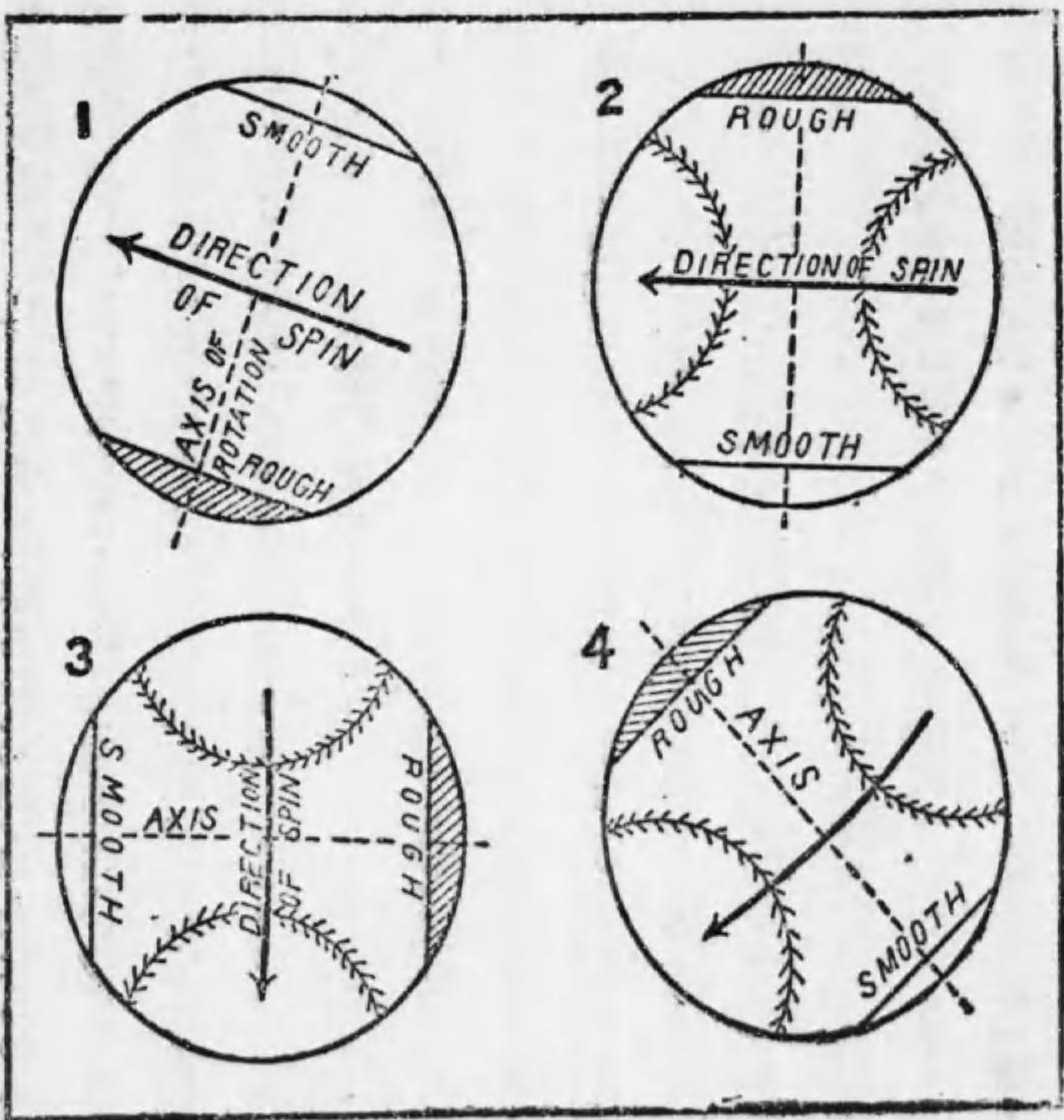
名投手となるには

少年は其頃盛んにカーヴを覚えて練習してゐた頃であるから、投げる球は悉くよい破れ方を見せて、此所にカーヴなるものゝ成立が明らかに立證されたので、勝つた方は歡呼を擧げて莫大の賭金を懐中にねじ込んだ、因にマグローは『よく投げて呉れた』と賞められて頭を撫でられた後たつた金一弗を報酬に貰つたさうである。

球面の粗滑と曲折

カーヴは如何なる種類のものでも前記の原理によつて解決されるがフリーク・デリバリーは全くこれと異り、球の廻轉よりも、球面の粗滑が非常な影響を與へるもので、従つて投法も普通の速球を投けると同様で、少しも捻りを與へる必要はないのである。従來の投手にありてはシャイン・ボールとエメリー・ボールとを一人で使用した人はなく、各自祕密にそれぞれ一つの祕訣を握つてゐたやうであるが、此所では説明上、球に粗滑両面があるものとして一舉兩得の説明をして見やう。

圖に示す點線は、球の廻轉する軸で、矢は廻轉の方向、軸と直角の天地にある半月形の部は、横線の方が粗、線のない方が滑かの部分である。而して第一圖の如く投げられた場合粗面は空氣



名投手となるには

の烈しき抵抗を受けて、速力も従つて鈍り、滑かな方面は之に反して激しい廻轉を促すと共に、球はその方向に破れ目を見出すのであるから、打者に取つては甚だ打ち悪い、イン・アップとなつて斜に飛上つて來るのである。而して第二圖は直線的のドロップ、第三圖はアウト・カーヴ、第四圖は稍や内側に曲折するドロップとなるのである。

巻添を食つた唾球

斯様にフリーク・デリバリーには人工的の細工が加はるのみならず、曲折の具合も頗る鋭く、且つ打者に可なり近づいてからブレイキが起るので、投手に取りてはこれ程結構なものはないと同時に、打者には非常に迷惑なものに相違ない。正に堂々と戦ふべき野球競技にあつて、此の如き人工的の細工は歓迎すべきものでないので、フリーク・デリバリーは可なり古くから禁止されてゐたのである。唯之れの巻添えしてスピット・ボール迄も禁止されたのは、これを得意とする投手にとつて甚だ氣の毒である。數年前の規則改正の際、當事者は流石此邊に氣が付いたものか、従來スピット・ボールを投げて、それを一の武器としてゐた者に限り、使用するも差支はないが、新に投げ出さんとする事は絶對的に禁止と云ふ條件をつけた。このスピット・ボールもフリーク・デリバリーのやうに不思議の廻轉、曲折をするもので、打者に取りては甚だ迷惑なものである。且つこの武器を有する投手は、常にスピット・ボールを出すやうな態度をして、時に異なつた球を出すのであるから、打者は精神的に眩惑される事が多いのである。これに就いて流石の大ワグナーも閉口したと云ふ物語がある。

ワグナーの缺點

「ワグナーに球を打たせないやうにするには、何所を覘つたらよいか」と或る若い投手が、元老の一人に聞いた時「四球より外はない」と答へた位、ワグナーと云ふ人には缺點がなかつたさうである。その大ワグナーが初めて巨人軍の新入投手バツグス・レイモンドに對した時、スツカリ彼のスピット・ボールに牛耳られて三振を重ね、遂にワグナーの缺點は、四球の外にスピット・ボールもあることが附加されたさうである。ワグナーは一九〇六年から四年間連続してナショナル・リーグ第一位の打者となつて、光榮ある斯界のレコードを造つた人であるから、レイモンドの球のみが打てなかつたと云ふのは全く最初の試合にヒドク牛耳られたと云ふ心理的缺陷も手傳つたのであらうが、また一方スピット・ボールの威力も認めねばならぬ。我國の野球界では、廢應の新田投手がその晩年に使つたが、新規則が出来ると共に潔よく廢止したので、今では一人のスピッターも我國には居ない事になつた。

禁止條件を犯すな

フリーク・デリバリーは斯様な利益があるので、勝利のみを得んと焦る投手は、審判や打者の目を盗んでは球に細工をしようとするので、米國のプロフェツショナルは、吾人の想像も附かぬ

方面に氣を配る。數年前市俄古白踏軍にシーコットと云ふ投手がゐて、既に一度使へなくなつて大リーグを退いたのであるが、其年に限つて花々しき返り咲を爲し、異例な好成績を挙げたので、テツキリ球に細工をするに相違ないと云ふ疑ひがかゝり、種々研究の結果、どうもシャイン・ボールを巧に使用したと云ふ説に一致したが、それでも證據を握つて、シーコットの首根ツコを掴む事は出来なかつた。更に説をなすものは「ナニあの球は市俄古の投手に古くから傳はるもので、ワルシユなども知らん顔して使つてゐたものだ」と物識り顔で濟まして云ふ人もあつたさうである。エメリー・ボールは近くデマリイが使つたと云ふ噂もあるが、これは重にその人の人格に關する事なので、深くは追求されず済んだやうである。

禁止條件の中にマッド・ボールと云ふのがある。これは新らしい球に土をつけるので、よく中學の野球戦で見受けるが、彼地では絶対に禁止されてゐる。我國でも行く行くは改正して貰ひ度いものである。早大の先輩淺沼君は非常にこの點が嚴格で嘗て早大の投手が新球に土をつけた時直にその球を取上げて、更に新球を投けたことがあるが、かくてこそ審判の威嚴が保たれるのだと、私は大に敬服した事がある。以上のフリース・デリバリーは悉く禁止條件であるから決して

使用してはいけない。唯科學的方面から見た投球術として多少興味があるので御紹介したのに過ぎない。

七 投手はチームの礎

「投手はチームのコイナー・ストーンである」と云ふ言葉は、現在の如き野球競技が繼續される限り、無限に承認されねばならぬ事實である。併し机上の空論では興味もなく權威もないから、暫らく従來の野球史に徴して、その實例を摘記して見やう。

一 高の覇業

先づ順序として日本の野球史に就いて見ると、早慶の勃興前迄、斯界の權威を握つてゐた、一高チームの開山とも云ふべきは、明治廿四年、投手青井鉞男君を中心として編成されたもので、青井君は常時傑出したる投手であつたのみならず、強打者でもあり、優れたセオリーにも通じた人であつた。其前には福島金馬と云ふ人が投手であつたが其頃はバットに「雖不當不遠」などと云ふ文字を彫み込んだ時代で、寧ろ我國野球界の戰國時代と云ふべく陳勝吳廣の士が多かつたやうに見受けられる。我が野球史に「一高時代」と云ふ一區劃を形成するに至つた覇業は、青井

投手の隻腕に負はねばならぬであらう。序ながら同君は極めて公平な人で、帝大生の審判と云へば、無我夢中に一高の最負するに限られた位であつたが此人にはその癖がなかつたのである、筆者が青山學校の投手として一高を二回連敗せしめた時の審判はこの青井君で、私共は一回も「アア不公平な事をするな」と云ふ感を持つた事がなかつた。殊に第二回の試合などは、一高にとりては復讐戦であるから、人情としても多少の不公平はある事と期待したのであつたが、それが皆無であつたので、その事あるを想像したる私共は恥かしくて耐らなかつた位である。

一道の暗影

青井時代には英和學校（青山學院の前身）や慶應義塾（その頃の選手には横濱市會議長平沼亮三、松山醫學博士、大毎主筆高石眞五郎などの人々があつた）白金の波羅大學（今の明治學院）其他横濱の外人チームと初めて國際競技をなして美事に打破るなど、二十四年から二十九年に渡る青井投手の活躍は實に素晴らしいものであつた。この青井君が三十年に卒業すると、今の地方局長潮惠之助君を中心としたる郁文館中學に破られ、三十二年は二高、更に青山學院に連敗の憂目を見るに及んで一高の覇權に一道の暗影を認めたのである。

守山君の發憤

青山の敗に發憤したのは故人となつた守山投手で、可なり猛烈な練習を積んだものである。今でも一高の練瓦塀には、守山君が一人で投球術を研究した球の跡が残つてゐるのは前述の通りである。彼は性來の負けず魂を發揮して、其後何處のチームにもヒケを取らない程充實したる一高チームを築き上げた。これは一高の中興的事業と云ふべきもので、青井、守山の兩投手の間に擴がつた裂溝に乗じたのが、郁文館二高。青山學院等であつたのである。

早慶並び立つ

越えて三十七年六月には、早慶が前後して一高を撃破した。其頃は守山投手が大學に進んで、黒田君が投手になつてゐた。この人の球は頗る素直で、大きなイン・ドロと、速力に富んだアウト・カーヴを出して敵を壓迫する守山君に比しては可なり差等があるやうに思はれた。捕手の小西君も、バツク・ストップの大役者としては寧ろ小柄の方で、すべてが一高が傳統的に見せて來た凄味に缺けてゐたやうである。一言にして言へば、早慶は最も一高城砦が手薄になつた頃、突如として早慶第一戦を行つて、先づ天下のフワンを驚喜させ、早大は更に野武士的の猪勇を頼み

として、先づ一高にぶつかり運よくも敵の首級を挙げたのである。若し此頃守山君がチームにゐたならば早慶に勝味は全然なかつたかも知れない。

内村投手の出現

一高の其後は依然として投手難を續けた。それでも早大には二回程接戦の後勝つた事もあるが、慶應の守りは嚴として犯し難きものがあつた。然るに一陽來復、大正七年の春、内村投手の出現によりて、一高は早大を七對零、慶應を四對零、共に零敗を喫せしめて、久方振りで覇權を恢復し、其他學習院、三高などを破つて全勝の光榮に輝いたのである。内村君は一見瘦せぎすの、大して大きく見えない人であるが、左腕に籠る怪力。夫によりて操出される鋭いイン・ドロは、本邦從來の投手としては谷口君が匹敵すると思はれる位で、現今の永井投手には同じ左利ながらまだその鋭味が不足してゐるやうに思はれる。勿論永井君は將來の人で、今後同君の發達は、確かに刮目して見るべきものがある。内村君去つて以來の一高は再びダーク・チェンヂの幕に閉された。最近出現した東投手の好投と雖、早慶の健棒を封ずるには、稍や微力の憾があつた。青井君に初まり、守山君によりて中興し、更に内村君を得て氣焰を挙げた一高の野球史を繰つて

見ると、投手の巧拙が、如何にチームの興廢に與つて力あるかを歴々として觀る事が出来る。

偉材蘆田投手

一高チームが生んだ名投手の中に蘆田君を見逃がす譯には行かない。この人は内村君の大業完成に對して正にバイオニヤの役目を勤めたる一高にとつては忘れ得ぬ人である。何となれば前記の如く早大は明治四十一年（バッテリー大井、山脇（早）戸田、田代（高）及び四十二年（大井、山脇（早）井上、風岡（高）の兩度に一高の破る所となつてゐるが慶應は引續き連勝をして居た所を、大正四年に至つて蘆田、平山のバッテリーで、この記録を見事に打破つたからである。即ち蘆田君は、早慶の手に斯界の覇權が移つて以來、如何にもがいても一高の斧鉞を入れることの出来ない三田の大森林に突入して、初めて丁々伐木の音を立て、向陵の嵐に見向きもしなかつた城南の喬木を、根底から引くりかへし得たる殊勳者であつたのである。

百花燎亂の三田

一方一高の野球チームに起つた榮枯盛衰のリズムを觀ると共に、之に對する早慶の陣形を檢覈するも頗る興味ある事である。一高が屢早大を屠つて溜飲を下けた頃の慶應を見るに三田はバッ

テリーの優越権を漸く認められんとする頃で、福田、小山兩大投手時代から、アチラの如き市俄古を向ふに廻はして、大童の戦を爲した菅瀬投手の時代を捲起さんとする醸造時代で、鬱勃たる發酵気分は何者をも微塵にせずんば止まざるの趣があつた。而も捕手としては時に福田君が立ち、其外肥後君あり三宅君あり、佐々木、高濱などの名手を雲の如く輩出して、早大の寂寥に引かへ、三田は百花燎亂、燦として研を競ふと云ふ有様であつた。

寂しい影

然るに蘆田君をして歴史の人たらしめた大正四年の三田軍を見るに、其時代は同チームが嘗て味はざる一大試練の日に會つた時で、業を卒へたる菅瀬君を送り二三有力なる選手の退部を見たので、流石難攻不落の堅城にも、何となく寂しい陰影が流れるやうになつた。一高に敗れたる松江、佐々兩君のバッテリーは一高に四點を與へたのみであつたから、決して不成績に終つたとは思へないが、これが石川、平井の二選手であつたならば、もつと少ない得點で喰止め、従つて三十七年以來連勝の夢は破られなかつた事と信じられる。

早慶沈淪の秋

更に内村投手の爲めに枕を並べて討取られた大正七年の早慶兩チームを見るに、早大は橋本、伊藤、澤などの投手團を擁し、殊に頼みとする新進の橋本君は、其年明大との決勝戦に敗北して、早大の野球部が嘗て味はざりし苦酸を嘗めてゐる。一高に對して七對零の敗は餘りに多きに過ぎたやうであるが、内村君の好投に對して太刀打ちをする投手力に負けてゐた事は、全軍の士氣をどれ丈け沈滞せしめたかは想像が出来る。一方慶應は森（秀）投手が極端に肩を痛めた頃で、全軍意氣銷沈。内村投手の爲め十有七の三振を取られた位であつた。投手の元氣とチームの勝敗とは、斯様に密接な關係を示してゐる。次回には華やかなりし早慶戦當時のピッチング・スタッフを批評して見やう。

不斷の論争

早慶何れが強き？この問題は早慶試合が盛んに行はれた當時に於て八釜しく論ぜられたものであるが、試合が中止せらるゝに及んで更に議論に花を咲かせた。と云ふ譯は、双方戦つてゐる時分は、勝敗が必ず成立し、各選手の對抗的活躍振りも實見し得たのであるから、批判も可なり具體的のものであつたが、中止となつてからは、唯第三者に對する成績を以て、評論の根據とする

名投手となるには

より外はなかつたので、唯さへ最負々々の感情を交へずば止まない兩者の優劣論は、いつ果てやうとも知れなかつた。それが尙今日に續いて上下されてゐる。

而して單に第三者に對する成績と云ふ點から云へば、早大は遺憾ながら、三田の敵ではなかつた。(近來は早大が盛返してゐるが)その理由は云ふ迄もなく、三田には名投手の連続的輩出があつたに拘らず、早大は引續き投手難を歎じた結果に外ならない。

櫻井對河野

早慶戦當時に於ける双方の投手は三田が櫻井、早大が河野の二氏で河野君に重くるしい一種ひねくれた球質があると同時に、櫻井君には輕快なベツグを利用する制球力があつて、兩々相下らざる力量を保持したので、試合も先は互格に進み、興味も盡きなかつた。然るに一時櫻井君がブレイトを湧川君に譲り、其の空虛を衝かれて三十七年度に於ける早大の全勝、引續いて第一回の渡米となつたのは、三田の策戦としては當を得たものでなかつたかも知れない。其證據には渡米前の試合に早大を破つたのは、櫻井君の投手、引續いて歸朝後、満都のフワンを狂喜せしめたのは、依然として同君と河野君との對抗が持續した爲めで、湧川君の出現は、慶應の爲めよい結果

を持來さなかつた。

三田の雙壁

河野君が卒業した後の投手は大井君で、アノ立派な體軀から唸りを生じて飛び出す球は、可なり効果のあるものであつたが、不幸にして記憶に残る敗北が二三残された。其中でも一高に對する敗戦の如きは忘るべからざるものである。之に反して三田の陣容を見るに、福田、小山の二大投手は、十分の若さと、鍛練の功を思ふ儘に積んで、慶應を泰山の安きに置いたのである。我國の野球界が初めて入場料を徴收した四十年の布哇聖路易軍來朝以後の早慶チームの成績を比較して見ると、名投手の有無が、どれ程試合の勝敗に深い深い關係を有するかを知る事が出来る。

聖路易の來襲

四十年十月下旬、布哇に於けるセミ・プロの一團は聖路易チームの名の下に來朝した。當時の野球界は早慶戦が中止されて、火の消えたやうな有様、唯一高が健氣にも覇權の恢復を企てる位の程度であつたから、この一團は非常な歓迎を以て迎へられた。ローン。ジョンズ。フェルナンデス。ブツシユネル。エンスイ(支那人)などは何れ劣らぬ大立物で、かなりの興奮を我國の

フワンに與へた。この強チームに對して三田は三敗二勝し青木、小山の兩投手は交々プレートに立つて快技を揮ひ、遊撃佐々木君も目覺しい活躍振を示したのである。之に反して早大は三戦三敗と云ふ不振の記録を残した。

投手難の早大軍

四十一年は早大が初めて一高に破られた時で、その年の秋九月に來朝したる華盛頓大學チームは、散々に早大を蹴散らして三勝一敗の記録を収めた。されど福田、小山の双璧を控へたる三田は、彼等を三戦三敗させて氣焰を擧げた。此中の第一回は小山君、第二回は福田君、第三回は村上君がプレートに立つてゐる。翌四十二年はそれ迄順調に進んだ巨漢大井投手の肩が滅却に近い打撃を蒙つた戸塚軍不吉の年である。されば九月のウイソコンシン大學來襲も、三田は三勝一敗、早大は二敗一勝に終つてゐる。かくて早大に對する投手難の聲は漸く喧しくなつたのである。

慶應の善戰

四十三年市俄古軍の來朝は投手難の早大を始んど骨破微塵に叩きつけた概がある。現今同チームの監督をしてゐる飛田君は當時の主將であつたが、歴代の主將中、この人程逆境に立つて苦勞

した選手は恐らく空前にして、また絶後かも知れない。慶應も市軍の鋭鋒には敵し難くして、何れも三戦三敗してゐるが同じ勝てぬにしても、慶應の負け方には骨があつた、時としては流石の強敵を土俵ぎは迄押しつめて、今一息と云ふ所で打棄られたやうな際どい、興奮の頂上に達した試合も見せて呉れた。得點から見ると早大は九對二、五對零、十五對四。三田は三對一、二對一（十回戦）五對二（同上）で早大が敵に多くの得點を與へ、三田が五點以上を取られなかつたのは、正しく防禦の中心たる投手に優れた力があつたと云ふ點に歸納するより外はない。早大は更に市軍と共に大阪へ行つて三敗を重ね、歸途三高にも敗れてゐる。

水際立つた投捕手

大正二年には三度外國チームの訪問を受けた。五月に來たのは全比律賓チームで、早、慶、明の三チームと戦ひ、早大に一度勝つたのみ他は全敗して歸つた。秋の九月には華盛頓が來て、慶應と二回程衝突し（一は没収試合、一は准試合）我が野球史始まつてからの珍記録を造つた。此時の三田は菅瀬、三宅二氏のバッテリーで、時に石川君もプレートに立つた。慶應が生んだバッテリーの中で、最も充實したものはあるまいか。記者は不幸在米中で福田、小山氏の投球振りに

名投手となるには

接しなかつたが、人々の評によれば菅瀬君は小野投手を除いては、三田で随一に推さるべき大投手で、殊にこの對華盛頓時代が最も油の乗りぬいた最中であつたと云はれてゐる。三宅君の捕手振りも忘れられぬ程美事なものであつた。此頃早大投手は加藤君で、スローボールの名人であつたが、速球の所持者湯淺君が時に緩球を投ずるのは頗る効果あるものであるが、緩球で終始しては、如何に名人でも遂には破綻を免れる譯には行かない。私共は常にハラハラして加藤君の投手振りを見るより外はなかつたのである。早大の投手難はかくして長いこと續いたのである。

チャードンの英姿

大正四年には市俄古軍再度の來襲があり、六呎五吋の巨人投手チャードンが思ふ儘に投球し、思ふ儘に日本の打者を翻弄して、またまた全勝して引上げた。從來外來チームに對して好成绩を擧げて來た慶應は此時既に巨人菅瀬投手を送り石川君の舞臺となつてゐた。石川君は野球界が生んだ有数の大投手で、その球勢は、決して菅瀬君に劣るものではなかつたが、不思議にも外人向きではなかつた。日本人の打者をこなすは却つて石川君の方が優れて見える點もあつたが外來チームに對すると、どうしても菅瀬君に數段の長所があつた。三田に選手として三宅、高濱、森、鍛

治、日下、富樫、平井、沼田などと云ふ顔觸れが揃つて、堅城鐵壁の如く見えた守備も、市軍の亂撃に逢つて、前年の如き鋒芒を現はし兼ねたのは何の爲めであるか、それは云ふ迄もなく石川君の球が外人向きでなかつたのに負ふ所が多い。而も市軍の力量は前回のものに比して見劣りがしてゐたと評された位である。これ等の消息を含味すると附掌一番する點を見出し得るに相違あるまい。

明大覇業の因

最近球界の覇權を握つた明大チームに就いて見るに、このチームが長い間の雌伏時代を経て漸く早慶の伍列に這入つたのは高瀬君を主將とする頃だと思ふが更に藤田投手の入部がどれ程力となつたか恐らく想像以外であらう。引續いて強投手渡邊大陸君の技倆が大成の域に進むに連れて、明大はもう押しも押されもせぬ早慶級の強チームであつて、覇權は眼前にぶらぶらして、之を掌握すると否とは、唯運の問題であつたのである。果然湯淺君の出現と共に十三年間の希望を遂げた。「名投手なくして強チームなし」法政の強かつたのも砂澤の時代、立教の擡頭は偏に竹中投手の辣腕に負ふ所が多いと云はねばならぬ。最近早大が大をなしたのは谷口、竹内、大橋の出

現、また大毎チームが十三年春東都五大學を雍斬りにしたのは小野投手の辣腕に負ふ所が多い。名投手のある所必ず勝運は附纏ふのである。

七 健棒よりも投手

米國に於ても投手の價値に關する各種の研究が統計的に行はれ、結局チームの力量を十とすればその四割に値すると云ふ事に議論は一致してゐるが、人によつてはそれ以上と觀てゐるやうである。一九〇五年以來二十年間に涉つて舉行されて來た世界選手權試合に就いて、米國野球記者協會の總理フレデリック・リーブ氏は「強打者揃ひのチームも投手が中以下では負ける、投手さへシツカリしてゐれば、打てないチームでも勝てるものである」と云つて、一々その實例を擧げ、蓋し投手の價値は、四割など限定的に決せらるべきものではなく、無論それ以上のものだとは結論してゐる。

打てなくて勝つたチーム

打撃の利かざるチームにして世界の選手權を得たる代表的のものは、一九〇六年に於ける市俄古白踏軍でその野球期に得たる彼等の打撃率は僅に二割二分八厘に過ぎなかつた。然るに彼はア



不老長世の大投手
サイ・ヤング

巨人軍を苦しめたるアムレチツクスの名投手
チャーラ・ペンダー

メリカン・リーグの優勝者となつたのみならず、猛將チャンスの率ゐる健棒と元氣で聞えたカツ
アスを破つて、ウオールド・シリーズの覇者となり得た原因は、何所に潜在したであらうか、云
ふ迄もなく、稀世の大投手エド・ワルシュを筆頭にドック・ホワイト、ニツク・アルトロツク。フ
ランク・オーエン。フランク・スミスなどの巨星が燦としてピッチング・スタツフに輝いてゐた事
を忘れてはならぬ。

大マチーの舞臺

一九〇五年の世界選手権試合は、毎度噂に上る巨人軍の大マチーが、最も油の乗り切つた頂上
とも云ふべき活躍振りを見せた時の舞臺であるが、敵の費府アスレチックスにも、ブランク。ベ
ンダーなどの名投手がゐたので、雙方大した打撃力を見せず、巨人軍は二割一分を得たるに反し、
費軍は一割六分二厘と云ふ、この種の試合に於ける最低記録を作らねばならなかつた。此時大マ
チーの残した記録は「六日間に三回の零敗」で、最近コベレスキー。ホイトなどが辛うじて接近
したが、未だこの尊き記録は何者も破る事が出来ない。彼は先づ第一回(月曜)にブランクを向ふ
に廻はして九對零、第二回(木曜)はベンダーに對して二對零、第三回(土曜)もベンダーと對峙し

て、同様のスコアで勝利を得、此間二十七インニングスを通じて、十五のヒットと一の四球を敵に與へたのみであつた。此の戦は四勝一敗で巨人軍が散々に費府を叩きつけ、五回を通じて十五の生還數を得、敵には唯の三點を與へたのみであつた。大マチーの三零敗以外の勝利は、鐵腕投手として有名なるマギニチーが、一對零でブランクを破つた。

名投手團の威力

カッブ。クローフオード。ロツスマンなどの強打者を有するデトロイトが、一九〇七、八の二年續いて市俄古カッブスの破る所となつたのは、後者の投手團を編成する三指投手ブラウン。オーバル。リユールバツク。ブイスターのクオーテットがデ軍の投手ドノバンやムーンを遙かに凌駕したからである。シリーズを終つて記録を綴つて見ると、クローフオードが二割三分八厘、カッブが二割、シエーフワーが一割六分六厘と云ふ情けない成績であつた。因にこの試合の第一回戦は、二十回で三對三の引分に終り、頼みとするデ軍のドノバン投手の肩は、これでスツカリ破壊されたのである。一九〇七年は四對零、翌年は四對一で共にデ軍は慘敗してゐる。

アダムスの殊勲

二回慘敗を續けたデトロイトは、一九〇九年に三度ア・リーグの覇者となつて、三度世界選手權試合の舞臺に立つた。當の敵はハンス・ワグナーがあるもので有名なるバイレイト軍である。デ軍は『今年こそ雪辱』の意氣鋭く、ア・リーグの名譽の爲めに、石に嚙り付いても勝たうと焦つた結果、四對三の際どい所迄行つたが、又々連敗して退かなければならなかつた。バイレイト軍戦勝の裏面には、年少ベープ・アダムスの花々しい活躍が、どれ丈け有力であつたかは、議論の餘地を存しない程明白である。其頃バイレイトにはウィツク・ウィルス。ハワード・カミツツ。ニツク・マドツク。レフチー・レイフィールドの四投手がゐるそれぞれの特徴を發揮し、この人々の努力によつてナ・リーグの優勝旗を得たのである。バイレイトの監督クラークは、何の見る所があつてか、對デ軍との大事の第一回戦に、この四天王をベンチに置いて、年少のベープ・アダムスをプレートに送つたのである。サーさうなるとフワンは承知しない、アダムスの肩馴らしを見ながら、種々雑多な罵聲をクラークに浴びせた。それもその筈、アダムスは年も若いし、その野球期には十二勝三敗で、成績こそ悪くないが、餘り多く陣頭に立つてゐないので、フワンは彼の隻腕にどれ程の怪技が籠つてゐるかを、監督クラークのやうに洞察する事は出来なかつたのであ

名投手となるには

る。

軍神の再来

此時デ軍は大切な劈頭戦とあつてアメリカン・リーグの第二位を勝ち得たる古強者ムリンをブレイトに立てた。若い、弱々しいアダムスが、どうしてこの大敵に對抗し得やうか、大鷲の前に慄える小雀のやうに、バ軍最負のフワンには見えたでしやう。然るに四對一で目出度く年少投手の勝利に歸するや、フワンは唯もう譯もなく喜んで、この小供を軍神の再来のやうに稱讃した。第二戦にもアダムスは敵投手サンマースを破り、結局戦は三勝三敗、愈よ決勝の第七回戦の關ヶ原となつた時、自信に充ち充ちたクラーク監督は、三度年少投手に重任を授けたのである。さうして結果は八對零の勝利！、古強者ドノバンが先づノック・アウトされ、ムリガンが代つても頽勢を救ふ途がなかつた。ブレイトは唯一人の年少アダムスの爲めに勝つたやうなものであつた。

猛烈な投手戦

一九一一年に舉行されたる巨人軍對費府アスレチックスの大試合には、稍や盛りは過ぎたれ

ど、大マチーは依然として巨人軍の重鎮として大をなし、新進のループ・マーカードが有力なる副將であつた（マギニチーは既に引退してゐた）費府の投手團は相變らずベンダー、ブランク・クームスなどの古顔がズラリと揃つてゐたので、この試合は徹頭徹尾、猛烈なる投手戦を以て終始される事と豫期されてゐた。第一回戦に於ける大マチー對ベンダーの試合は、果せる哉、非常な緊張味を見せたが、ベンダーに梢や強味があつて、巨人軍を三振に屠る事十有一、唯五個の安打を許したのみであつた。併し運命の神は名手コリンズに戯れて、肝腎な所で思はぬ失策が出来、二對一で先づ紐育軍に凱歌は揚つた。第二回戦はマーカード奮闘して、敵に四の安打を與へたのみであつたが、六回コリンズが壘にある時、ベーカーが右翼の柵外へ本壘打を飛ばして、三對一で一勝一敗となつた。ベーカーは其頃のベープ・ルースで、最後の試合をば再び本壘打を飛ばして巨人軍の止めを刺した男である『ホームラン・ベーカー』の名は、この後一層やかましく喧傳された。此時ベンダーは三回戦つて、敵に十六の安打を與へたのみ、前年マチーの残した十五の安打にもう一つで追つく所であつた。

二つの不思議

名投手となるには

世界選手権試合に就いて不思議が二つある。一は強打者の比較的打てなくなるのと、他は守備が引緊つて失策が尠なくなる事で、巨人軍の主將で『神經家のデーブ』と呼ばれるバンクラフトでさへも、一九二二、二の兩年ヤンキースと戦つて、六十一回球を取扱つた中、たゞ二の失策を残した位である。併し珍らしくも失策の爲めに失はれた試合がたつた一つある。それは一九二二年の巨人軍對ボストンの一戦で、これは明らかに巨人軍の勝利に歸すべきものであるのに、フトした失策で敗れた。所謂試合に勝つて、勝負に負けたと云ふべきもので、巨人軍の外野手スナツドグラスが一つボロリと落したフライの價值が、何千弗に價したと今尙話題に残つてゐるのがそれである。二壘のフレツチャイも第二回戦に失策して、勝つべきを六對六の引分にした。

ウツドの奮闘

この試合でボストンの得たランは二十五、安打率二割二分。巨人軍は三十一のランと、二割七分の打撃率を得てゐる。さうして三勝一敗の順潮で進んだ試合が、中途から引くり返つたのであるから、流石のマグロー將軍も寢覺めが悪かつた事であらう。併し一方ボストンの投手ジョー・ウツドの功績も認めねばならぬ。彼は「スモーキー・ジョー」と呼ばれたる速球投手で、後に問

題を惹起したるエメリー・ボールを使用したなど噂される程不思議なカーヴの持主であつた。更にボストンにはヒュー・ベディエンと云ふ年少の名投手がゐた事を見逃してはならぬ。彼は五回戦に二對一で大マチーを破り、決勝戦には八回迄善戦しヘンリックセンの二壘打後ウツドにプレイトを譲つたとは云へ、尠なくとも功績の半ばを分與せらるべき活躍をしたのである。

黄昏鳥雀悲しむ

一九一三年の巨人軍對費府戦は十一年度に行はれた試合を同じ様に繰返したと云ふべきもので、ペンダー。ブランクの活躍が、流石の大マチーを回ませたのである。此試合に記憶すべきは、現在ヤンキースの大立物として謳歌されるジョー・ウツド(先年ハンター軍と共に來朝せる投手)が、未だ二十歳の弱冠にしてマチー門下の俊才テスローを八對二で大敗せしめたる一事で、其頃ウツドの投げる球勢は、目にもとまらぬと云ふので『鐵砲玉のジョー』と云ふ綽名を附けられるに至つた位である。彼が得意とするフック・ボール(人指指と中指との間に球を挟んで投げるカーヴ)は、流石の巨人軍に五個の安打を與へたのみであつた。巨人軍は大マチーいよいよ引退の意志固く、また之に代るべき巨頭も出現せず、黄昏鳥雀悲しむの趣きが見えて衰れであつた。

ア軍の盛衰

費府アスレチックスが斯様に闘志満幅の巨人軍を一九一一、二年の二大試合に打破つて、アメリカン・リーグのために大氣焰を擧げたのは、全くベンダー。ブランド。クームスなどの名投手を揃へてゐたからである。見よ、其後同軍の監督コニー・マックが經費多端のためにこれ等の明星を退部させて、新に大學出の新進で固めた所、忽ちにしてアスレチックスは競争場裡から驅逐せられ、長く世界選手権試合の舞臺に現はれざるのみか、所謂テールエンド・チームとして毎年尻から數へる方が早い程、劣等な成績を續けてゐたが、昨年よりまた元氣を恢復し、今年には華軍と第一位を争ふやうな好成績を擧げた。これは監督マックが珍らしくも大金を出して買った投手グローブ及び年少グレイ、クインなどの投球宜しきを得、有名なるカーヴ投手コンメルに肩に好調が訪づれたからである。

ボストン軍の勃興

一九一〇年から十三年にかけての四年間に、三度世界の選手権を掌握した費府アスレチックスは、續く十四年にボストンと對峙して四度この大舞臺に立つことになつた。併し十年以來活躍し

たるア軍の投手團には漸く疲勞の色が見え、頼みとするチーフ・ベンダーは第一戦に於て敵の主要投手ルドルフの爲めに、七對一と云ふ慘敗を喫せしめられ、ブランドの老練もベノック。ジョーキーの元氣も敵の人気者ビル・ジエムスの怪腕に狩り立てられて四戦四敗の直線的敗北に終つたのである。此時例の鐵砲玉のブッシュは第三回戦に出陣して十二回も奮闘し稀なる白熱戦を見せてフワンを唸らせた。

この試合を評する人々は「ア軍の投手團は決して弱くはなかつた。唯ボストンの方がより以上のものであつた」と云つてゐる。この大敗以後費府アスレチックスは、ベンダーやブランドを追ひ、他の高價なる選手を退部させて、全部を大學生の選手に改造して見たのであるが、其後今日に至る迄十年の歳月を経て漸く努力は報いられんとしてゐる。選手の養成もなかく、難しいものと見える。一方ベノック。ブッシュの二投手は其後時めくチャンキー軍の有力な投手團を形成し、一九二一年から三年にかけての世界選手権試合に大童の活躍を見せたのである。一方ベンダー。ブランドを中心とする優秀なる投手團を持つて起つた費府軍は、それ等巨星の凋落と共に再起の望は全然彼方へ去り、マックは徐ろに時機の至るを待つより外はなかつた。

名投手となるには

投手としてのルース

本壘打王のベープ・ルースが投手として活躍した舞臺は、一九一五、一六の二個年引續いてボストン赤踏軍が、費府ナショナルとブルクリンとを破つて世界選手権を得た頃で、我儘者の潜航艇投手として有名であるカール・メイス投手も、其頃鋭いアンダー・スローの猛威を振つてゐたのである。この年の試合は、シヨアが費府の大立物アレキサンダーの爲め第一戦を失つた後、次の四ゲームは連続的に赤踏の勝利に歸し、二對一のスコアが不思議にも三回續き最後は五對四のこれも一點違ひで戦は決せられた位に、猛烈なる投手戦が行はれ、而してその優秀なる方に軍扇が揚つたのである。

十六年の第二回戦はルースが十四回の奮戦を續け、二對一でシエリー・スミスを破つてゐる。ヤンキー軍の投手團が、一九二二年の世界選手権試合に於て巨人軍の爲めに粉碎された時「我をして再びプレートに立たしめよ」とルースが叫んださうであるが、彼は今尚投手として相應の自信を持つ程十五、六年頃は花々しい投手生活を送つてゐたのである。

フエーバーの獨舞臺

巨人軍が市俄古白踏軍に破れたる一九一七年の選手権試合には、珍らしくも巨人軍に守備上の失策が多く、殊に最後の試合には、ロバートソンが樂な飛球を落したり、ヂママンがコリンスを三本壘間に挟んで、本壘で生かすなど大へまを見せた爲め巨人軍は四對二の敗北に終つたのであるが、試合が終りを告げてから、種々の記録を取纏めた結果、白踏軍の勝利は投手レッド・フエーバーの雙腕に負ふ所が多いと云ふ事實が認められたさうである。

花々しい投手戦

一九一八年に行はれたボストン赤踏軍對市俄古カツプスの選手権試合は、最も優れた守備力を示したものであると同時に、徹頭徹尾投手戦で終つたものである。即ち同試合は四對二で赤踏軍が勝ち、都合六回試合をした中、僅に六個の失策が計上され、就中赤踏軍には唯一のエラーが残されたのみであつた。而して投手戦の如何に激しかつたかは、記録が明白に物語つてゐる。本壘打王ルースは先陣を承はつて一對零で敵の大立物ヴワウンを破つた後、カツプスのテイラーは鐵砲玉のブッシュを三對一で復讐し、第三戦はメイスとヴワウンの顔が合つて二對一で前者が勝つた。次の試合にはルースとブッシュが協力してテイラーを四回戦で叩き付けたが（スコアは三

名投手となるには

對二(この時ルースは八回で亂打を蒙りブッシュに代るべく餘儀無くされた。それ迄には連続二十九インニングスの間、敵に一點をも與へぬと云ふ記録を作つて大マチャーの記録をインニングス丈け破つてゐたのである。

コベレスキーの快勝

チャクソン、ウィーバーなど野球道破壊者を出して未曾有の大疑獄を起したる一九一九年の試合は問題外として、二十年のクリーブランド對ブルクリンの選手権試合が前者の勝利に歸したるは、全く偉大なる投手コベレスキーがゐるた爲めで、彼は三回連勝して一九〇五年に大マチャーが残したる記録に追及し、此間敵に與へた安打僅に十五、四球は唯の二回(大マチャーは一回)で氣を吐いた。

投手の一騎打

一九二一年から二三年の大試合にかけては、ヤンキー對巨人軍が三年引續いて覇權を争つたので、讀者の腦裡にはまだ生々しい記憶が蘇へる事であらう。此時代は所謂ホームラン・エラに屬するもので、前年投手として活躍したるベープ・ルースは、何時しか本壘打王の呼聲に包まれ、

フワンは夢中になつて、彼が何本のホームランを飛ばすかを凝視するに至つた。併し依然として投手の競合が繼續してゐたのは否定することが出来ぬ。花々しい猛打亂撃の裡に、脈々として昔から流れる所のものは、投手の一騎打で、その優劣によつて、試合は間違なしに勝敗の分岐を形成するのであつた。

ホイトの記録破り

一九二一年の第一戦は、ヤ軍のメイスが三對零で先づ巨人軍を破り、次いで年少のホイトも同じスコアでヤ軍に第二勝を與へた。この連敗に發憤したる巨人軍は、第三戦にシヨーカーを打つて打つて打ち捲り、十三對五と云ふ大勝を得るに及んで戦勝の潮流は幾分巨人軍へ進路を取るやうになつた。第四戦にはダグラスが四對二でメイスを破り、試合が二對二のタイとなつて愈よ緊張した後を受けたのがホイトとネーフの對戦で、茲に猛烈なる投手戦が開始され結局三對一でホイトの勝に歸した。其後シヨーカー。メイス共に敗れ、ホイトも最後の戦ベツケンボアの失策で一對零の接戦の敗後者となつたのであるが、彼は「學生投手」と云はるゝ程年少の身を持ちながら、この大試合に三回完全なる投球を爲し、此間十四の安打を與へたのみで、大マチャー及びコ

ベレスキーの記録を破り、更に三回連続戦に一のアーンド・ランをも敵に與へざる點に於いて、マチーの記録に同ずるの光榮を得た。此試合に於けるショーカーの弱味は、ヤ軍に取て非常な打撃であつた。この一事は、世界選手権試合に勝つには、三人の強い投手が、重要な要素である事を最も雄辯に語るものであつた。

ハツギンスの苦心

一九二二年の大敗北にスツカリ覺醒したるヤ軍が、二三年の勝利を得る迄の苦心は非常なもので、先づ左利の名投手ベノックをボストンから迎へ、我儘者のメイスを退けて、ブツシユ。ホイト。ジョンズ。時に多少の進境を示したるショーカーを以て鞏固なる投手團を作り、樂にベナントを得て悠悠敵の來襲を待つ態度に反し、敵の巨人軍は惡闘を續けて、漸く所屬リーグの優勝權を得、愈よ選手権試合の舞臺に上つた時は、將卒悉く困憊の極に達し、六萬五千弗の猛投手ベントレーを初めとし、ライアン。マツキートン。前年の殊勳者ネーフ。スカットの徒に至る迄、何となく頼み少いやうな暗影が附纏つてゐた。外野の利け者であるカニングハムが、大試合後故郷の加州に歸つて、選手権試合の敗因を聞かれた時「ナニ巨人軍が敗けたのではなくて、投手がや

られたのだ」と云つたさうであるが、この一語は單に此秋に於ける巨人軍の敗因を物語るのみならず一九〇五年以來繼續し來れる世界選手権試合の勝敗の分岐を解決する名言であらねばならぬ。

八 投手の不老長生法

球界の歴山大王として一九一一年の昔から今日に至る迄、驍名を謳歌される市俄古カップスの投手クロバー・アレキサンダーは、今年の一月二十六日を以て三十七回の誕生日を迎へた老投手である。今回アメリカン・リーグから「最も所屬チームに功勞ある人」として表彰されたる老投手ウォルター・ジョソソンと雖も、大王に比すれば九箇月の弱冠、末路の來るを豫期し得ざる萬年強打者トリス・スピーカーは三十六歳、前額甚だしく禿して、得意の健脚に幾分ゆるみを見せてたと傳へられる虎軍の猛監督タイ・カッブさへも、歴山に比すれば二箇月後に孤々の聲を擧げてゐる。されば大王は古強者中の古強者で、而も老來益元氣旺盛、今年野球期の初めには、出場數十回の中、唯一度強敵シンシナタに破られたのみ彼は四十迄この状態を續けると力んでゐるが、果してこれが實現されるや否は米國球界にとりて興味深い懸案の一つとなつてゐる。この人、今

や不老長生の投球術を説く、彼にして初めてこれを云ふべく、彼の言葉にして初めて聞くべき價値がある。

投球術の箴言

「樂に投げよ」私の今日あるは、半ばこの爲めである。投球の秘訣は有効に投球するにある、肩や腕を無理に使ふな。

投球の一つ一つが、その人の最後のものになる事もある。

投手に取りて重大な四つのもとは内角の上下、外角の上下に間違ひなく投入れる制球力。

大リーグに参加した時は夢中であつた、球の速力が衰へると頭腦を使ふやうになる。

打撃戦程投手を苦ませるものはない。

投手戦程他から見て苦しいやうで投手にとつて愉快なものはない。

若かへりの鍵？

當年三十七歳と九箇月の私が市俄古カッブス所屬の一投手として相當の成績を擧げてゐるのは、球界の謎のやうに思はれ、各方面から不老の秘訣やら、若返りの鍵やらが要求される、尤も

千萬な話だ。これは明らさまに云ふて秘訣も何もあつたものではない、方法は唯一路坦々、聞いて見れば頗る平坦なので却つて呆れ返る人もあらう。併し眞理は往々にして單純の間に介在する、見方によつては瞿粟の中にも須彌山がある道理、マア落着いて聞いて呉れ給へ。

二の秘訣

「無理な投げ方をしないで、樂に投球せよ」私が今日迄續けて來た秘法の大半は、この一語に盡きてゐる而してその後半とも云ふべきものは「勝敗の爲めに心を動搖させない」事でこの二つが完全に履行されるならば、四十歳迄投手の生命は請合つて續續されるものである。

樂に投球せよ、と註文を平たく云ふと、有効なる投球で、肩や腕を無理使ひしないで、素直に敵の不得意な點へ投げ込んで行く事である。多くの投手の間には、見てゐてさへも汗が出るやうな一生懸命の投げ方をする人がある。私はかう云ふ人の投球を見るよりは、自分でプレートに立つ方が餘程樂だと思ふ。これに就いて私の弟が苦い經驗を得た事をお話しやう。

高價なる犠牲

私の末弟は可なり有望な投手で、テキサス・リーグの一選手を勤める事となつて私と別れる時、

私は吳々も勢に乗じて無理な投球をせぬ様に忠告した、所が任地に着いてから二日目、彼は聖路易ブラウンとの試合に出場して、十四回悪闘の末、三對二の大接戦で勝利を得たのは結構であつたが名に負ふ大リーガーの面々を小氣味よく料理したので、彼は不識の間に、球を投げ過ぎて了つた。私の忠告に氣が付いた時分にはもう後の祭りで彼の頼みとする肩は再び役に立たないものとなつてゐた。思へば高價なる犠牲である、唯一回丈リーガーを破つたと言ふ名譽、夫が人生の永い旅に取つて何の役に立つたかと思ふと、可哀想でならなかつた。多くの野球家の間には私の弟の如き果敢ない末路に陥つた人が定めし澤山ある事であらう。

我國投手界にあつては最近の小野投手は著しく「樂に投げる」と云ふ傾向が見えて來た、明大の湯淺君にもその影が幾分閃いてゐる。早大の大橋君、慶の濱崎君などは、力一杯に投げてゐるので、何となく餘韻に乏しい所がある、今年甲子園で優勝した高松の投手宮武君の投げ方は、一種のユトリを見せたものである。

誤解された歯科醫

カーヴが肩や腕を害ふ事に就てはよく議論されるが、私としてはさのみ毒になるとは思へな

い。寧ろカーヴが害になるのではなくて、特殊の異つた投げ方をするのが宜しくないと云ひ度い。其の證據には、私は他の投手よりも可なり多くのカーヴを投げ、またそれに信賴してゐる。尤も私の筋肉は多少他の人々よりも強いのかも知れない。不斷の練磨によつて肩や腕の筋肉が異常の強さを増すのは投手許りでなく、日本の齒醫者が器械を用ひずして、手先で患者の齒を引抜くのを見ても判る（こんな齒醫者は日本に一人もゐない、彼は恐らく長井兵助の居合抜きが縁日で齒を抜くのも見たものであらう）兎に角私の商賣は投手だ、投手がカーヴを投げると、肩を害するやうでは、商賣を完全にする事が出來ぬ譯ではないか。

私の自慢話

これから少し自慢を云はして頂かう、私の大リーグ生活十四年の間、三年間引續いて、一シーズンに三十回以上の勝利を得た事である。私の記憶する所によれば、此の如き成績は、二大リーグの中、マシューソンによりてのみ得られたもので、他に匹敵する人を見出さない、昨年（一九一一年）の記録を見ても、二大リーグの中、誰一人として三十回以上の勝利を得た者は見當らない。夫は一九一一年に私が初めて費府ナショナルの投手になつてから、四つの野球期を過した一九一五年からの

出来事で、この誇りとする記録を成し遂げた後、私は市俄古カッブスの所望に應じて移り、今度同チームの厄介になつてゐる。

此記録を破るは誰れ？

もう一つの自慢は、私が一シーズンに十六の零敗試合を勝ち得たことである。これは確か一九一六年の出来事で、勝利の總数は三十三回であつた。殆んどこの半分は零敗に終らしたのである、尙詳しく云へば前記三年間の裡に三十七回の零敗試合を得其中前記の十六回が私の最上記録で他は十二回と九回とに分れた。今時の若い投手にこの記録が破り得るかどうか、私自身としては尊い記録で永久に破られ度くないのであるが、野球術の發達から見ても早くこれを打ち破る巨人の出るのを望んで止まない。

投球術の變遷

私が費府ナショナルに加入した頃と今日とは、投球術も非常な變化をしてゐる。其頃打者を苦しめる道はカーヴか速球かの二つしきやなかつたのであるが、近頃は妙なくとも四種の覗ひ所を間違ひなく衝かねばならぬ。それは内角の上下と外角の上下とであつて、この四箇所に百發百

中、投げ込み得るものでなければ、一流の投手たる事は難しい。されば今では本壘の真中を通すのは最も危険な事とせられ、一ストライク三ボールのやうな大切な場合にも、よく／＼打者を見くびつた時でなければ、真中のストライクは投げぬ事にしてある。試みに本壘の所へ帽子を置いて、投手板の上から其中へ投げ込むのは、十の中八つは缺かさなないが、前記の四箇所へ、速球、カーヴ、緩球の別なく、間違なく投げる仕事はなか／＼樂ではない。併し現代一流の投手と云はれる人々は、悉くこの難しい試合に及第してゐる手合許りである。

大リーガーも人間

私が初めて大リーグに招聘されたのは、一九一一年であるが、投球に就いては自信も何もあつたものではなく私のやうなものでも役に立つものかと疑つた位であつた。所が先づ華盛頓との試合に二インニング程出されて投げて見ると、鬼神の様に恐ろしい人々が、不思議にも私の球が打てない『彼等はやはり人間だ』私は初めて自信らしいものを得て、其後當時の世界選手権の所有者費府アスレチックスと番外試合の時、五回程投球したが、其時も一人の生還さへ許さなかつた。併し何と云つても本當の試合ではない、云はゞ餘興的のものであるので、未だ十分私と云ふもの

を私自身が認める譯には行かなかつた。私が本當に力の這入つた試合に出されたのは、ボストン・ブレイブスとの戦で、九回二對一で私共に分があつたものを、フトした失策から對にされ、十回また味方のエラーの爲め敗北に終つた。されど初めての出陣、完全に一試合を仕遂げた愉快は、何とも云へない位で「俺も相當にやれる哩」と云ふ信念は、此時初めて私の腦裡に刻まれたのであつた。其後五六回の試合を直線的に勝ち得たと記憶してゐる。

愉快な投手戦

私の經驗上最も投手の心を痛ましめるものは、雙方共に打捲くつて打撃戦が開始される時である。球がよく打たれるので、投手として全く自信を失ひ、野手もまた取扱ふ手數が多いので、勢ひ失策も多くなり生還數も殖へるやうになる。かうなつては全くの亂調子でフワンはいゝ氣になつて喜ぶが投手に取りては焦熱地獄の裡に這入つたよりも苦しい、之に反して一對零の如き、スコーアの小さい時の緊張加減は何とも云へない。投手戦は苦しいやうで少しも本人に取りて苦しくないものである。

投手の今昔

昔のフワンが寄るとさはると「どうも今の投手は弱い、昔の投手は毎日でも續いて投げたものだ」と云ふが、私は一向さうした話に興味を惹かない。何となれば今でも状態が昔のやうであるならば、一年間五十回や六十回の試合をしても驚かない人が可なり多いからである。かく云ふ私の如きは、大學チームの相手なら二十回位は毎日投球しても平氣なつもりである。私が若い血氣の頃、ネブラスカで七月四日の獨立祭に大切な試合を投球した時は、その月の一日から引續いてプレートに立ち、その日は四日目であつたにも拘はらず非常な好成績で終始する事が出来た。唯現今の野球俱樂部には澤山の投手があるから、昔のやうに一人で澤山の試合をしないで済むに過ぎないので、決して投手が弱くなつたとは思へない。

奇しき投球心理

若い投手は、打者に關する智識をコーチから受け入れ、それを頭の中に記憶する丈けでも相當の努力を要するものである。

併し實際の事を云ふと、強打者は初めの中こそ馬鹿にし得るものであるが、結局は打たれてヒドイ目に逢ふものである。

私の知つてゐる投手に、ヂム・ヴワウンと云ふ頗る自信の深い投手があつた。此人は自信も深いかはりに一種異つた自負心があつたので、打者の得意とする所に懸と投げ込んでさうして三振を取るのが、何より面白いと云つてそれを實行してゐた。打者の不得手の所のみを覘つて打たれることもあれば、得意の所へのみ投げ込むと見せて、裏を搔くのも一法で、其所が投球心理の面白い所である。併しヴワウンの例は、餘り若い投手には眞似をさせ度くない。

三振を焦るな

野手のエラー程投手の氣を腐らせるものはない。併し投手は自分に完全無缺の投球の出来ない限り、野手の失策を責める権利は全くないのである。失策の起る度毎に、私はそれがゲームの一部であると諦める、又強打者が出て安打を飛ばした時は「誠に止むを得ない事だ」と思ふて別に大なる悲觀もしない。それを一々氣にしてはたまつたものではない。投手の不老長生法は、必ずしも肩や腕の力を續かせるのみではなく、かうした精神上の悟道に入る事が非常に必要なのである。

私に特にストラック・アウトを取らうとして腐心しない。だから一つの試合に十二の三振を取

つたのが、私の最高記録である。勿論危機に臨んでは、全力を舉げて敵を三振に屠らんとするは、投手としては正に爲さねばならぬ努力であるが、他の場合にありては、安打さへ打たせねば投手の役は盡きてゐる譯だ。多くの投手は速い直球を生命として、それに十分のコントロールをつける。至極尤もな事で、一番効果ある方法に相違ない。併し私のカーブは他の人が直球に於けると同様自信があるので、私の投球には、他の投手に比してカーブの数が多し。スロー・ボールを時に出す事は非常に効果がある。何となれば速球に對する時、打者は唯力強くバットを當てれば、球は自分の反撥力で自然に遠くへ至らねばならぬものであるが、緩球は、球その物に力がないから、打者は力を籠めてバットを振らねばならない。其所に前者よりも遠くへ球を飛ばすに難澁なる原因が潜むと同時に、確實に當てるポシビリチーも薄らぐのである。

ボールが場外にフワウルして新球が手に入る時大概の投手は餘りよい顔をしない。されば成るべく使ひ馴れた球を要求し、止むを得ないで新球を手にした時、懸と地上を轉がして見たりする。新球を厭ふ理由は、球が打者に見易い事、遠くへ飛ぶ彈力に富む事の外、投手としてはカーブを出し難いなどの理由に歸因するが、それが氣になるやうな投手では未だ堂に入らぬものである。

元來カーブは直球と殆んど同速力で打者に近づくから効果があるので、速力が違つては、直ぐ視はれる危険が伴ふものである。球が古くなると、カーブの破れ方は大きくなるが、鋭さ、速さなどに缺けて来る。新球にはその反對に大きな曲折は望めないが、後者の利益があるから、私は新球を手にしても少しも困らない。又困らぬやうに平生から練習して置くのが必要である。また投手の常に頭に入れて置かねばならぬのは、試合の日にどんな風が吹いてゐるか云ふ事で、若し風が自分の後方から吹くならば、直球に利があり、面前から吹くならば、カーブを出すに便利である。これ等の風向きによりて、投球の種類を定めるのが頗る必要である。

二様の打法

昔の野球にありては、打者が、三ボールス、ノーストライクの場合にはセオリーとして後に來る球を待つのもあるが、近頃は必ずしも此戦法によらずして、前記の場合などにも、打ち氣に出て、守備側を思はぬ混亂に陥らせる場合も尠なくない。されば投手の方でもこの際ウツカリ打ちよゝストライクなどを投けると、飛んだ目に逢つて、取かへしのつかぬ破目に陥る事がないでもない。昔の投手ならば、二ボールス・ノーストライクの頃から、もうカウントの均整を考へねばなら

らなかつたものであるが、近頃では一球をも忽がせには出來ない。油斷に乗ずる戦法としては尤も千萬なやり方である。

投手と天候

投手と天候、これも面倒な問題である。私としては天氣が「暖かいな」と思はれる日で、餘り暑くない時を理想とするが、長い間投手生活をしてゐると、天候はどうしても自分の力で動かし難いものであるから、結局自分其ものをどんな日に逢つても、平氣で投球し得る状態にして置かねばならぬ事に氣が附いて来る。私の現状は、寒くて球を握る指先に感覺を失はんとする時でも、スタンドのフワンが、日かけの所にのみ固まつて、而も麥藁帽子を脱いで扇子の代りに使ふやうな暑い日でも少しも困つた所なく投球し得るに適してゐる。かうならなくては投手としての役は、完全に勤まるものではない。

思ふ様にならぬ審判

天候と共に投手の思ふ通りにならぬものは審判である。投手がいくらストライクだと思つたものでも、審判の見方が、ボールならば、どうとも仕方がない。この意味に於て、天候よりは打ち

勝ち難いものであるかも知れない。一方審判にしても、神でない限りは必ずしも過失がないとも云へない。故に或る投手は、どの審判にも手心はあるもので、一度スライクをボールにすると、其後にはボールをストライクにして理合はせをするものだ、と云ふが、私は決して之を信じない。その理由は、手心の如何と云ふにあらすして、私は絶対的に審判を信頼するからである。何とならば審判の位置は、最も球を見るに適した所で、審判其人から云つても、球のみを見つめて、最も公平な判断を下さんとするに相違ないからである。投手の位置は、審判のそれよりも遠く、且つ自分の投げた球に對して一種の慾目もある、さう思つて審判に萬事を任せるのが最良の方法である。

バッテイングの秘訣

(一) 名打者となる要素

この意氣

突撃！突撃！突撃！打者が一度ボックスに立つ時は、満身突撃の意氣を以て投手に對峙せねば

ならぬ。飽迄も突撃的態度を以てあらゆる猛球に突進するのである。球を恐れ、球から追立てられる人は、決して強打者たるの資格の無い人である。かくて三度續けて三振を喰つたら、四度目は三度本塁打を飛ばした氣になつてボックスに立つがよい、その位の度胸が無くては、球は打てるものではない。

バットの握り方

大概の打者は重いバットを選ぶ傾向があるが、それは大變な間違である。重いバットを持つ人は、バットを振り廻はすといふよりは、バットに振り廻はされる惧がある。手ごろのバット、先づこれを選んで十分に振り廻はし得る呼吸を悟り得ねばならぬ。

バットの握り方は頗る肝要である。これは一言にしていへば「最も持ちよい所」を握るのが一番である。或る人は両手の間を少し明けて持つ、即ち有名なタイラス・カップの持ち方で、蓋し結構な握り方であるが、近頃の強打者は多く両手を附着し、尙出来る丈に密接の度を強くせよと説く人が殖へて來た。若し諸君がカップならばそれまでだが、それでない限りはやはり多くの強打者がなす方法に従ふのが安全であらう。カップといふ人は、斯界の天才であるから、全部この

人に従はんとするのは、甚だ困難な場合が多い。(我國でも六大學リーグの強打者は悉く兩手を密接につけてゐる、時に稻門の天下久慈の兩君が五分位間を置いて持つてゐるのを見受ける)

バットの均衡

バットの握り方は前記の通りであるが、サテ如何なる部分を握るべきかといふに、セオリーは均衡の取れた所を持つてと教へてゐる。或人はバットの尖端から三四寸の所を握るが、何れもそれで均衡が取れてゐるならば差支はない。併し概していふと、バットは尖端から三四寸の所にバランスを取るべき點があるとしてある。故に何れかを選ばんとする人は、後者に従ふ方が無難であらう。強打者として名高いフランク・シユルツは、バットの尖端を持つので有名であつた、本壘打王ルースも同様である。併し同じ本壘打を得意とする人でも、シスラーは尖端から三四寸の所を持つ人であるから、必ずしも尖端を握るから、大物打ちとは云へない理窟である。

視力とバット

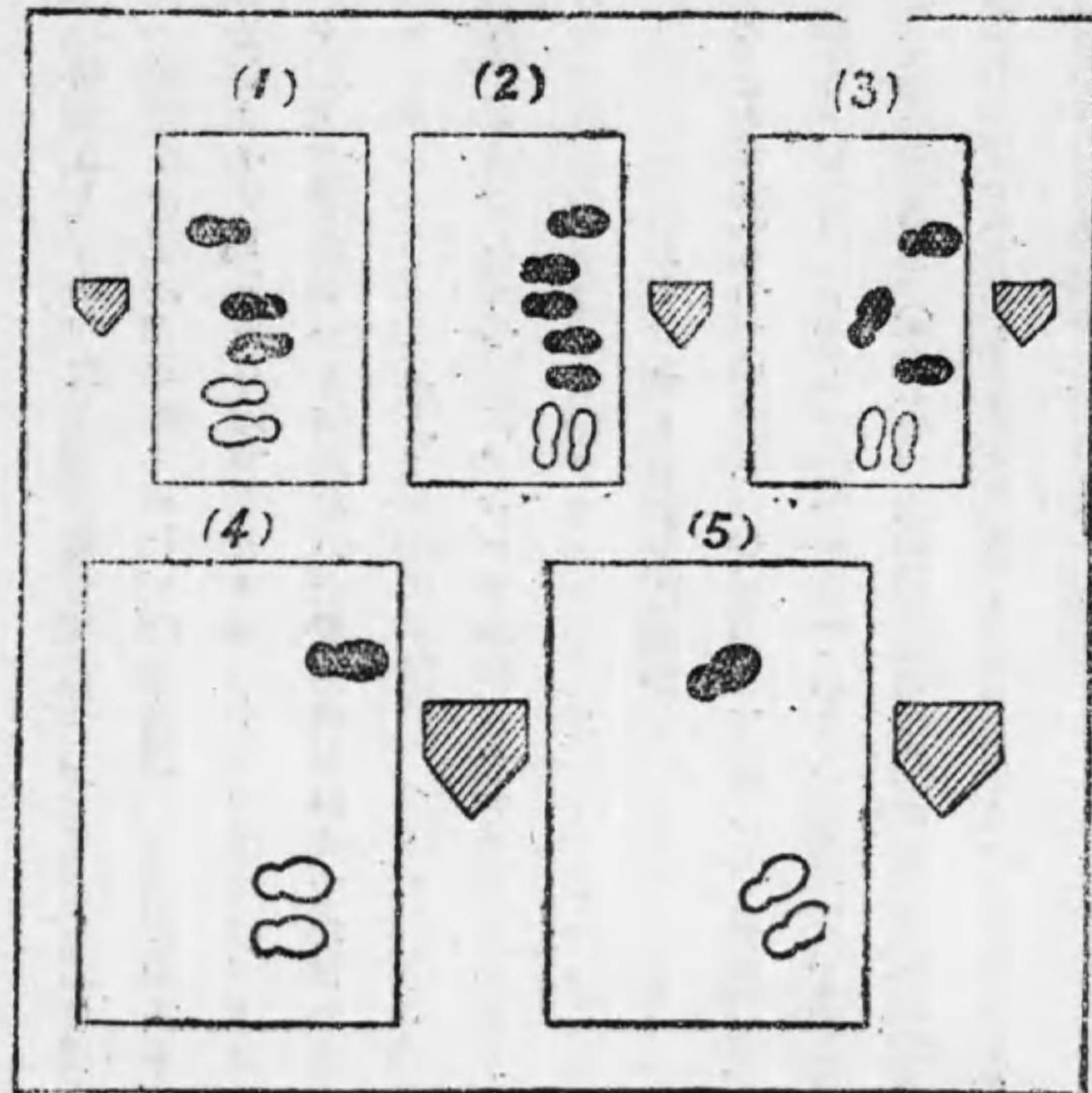
強打者の中にもピリー・キーラーの如くバットを短く持つてチヨコ振り(チヨーク若くはチヨップ)をする人も澤山ある。現今糾育ヤンキー軍の名監督ハツギンス君の如きも、このチヨーク

ーに屬する人であつた。初歩の野球家にして球から逃げ様とする惡癖のある人には是非この打ち方を御勧めし度い。米國大リーグの一流選手で、この振り方をする人は、重に視力が餘り強い人でなく、バットを長く持つて振り廻はす人の視力は、頭抜けて鋭いものでなければならぬといつてゐる。成程さうかも知れない。視力の強い人でなければ、強打者になる事は困難である。

ワツグルの方法

打者が投球を待つ間に、バットを色々な方法で動かすモーションを稱してワツグルと云ふ。極めて少數の打者は、このワツグルをしないで、バットを肩にかついで靜かに投球を待つ人もあるが、多くは絶えずバットを前後に動かすのを見受ける。一流の投手になると、このワツグルの調子をよく見計らつて投球し、打者をして甚だしく狼狽せしめんと留意するものであるから、打者は餘り大きな振り方をせず、極めて小さい範圍に於て地面と平行に、緩かなるワツグルを続けるのが必要である。(大正十三年の全國中等學校野球大會選手には、可なり不注意なワツグルや、稍やキザに見えるやうな行爲を敢てする選手も二三見受けた。大に注意したいものである)

打球の姿勢



圖面説明—第一圖はスピーカーの蛇行ステップ。第二圖はスミスの小走りステップ。第三圖はグローの畸形的ステップ。第四圖は理想的のステップ。第五圖は學ぶべからざるステップ

よい視力に次いで打者に必要なものは、打撃の姿勢（スタンス）で、よき姿勢はよき踏み出し方を導き、やがて優れたるバットの振り方に歸着するものである。蓋しこれは打撃に關する三大要點で、好打者たらんとするものは、殊に十分の注意を拂つて研究せねばならぬ重大なポイントである。概して名打者のスタ

ンスを見るに、極めて自然に兩足を揃へてボックスに立ち、少しも固くならぬ所に特徴が見える。而して愈よ打撃に移る時は、千遍一律、十人が十人共、前方の足を球の方向に踏み出して猛撃を試みる。圖に示す姿勢の中グローやカーリツスル・スミスは、殆んど全身を打手に面して立つを以て、勢ひ踏み出す足は、三疊寄りになると思はれるが、彼等は打手がワインド・アップをすると同時に、姿勢を變じて行くので、バットが球に出逢ふ刹那には、他の名打者と少しも違はぬ姿勢になつてゐるのである。有名なる強打者ナボレオン・ラヂョイエも同様のスタンスであつた。

踏み出しの種類

愈よ打球の刹那に入る迄には打者によつては二歩も三歩も踏み出す人がある。就中有名なる踏み出し方は、スピーカーの蛇行型のステップで、第一圖に示すが如く、極めて自然に踏み出すものであるから、米國に於ても優れたる模範として尊ばれてゐる。當時有名なる名打者として謳歌せられるシスラー。ホーンスピーを始めとして、エルマー・スミス。マツクス・カレーなども同様の型を示して居る。

天才的の型

第二、三圖に示すは、スミスとグローの奇抜なるステップであるが、此の如き複雑なる踏み出し方は、餘程勝れたる視力の持主でなければ不可能としてある。グローはスミスの如く、多くの足数を踏み出さないが、時としてはボツクスの中を、走りながら打つ事があるさうである。かうなると踏み出すのでなくて、走ると云ふ方が當つてゐる。例のカップも可なりボツクスの中で荒れ廻はるので、この種の打者は投手に取つて甚だ有難くない人々として見做されてゐる。

理想的の型

最も無難にして誰にでも出來得る踏み出し方は、第四圖に示すもので、又多くの學生チームの選手が取りつゝある最上のやり方の様に思はれる。唯特に注意すべきは、球を打つ刹那は、踏み出した足が地上に觸れる前でもなく、又その後でもなく、地上に觸れると同時になければならぬ事を記憶せねばならぬ。さうして踏み出す前は、兩足を揃へて置くのは前述の通りで、踏み出す時足を高くあげ過ぎてはならぬ。第五圖は最も悪い足の踏み出し方を示したものである。

バットを平行に

よき視力、よき姿勢、よき踏み出し方が修得された人は、更にバットを平行に振る練習に没頭せねばならぬ。何故バットは平行に振らねばならぬかと云へば、要するに球に當る可能性が多いからである。球の飛ぶ道を横に振るのと縦に切るのでは、當る範圍に非常な相違のある事は、まぎれなき事實である。バットが平行を缺いて振られる時は、幾分縦に切る場合に近附いたものと見て差支ない。

球を見分ける事

假令強打者でなくとも、よき打者となる事は必要である。よき打者とは球をよく見分ける意味で、決して悪い球を打たぬ人を云ふのである。これが先づ出來ぬ位では、決して名打者として活躍する事は出來ない。高級の試合にありては、球を打ち得ずとも、投手をして七乃至十個の投球を、一回の打撃完了迄になさしめた打者は、功勞者の一人として認める事になつてゐる。

よき打者は必ずよきバンターでなければならぬ。されどよきバンターたらんとして焦る結果、走りながら球を打つやうな事は禁物である。昔クリーブランド・チームにゼエッセー・パークトと云ふバントの名人がゐるが、此人の残した教訓に「沈着いてバントをせよ、早く走らうとす

るよりも、野手が取り悪き所にバントする心掛が肝要である。若し打者が野手に二歩餘計な足勢をかけるならば、此方は其間に十歩を走る事が出来る」と云ふのがある。成程うまい事を言つたものだ。打撃は難く、守備は易い。されば初心者のとるべき守備の練習は、打撃の十分の一位にして、後の九分は打撃一方に没頭すべきである。

(二) ステップ・インとタイミング

唯この一語

「打手からステップ・アウエーするな」打撃の要諦は、この一語に盡きてゐる。ステップ・アウエーと云ふ事は、右利の打者なら、左足を打手の方向へ踏み出さないで、三塁の方へと、云はゞ逃げ足になる事で、少なくとも打手と、捕手とを連絡する線上に踏み出すのは、打撃に成功せんとする人の第一義として心得ねばならぬ主要な教訓である。今「少なくともバッテリ線上」と云つたが、人によりては、その線上よりも、更にステップ・インして踏張るのもあるからである。さうしてか、る人に限つて何れも強打者の名を謳歌されてゐる。

例外の二偉人

物事に例外は免れない。昔も今も、ステップ・アウエーする人で、名打者と云はれる人が尠くないのも不思議である。例へばシンシナタのジョージ・バインズ。ブルクリンのミルトン・ストツクなど、その代表的の人物で、これ等の二大打者は、甚だしく足を引いて打つ人であるが、いつも猛烈な火の出るやうな球を打つてフワンを狂喜させてゐる。されど若し彼等がステップ・インして打つならば、更により以上の効果を擧げるに相違ない。その證據には、若し彼等に對抗して立つ投手が外角の低い所へ流れ込むカーヴにコントロールを失はなかつたならば、流石の彼等も猛威を振ひ兼ねるではないか。それでも全然無力になる程閉口はしないが當つてヒットになるにしても、云はゞ當り損ひと云つたものが多いのである。

彼等が三振する率を見るに、壘の真中、若しくは内角の球で一つやられる間に、外角の低い所を通されると十回位は、空振するか又は看過してストライクに取られてゐる。

ステップ・アウエーする損失は、數字を以て表はす事は出来ないが、彼等の名家にして尙且つ然りであるから、大學チームの選手などにありては、その利害得失は、更に大なるものがあるであらう。

和製バース

東都六大學リーグ選手の中で、著しくステツプ・アウエーする人は、早大の投手竹内君である。明大の元氣者林君も、可なりこの傾向を持つてゐる。従つて同君の弱點は、外角の低い所で、其所を通されると、屹度一壘の方向へ弱い球を打つのが判を押したやうである。明大の強打者と謳はれた大門君も、林君程ではないが、決してステツプ・インする人ではなかつた。それにも拘はらず、大正十二年の秋四割二分九厘の高打撃率を得たのは、日本のバースたり、ストツクたり得る名手と云つて差支ないであらう。

大毎チームの猛打者森君も、やはり足を引く方では、代表的の選手である。あのやうな烈しい振り方を持つてゐる人であるから、この癖さへなかつたならば、更に恐るべき打者となり得たであらう。

コレクト・タイミング

「踏込んで打つ」の次に來るべき秘訣は、コレクト・タイミングと云ふ事である。即ち球の速力を正確に判断して、それに應ずる振り方をする事で、平たく云へば、時を見計らつて、丁度好い

所で、バットを球にミートさせる事である。米國の野球界で、苟しも名打者の烙印を押された人は、悉くこのタイミングに長じない者は無いが、一人水際立つた名人を擧ぐれば、恐らくウイリー・キラーの右に出づる者はないであらう。

キラーは一八九四年の頃、巨人軍の名監督マグロー將軍が、バルチモーアのオリオレス俱樂部で活躍した當時、その股肱となつて健棒を揮つた瀟洒たる小粒の人で、マグローと共演するヒット・エンド・ランの妙技は、米國の野球史上、今尙燦然たる光輝を失はぬもので、キラーの前にこれなく、キラーの後に、また見る能はざるものとしてある。マグロー將軍は、その自著「私の野球生活三十年」の中にも、其頃の思ひ出を可なり會心の筆で叙述し、當時飛鳥をも落す勢を示した紐育巨人軍を四回連敗せしめたる光景を次の如く語つてゐる。

マグローの自叙

「此年（一八九四年）の野球期の最初に襲來したのは、當時の最強チームたる紐育巨人軍であつた。彼等の一行は監督ジョン・ワードの統率の下にチャールレストンで猛烈なる春期練習を積み、紐育への歸途、バルチモーアを訪れて、我等と會戰の約を結んだのである。巨人軍は今尙速球の

神と稱せられるエーモス・ルーシーを初めとして、ミーキン。クラーク。ウエスター。ベルトなどの大投手を揃へ、威風堂々として向ふ所敵無き概があつた。バルチモーアのフワンは、宛がらアチラの來襲を受けたローマ人の如き畏怖の感を抱きつゝ、彼等を迎へたのは、誠に無理からぬ所である。所が意外又意外、我等のオリオレスは四戦四勝して、米國最強のチームを以て自任しつゝある、大都市の代表者をして、全く顔色無からしめたのであつた。而も我等が發明したるヒット・エンド・ランの新戦法は、豫想以上の威力を發揮して、第一回戦の初めから、狙ひ打の名人キーラーと私とが謀し合はせて行つたトリックが、マンマと効を奏して確實に勝因を作り上げたのである。勿論巨人軍の連中は、そんな作戦があらうとは知るに由なく、フード監督は「馬鹿に運悪く、人の居ない所へ球を打たれたものだ」と苦笑したに過ぎなかつた。回を重ねるに連れて、遂にこの戦法を看破したのは、流石一流の選手を集めた強チーム丈けの事はある。其後彼等は熱心練習して、このコツを覚え、それが漸次傳播して、このヒット・エンド・ランは今では三歳の童兒も知らぬものはない位、寧ろ平凡な戦法となつたのである」云々

因にマグロー將軍は、其後八年を経て、二十九歳、末だ三十歳足らずの身を以て巨人軍の監督

となつた。其の時キーラーは既に引退してゐたので、彼はブレスナハン。マギニチー。マクガーン。マーチス及びギルバートの五大選手を引率して、オリオレスと袂を分つたのであつた。

キーラーと云ふ人は

キーラーと云ふ人は、野球大家銘々傳中で最も小さく、且つ最も軽い人であつた。彼の體量は、僅かに百四十ポンド（我が十六貫八百目）に過ぎない。然るに不世出の名打者として、今尙吾人の記憶から消えない所以は全くタイミングが上手であつたからである。身體の小さい彼は、勢ひ最も小型のバットを使用し、握りの先はせいぜい十二吋乃至十五吋に過ぎなかつた。だから彼のバットに球の當る點は、五六寸の間で、其所に偉大なる仕事が出来上るのであつた。彼が球に向つて踏み出す態度は、宛がら猫が水溜りのある街頭を飛び越えるやうに、輕快の一字で總てが盡きてゐる。この微力、倭軀の人の眼力は、又素破らしく鋭いもので、彈丸の如く飛來する球を、どうすれば球それ自身の力を利用して、遠距離へ打飛ばし得るかを、電光の如き速度で、一瞬間に看破せずには置かなかつた。球の力を利用して云ふ事は、換言すれば、球の有する恐ろしい力に逆行せずして、打撃によりて方向を變化させてやる事なのである。さうなると球は、

自分の持つてゐる力によりて、反對の方向へ撥ね返らなければならぬ。さればキラーは球の來た方向、即ち投手から中堅へ向つて打つ場合は殆んど無く、必ず右翼若しくは左翼へ打ち分けてゐた。これをするには必ずしも大した力は要らないので、球に負けない範囲内で、軽く、寛やかに、而も自然な態度で目的は達せられるのである。

打撃の藝術味

キラーの秘訣は、丁度巧妙な拳闘家が、敵の出て來る鼻を見計らつて一撃を呉れるやうに、相手の有する力を何處迄も利用しやうと云ふのである。それにはタイミングと云ふ事が、どれだけ必要だか分らない。拳闘家が敵の出鼻を狙ふやうに、打者は球の速度や廻轉を判斷して、程よい刹那を看破しなければならぬ。キラーと云ふ人は、何處から何處迄もキチンとした姿を見せた人で、身體にピツタリとついたユニホーム（これは恐らく快速力を有する選手に共通な點であるが）靴はいつも綺麗に磨き上げられ、サ、クレ一つ見出し得ない程手入れが行届いてゐた。彼が潇洒たる風采を、此の如く整頓した服裝に包んで、ボックスに立つた時、丁度美しい一流の踊り娘が見物人の魂を迂頂天にさせずには置かぬソロー・ダンスを開始する前の一刹那のやうに、

計り知れぬ打撃の藝術味を受入れる以前、早くも風采そのものから放射する魅力によつてウツトリとせざるを得なかつた。

我國のキラーは

現代の我が選手中、キラー型の打撃をする人は、慶應に多いやうに思はれる。第一打者の大川君、二番打者であつた土肥君、桐原前主將など最も代表的である。一體タイミングと云ふ事は、殊に慶應では八釜しく研究されてゐたやうで「球を引つけて打たずに、成るべく踏み出して打て」とは三田一流の打撃のやうに見受けられた。これは恐らく同軍をコーチしたる巨人軍のシェーファーが残した感化ではあるまいか、立教の第一打者であつた荒井君も、可なりバットを短かく持つ人である。明大にありては、第一打者の二出川君が、誠に無理のない打ち方をする人で、早大の大橋君が、得意とするイン・ドロップを引かけて、左翼方面へ打飛ばす氣合は、キラーの所謂「ヒット・イットセルフ」を會得したものであらう。去秋の打撃率でリーグの最高位を得たる明大の梅川君は、キラー型のやうに目立つ程短かくバットを持たないが、球の勢を利用して、なだらかに打ち出す姿勢は、極めて美事なものである。早大では山崎君、水原君、河合君な

どが、何れも同型の打者で極めて自然な打ち方を見せてゐる。

打撃の新傾向

近頃我が野球界に於ける名打者が一齊に有する傾向は、バットを長く持つ人、短かく持つ人の別なく、一様にタイミングを重んじて、鋭い振り方よりも、樂に振つて、而も緊要なポイントで、バットを球にミートさせんと苦心する傾向が著しく見える。上手な人になればなる程、この傾向が露骨である。例へば早大の井口、有田二選手の如き、明大の熊谷君の如き、同じくバットを長く持つ人であるが、帝大の東君、慶應の岡田君、大毎の森君などに比すれば、その鋭さが極めて少なく、空振した時などは、丸で冗談して振つたやうに見える。それにも拘はらず、球が程よく當れば、猛烈な勢で飛ぶのであるから、打撃の秘訣は、振りの鋭いよりも、一にタイミングにある事が明白である。

(三) 打つか、待つか

野球競技に於ける攻撃の秘訣は、打ち易き球ならば、何時でも進んで打たんとする、所謂ヒツ

ティング・システムを取るべきか、それとも先づ投手の疲れを待つて徐ろに亂撃を加ふべき時機を捉へんとする、所謂ウエイティング・システムに出づべきであるか、變幻窮りなき野球競技は、必ずしも一方に偏するを許さざるも、さりとて原則として先づ選ぶべきは二者の中何れであらうか？、東都六大學リーグ・チームの行き方を見るに、早稻田は昔から「よく待つ」チームである。慶應は近頃飽迄もヒツティングに出んとしてゐる。明大はどちらかと云へば、後者に屬するもので、殊に危機に臨むと、打たんとして悪球を振る傾向が著しい。甲子園に於ける全國中等學校野球大會にも、この二種の傾向が、コーチによつて鮮明に區別されてゐる。打つべきか、待つべきかは蓋し、我が野球技を論ずる者の多く迷ふ所であるに相違ない。何となれば前者は事實に於て多少の損失あるも、氣に於て先づ敵を呑むの益があり、後者は選擇宜しきを得ざれば、退嬰に失する恐れがないでもない。

スフィンクスの謎

「四球」これは投手が出すものであるか、打者が出させるものであるか、スフィンクスの謎の如く、甚だ難解の問題ではあるが、要するに、一流の打者は、より多くの四球を得る者であり、一

流の投手は、より少ない四球を出す者である丈けは、明瞭過ぎる程動かし難き事實である。換言すれば、打撃術の基礎的秘訣は、投手をして出来る丈け多くの球を投げさせるにあり、一方投球術の基礎的アートは、出来る丈け少なく投球して打者を料理するに存する。

この見地から歸納して、私はデトロイトの遊撃リグネーを以て、當代得易からざる名打者として推舉するに憚らない。彼が昨年残した成績を一瞥すると、合計一四七回の試合に出でアット・バットの數四九九、此間一〇二の四球を得、打撃率は、二八九である。

假りに昨年ア・リーグで第一位を占めた本壘打王ベープ・ルースの成績を見るに、彼は試合數一五三、アット・バット五二九、四球一四二を得て居る。ルースの得た四球の中には、投手が態と出したものが甚だ多い事を記憶せねばならぬ。而してルースは試合數に於て、僅に六回リグネーよりも多きに拘はらず、アット・バットの數は一〇三の多きに達してゐる所を見れば、球を待つ點に於て、リグネーは遙かにルースを凌駕した譯である。

名手の記録

苦利分蘭のジャミソンは、ア・リーグの打撃成績で第二位を得、ルースに次ぐ人であるが、試

合數一四三で、リグネーよりは四回少なく、而も打撃はリグネーより多き事一九五で、之に伴ふ生還數は、十九を凌駕するに過ぎない。四球はリグネーの一〇二に對して、彼は四七を得た。

例のジョージ・シスラーは試合數一五一、アット・バット六三六、四球三一、現役にして一代の名監督たるトリス・スベーカーは、試合數一三五、アット・バット四八六、四球七二、而して打撃率は、三四四の高率を得たが、生還數はリグネーに比して十三を超過したのみである。

話は少し枝道に入るが、成績の上から見たるシスラーとカツプとの比較は甚だ教訓的であり、且づ興味深いものである。カツプは試合數一五五、アット・バット六二二レスボンシブル・フォーア七四（ランス・レスボンシブル・フォーアの約語にして、自分の打撃によりて味方を生還せしめたる數を云ふ、これは從來我が記録家が手を附けないものであつたが、去秋東京朝日新聞が五大學リーグの成績を掲載した時『責任得點』として初めて發表したものである）而して四球八五を得たるに對して、シスラーは前記の如く試合數一五一、アット・バット六三六で稍や同數の立場に置かれながら、三一の四球を得たるのみである。この相違は何を語るかと云ふに、シスラーの眼力が恢復せざる爲め、選球が十分ならずして、悪球にも釣り込まれたる證左である。若しシス

ラーにして前年の視力を取返し得るならば今年度はより以上の四球を得て敵投手を困らすに相違ない。

最も理想的に調節の取れた打撃成績は、今回市俄古白踏軍の監督となつたエデー・カリンスの獲得したものである。試合数一五二、アット・バット五五六、レスボンシブル・フォーア八六、四球三九、而して全體の打撃率は、三四九。何と云ふバランスの取れた成績であらうか、昨年度に於けるア・リーグ中、斯の如き調節されたる打力を示したる者は恐らく他に一人も無いであらう。

諺に云ふ通り『餅屋は餅屋』で、古強者は視力が鈍り、足力が減つても何處かでその缺點を補つて行く。白踏軍のレイ・シャルクがその一人で、試合数五七、アット・バット一五三、而して二一の四球を得てゐる、彼の打撃率は、一九六ではあるが、二七二を得たるボツビー・ジョンズが、アット・バット三九三にして僅かに二〇の四球を得たるに對照すれば如何にシャルクが恰憚りに立廻つて投手から四球を獲得したかを知るに足る。又ボツブ・ミューゼルは、三二五の高率を得たる名打者であるが、アット・バット五七九を算する間に、シャルクよりも十一の四球を餘計に得

たのみである。

惜しむべきは白踏軍の第一打者アーチデイーコンである。若し彼がもう少し注意して、選球に努めたならば、恐らく理想的第一打者として推擧されるであらう、昨年度アット・バット二八八にして、僅かに四〇の四球を得たのは物足りない。

紐育ヤンキースのウィットも、第一打者として人後に落ちざるものである。彼の昨年に出ける試合数は一四七で正に前記のリグネーと同数を示してゐる。而してアット・バットはリグネーよりも一〇一回多く、四球の数五七の少ない所を見ると、打者としては、リグネーに比して遠く及ばざるものがある。

恐ろしい『待つ人』

サテ以上掲げたる事實は、畢竟するに何を意味するかと言へば、依然として我がリグネーは、嶄然として秀でたる名打者であると言ふ事に歸着するのである。見よ、彼は四球を得たる數に於て何人にも劣らず、レスボンシブル・フォーアに於ても人後に落ちないではないか。彼は投手にイヤと云ふ程投球させてゐる。投手は彼の前に立ちて恐らく肩の休まる暇が無かつたであらう。

エデー・カリンズやレー・シャルクなども、此意味に於てリグネーの壘に肉薄したものである。之に反して投手は、打たれながらもジャミソン・ミューゼル・シスラー・ウィットなどに對しては、樂な打球が出来たのである。これ等の人々は、時に悪球を投けても打つて呉れるが、リグネーの仲間になるとさうは行かない。投手にとりてこんな厭な事は無いのである。

何故「待たれる」のが投手に取つて辛いかと云ふに、云ふ迄も無く澤山の球を投げさせるからである。さうして其間に破綻が生れ出ると、過勞の隻腕は、とても翻勢を挽回すべき餘力の持合はせが無い、而して必然の結果、止むなく冷酷なる「ノック・アウト」に當面する悲劇が起つて来る。若し打者が全然投手の球を待つ方針でボックスに立つものとするれば、從來の経験に徴して、尠なくとも一試合に二五〇の球を投げねばならぬであらう。然るに一流所の試合に於ける投手の投球数は、九五乃至一〇〇位の邊であるから、敵に待つ方針に出られたが因果、投手には普通の試合よりも、二倍若しくはそれ以上の球数を投げねばならぬ事になる、これでは耐つたものではない。

要するに攻撃の要諦は、敵投手を破綻の淵に陥れる點に存する。而して私の経験としては「待つ」と云ふ事が、最もこの目的に適してゐると思ふ。取分けコントロールの少ない投手にとつては、更に一層の効果が示されてゐる。レスボンシブル・フォーア及び自分の生還数が「球を待つ人」によりて多く恵まれるのは、動かし難き事實であるから致し方がない。されども茲にポップ・ミューゼルの如き人があつて球を遠慮なく打飛ばして、さうして立派な成績を擧げてゐるには驚かされる。かかる種類の打者は「球を待つ人」の群れよりも、頭抜けて天才肌の名打者であると解するより道はない。

四球の研究

四球の研究！この問題は、單に打者が學ぶべきものでなく、投手、監督の任にある人々も多大の注意を拂はねばならぬものである。凡て野球競技場に現はれたる事實其物は、時に單なる出來事として看過される場合もあるが、之を綜合して一つのものとして見ると、其所に重要な或物となつて吾人を驚かす事がある。「四球」の如きも或はその一部ではなからうか。

以上の見地によりて大正十二年秋東都五大學リーグが残した戦績を見るに（以下記録はアサヒ・スポーツに依る）早大は六回戦つて二三の四死球を得、明大は十回戦つて三七、慶應は八回戦つ

て二七、立教は八回戦つて三五、法政は八回戦つて十九を得てゐる。此中死球の数は極めて少数であると信ずるので、假りに前記の數から歸納すると、早大は何處迄もウェイトして戦ひ、法政は最も多く待たざるものである。而して早大が第一位となつたのは、必ずしもこれのみが原因ではあるまいが、原因の一部を形成したとは云ひ得るであらう。

之を個人の打撃振りから見ると、早大の井口君はアット・バット十七にして十一の四死球を得たるを筆頭として立教の太田君はボックスに立つ事三〇回中四球九を得て之に次ぎ、以下立教の荒井君が二六の中七、早大の山崎君が二九の中七、明大の大門君が三六の中八、立教の大仲君が二三の中六などがある。

井口君は有名なる「待つ人」である。二ストライクス迄平氣で引延ばして最後の二撃に不動の自信を持つ點に於ては當代の一人者であらう。東洋の野球界に此人あるをリーグネーに知らせてやり度い位である。太田主將が九の四死球を得たるは、前述したレイ・シャルクの行き方であらう、荒井、山崎二選手は共に第一打者として待つ點に於て成功し、且つ打撃率から見ても共に三割打者であるから、位置に准じて遺憾なき活動をしたものと云ふ事が出来る。

彼我の名打者比較

明大は第一打者として時に二出川君時に梅田君を用ひたが、共に一個の四球を得たるのみなのは、東洋のアーチデューコンを以て任ずるものか、慶の大川君病んで代りたる主將の桐原君は、二割一分二厘の打撃率ながら四の四球を得て、選球の鋭さを示した。大門君は明大に於ける唯一の「待つ人」である、八つの四球は、彼として四割二分九厘の高率を得せしめた所以である。レスボンシブル・フォアに於ても、彼は六を得て同僚を凌いでゐる。横澤君の四球六は流石老練、これもシャルク黨の一人である。

早大の主將有田君が、唯一個の四球を得たのみでレスボンシブル・フォア十一を得、嶄然として群鷄の一鶴たるを示したるは、正しく日本のポップ・ミューゼルと云ふ所である。イヤ彼の打撃率は三割八分五厘で、ミューゼルの三割二分五厘を凌駕する點に於て、尠くとも記録上、ミューゼルを以て「米國の有田」と云つて遣りたいやうな氣がする。此種の猛打者に慶の永井君ある事を忘れてはならぬ。彼は攻撃の中堅、三番の重鎮に置かれるもので、昨秋の成績は、レスボンシブル・フォア八を得て有田君に次ぐの偉勳を挙げ、打撃率は、三〇八而も四個の四球を得